

芥骨の唄

その日、私は骨になった夢を見た。
肉がすっかりこそげ落ちてしまった私。
あばらから風が通り抜け、その冷気が私を震えさせる。
その度に、カタカタ、と私は鳴った。
ああ、なんとという欠落感。
そのうち自分を保てなくなり、からから空空と崩れてしまう。
視点が急に地面に移り、酷く悲しい気持ちになった。
湿った土の上で、白かった私は茶色く汚れ、まるでゴミのよう。
肉が無いからだと思った。
肉が無いから崩れてしまったのだ。
骨を組みなおして、肉を縫い合わせれば、元の形に戻るのに。
でも、周りには肉なんてどこにも見当たらない。
あるのは、泥と骨だけ。
そう。威圧するほど大量な骨だけなのだ。
優に私が三十人は作れるであろう骨の山。
でも、その山を見て少しだけ嬉しかった。
私だけじゃないのだと。
骨になつてしまったのは、私だけじゃない。
そう考えたらほんの少しだけ気楽になった。
これからどうすれば良いのだろうか。
考えた瞬間、遠くの方で犬の鳴き声。
もしかすると食べられるのではないかと考えて。
私はこれが夢だと気づいたのだ。

無縁仏塚に手を入れている男が居る。不届きな輩だ。

ここが寺の管理する墓場で、そこが死者の眠る塚だということを知っての狼藉だろうか。この歳になって説教するのは苦痛でしかないが、これからを担う若者の為にと歩き出す。

山を拓いて建てられたこの寺は風通しも良く、夏なのに寒いくらいだ。周囲には木々が揺れ、葉同士が擦れる音に清涼感を感じる。蝉の声が寺中に。乱立する墓にぶつかり共鳴する。

塚の近くに行つて、初めて男には連れが居ることが分かった。背格好からして女性だろう。彼女を見て、心臓が大きく鳴った。持病は無い。自分は破戒僧だと割り切り酒は飲むが、このようなことは初めてだ

まるで清流のように流れる黒髪。百合のように白い肌。漆うるしのような艶つやのある瞳。

同じ人間に生まれているというのに、その二色でしか構成されていない彼女は、まるで無駄が無い。故に、こころも心を揺さぶるのか。

否。これはそのような淡いものではない。歳の違いも如実だが、これは違う。

そう、あえて言葉にするなら違和感だ。

私はあの女に違和感を覚えている。

つい足を止めて、自己問答していたことに気づく。

前を見れば既に二人は塚を離れ、寺に居た。大分長く自問していたようだ。

そして、彼女と目が合う。

二十メートル程離れたこの距離で、本当に視線が交差したかは疑問だが。それでも彼女はこちらをずっと見続けている。

目が離せない。言葉のままの意味だ。視線を逸らすことができない。

年甲斐もなく、何をこころも執着しているのだろうか？ 既に疚やましさすら覚えている。

男が女を連れて、こちらに歩いてきた。

その間もずっと、私達は見つめ合ったままだ。まるでお互いを監視するかのよう。警戒するかのよう。何か目を離せない理由でもあるかのよう。

近づいてくる。距離が縮まる。お互いの表情すら確認できる。

——嗚呼。そういう事か。

長く生きてみるものだ。まさかこうなるとは。確かに記憶とも合致する。

全ての違和感が氷解し、お互いの距離も零となる。

お前の孫も随分と美しくなったものじゃないか。あの頃とは大違いだ。

娘が手を引かれ走っていく。最後まで私達はお互いを見つめ続けていた。

あの夏の日を思い出す。あの夏を。あの姉妹を。

あの、事故を。

「おおう！ 優治君。重役出勤だね」

遅刻をした。

いや、そんな言葉で済ませるには軽すぎるくらい遅刻をした。

とりあえず、俺が通っている日計高校は朝の補講（一、二年は必須）を含めると、早朝七時半から授業が開始される。

んで、今は午後の五時。

もちろん、補講の後にある九時からのホームルームもすつ飛ばし、一、二時間目の授業はおろか、混雑を極める昼食も、その後の清掃も全てスルーして、午後からの眠気との闘いでもある五、六限目を知らん振りして、学生を解き放つ帰りのホームルームの方もあえてシカトを決め込み、現在に至る。

言ってしまうえば今は放課後で。たった今、俺は登校してきたばかりだ。

だだっ広い、机が綺麗に並んでいる教室。机を囲むように後ろには生徒の作品や、胸像、額縁に入った誰が描いたかも分からない絵。床は茶色の板張りで、湿気が多い夏には歩き辛い。黒板の前にある教壇には、黒い液体の満たされた珈琲メーカー。その隣には茶色い紙袋があり、その中にはコップや、珈琲フィルターが置かれている。

教室に入っただけの前では、友人達が三人で携帯ゲーム機を手に机を囲んでいた。

その少し奥では、これまた二人の友人がトレーディングカードを片手に、机を並べている。

ちなみに、ここは美術部である。見ての通り、ゆるい部活だ。

「それで、どっちに混ざる？ こっちは今狩り終わったんだけど、瀬尾が“空竜の翼”が十個いるらしくて、クエ回してる最中なんだけど」

それは面倒臭そう。彼らがやっているのは何が剥ぎ取れるか確率なゲームだけに、今日中に終わるか分かったもんじゃない。もちろん、俺も加われればパーティーの最大数になるから、効率は良くなるんだろうけど、今はそんな気分じゃない。

「というか、優治君“空竜”死ぬほど狩ってるもんね。“災竜”に行くとき誘うよ」

ああ、いや、と声を捻り出そうとして、それを察してくれたゲームの用語全開な友人は、次のクエストに向けての準備を始めてくれた。

俺はいつだって、こんな感じなのだ。

ちっとも自分の口が回ってくれやしない。

自分に毒づきながらインクと珈琲の匂いを掻き分けて、俺はもう一つの机の島に向かう。

「あつ、僧正君おはよ」

部長おはようございます、と言いかけて、喉に引っかかりがあるのを感じた。思えばこれが今日最初の一言目なのだと気づいた。

「まったく。こんな時間まで寝ていたのかい？ この粗忽者」

喉の調子を整えていたら、目の前の突くような目線に思わずたじろいでしまった。

視線の主は整った顔で、まるでゴミでも見るかのように俺を睨む。いつものことだ。この友人は俺を軽蔑し、侮蔑して止まないのだ。

俺、僧正 優治はいつだって、目の前の友人、秋山 知聡に劣等感を抱いている。

「秋山君、そんな風に言わなくても良いじゃない」

女性らしい気遣いで、俺を庇ってくれる部長、古賀 貴衣は手に持っていたカード越しに知聡を睨んだ。

その気遣いが、俺を更に落ち込ませる。

それは女性に庇ってもらわないといけないほどに、俺は人間として弱いのだと証明されているかのような気がしてならないから。

俺は弱い人間なのだ。この世で一番弱いのではないだろうか、真剣に思っている。

自分が無く、常に流されるままに生きている。

周りがいつも俺に死ねと言っている錯覚——じゃないかもしれないが——を覚える。

意味が見出せないのだ。この世に存在する自分に。

何をしても良いか分からない。自由にして良いと言われると戸惑ってしまう。

自殺をする勇氣なんて無いくせに、生きて良いのか不安になる。

ただ生きるのが、ただ怖いのだ。

理由だ。

理由が無いのが、ただただ辛い。

「良いんです部長。この粗忽者にはこれくらい言わないと、いつまで経っても改善しない」

呆れたかのように溜め息を吐いて、白い指が手に持つカードに伸びた。

「ハンド三枚落としてください、部長」

俺には向けられない優しい笑みで、知聡は机に置いてある一枚のカードを指でノックする。

それが決め手だったのか。ああ、と部長は落胆した。どうやら勝負は知聡の勝ちで終わったようだ。

悔しそうに机に広がったカードを回収していく二人。

「それで僧正君は今日、何で遅刻したの？」

部長は手際よくカードを十個の束に分けてシャッフルしている。

小さくてほんの少しだけ赤み掛かった綺麗な指。二つに結われた肩口までの真っ直ぐで栗色の髪。眠たげな目元。あまり鼻は高くなく、身長も凹凸も目立たない。まあ、それが彼女の方向性を美人から可愛いに決定付けている気がする。

「大方、気乗りしなかった、辺りじゃないですか？ 下らない」

そう知聡は吐き捨てながら、同じようにカードを十の束に分けてシャッフルする。同じ手順

でも、コイツがやるとまるで占い師がタロットを扱っているようで格好良い。彼の白い指に、茶色い外枠のカードが良く映えているというのもあるのだろう。

短く揺れる黒い髪に、冷たい目元。夏本番目前だというのにちっとも焼けない白い肌。拳二

つほどしかない小さな顔。その分身長も若干小さいが、それが拍車なのかひどく中性的な魅力

を持つコイツは、誰からも人気だ。

本当に俺とは正反対。

日に増して大きくなる劣等感に、いつの日か潰されてしまいうに違いない。

なんで神様はこうも不公平なんだろう？ 何も出来ない俺と、何でもソツなくこなす知聡。同じ年齢なのに、こうも違う。

でも、悔しいからと、知聡から離れることはできない。

それは、一人になってしまふのと同じだから。

俺の友達には、俺よりも知聡の方が仲の良い友達が多い。

俺が離れていけば、追うことすらしてもらえない気がする。

それは、酷く、怖い。

「夢を、見たんだ」

まるで構ってもらいたい子供のように。気づけば、そんな言葉を搾り出していた。

夢のせいなのだ。遅刻する理由を強いてあげるなら、夢だ。

「どんな夢だったの？」

部長は六枚ずつ積まれ、十箇所置いていた束を集めながら先を促す。

同じように集めて合計六十枚となった束をシャッフルする知聡。

「こんな時間になるまで続く夢を見たのかい、君は。まさか胡蝶にでもなったと言っくんじやないだろうね」

知聡は苦笑する。

胡蝶にでもなった、ああ、胡蝶の夢か。

確か“胡蝶の夢”というのは中国の思想家、荘子が見た夢だ。

ある日、荘子は自分が胡蝶になった夢を見る。やがてその夢から覚めて、彼は思う。

自分が蝶になった夢を見たのか、はたまた蝶が自分になった夢を見たのかと。

確か、そんな話だったと思う。

「うわ、秋山君。それは高校二年生が、すらつ、と出すような冗談じゃないよ」

そう部長は苦笑した。少し知的な笑い方だ。

「そういう部長だつて知っている。おい、優治。もし君がその夢を見たとしても君は決して蝶なんかじゃないぞ。それは君なんかより蝶の方が千倍はマシな思考だからだ。だから君のような愚か者が蝶の夢を見るのは構わないけど、逆は蝶に失礼だ」

「ひど。秋山君、酷いって」

「酷くなんか無い。蝶は死にたがらないからね。君の“それ”は生物として狂っているんだ。

故に、蝶のほうは何千倍もマシさ」

そんな夢を見たとすら言っていないのに。

でも、きつとそうだ。知聡が言うその理屈は間違いじゃない。

俺は生物学上では狂っている。

死にたがるなんて動物は存在してはいけない。

それは種の存続という、生命の方向性を無視したイレギュラー。

生きる意味を見出せない俺は、生きることに疲れている。

俺は静止してたいのだ。何も考えずとも良い環境に憧れている。

それはこの世で実現するのは難しい。

だから俺は死にたがる。

結局何も言い返せないまま、自分が始めた夢の内容すら話すことなく、俺は俯いた。

知聡の溜め息と、もう、と知聡を嗜める部長の雰囲気を感じた。

特に会話もなく再度始まったカードゲームを眺めていると、夏特有の湿気のせいで立て付けが悪くなっているドアが、ガタガタ、と開く音がした。

振り返れば幽霊。

いや、幸の薄そうな美術部員。同級生の神酒^{みき} 幸美^{ゆきみ}さんが居た。

腰まで伸びた長い黒髪を靡^{なび}かせて、ゴタゴタとした机をミルクのように白い手で掻き分けながら、教壇に置いてある茶色の紙袋から自分のコップを取り出すと、教壇の前の机に置いてある珈琲メーカーから少し薄い珈琲を注ぎ、ゲーム組に軽く挨拶をして（彼女はゲーム機を持っていないので誘われない）こっちに歩いてきた。

「部長、遅れました」

か細い、まるで風鈴のような儂い声で、俺にも出来なかつた挨拶を、きちんとこなす神酒さん。白い肌が、ガラスに入る黒い珈琲のせいで、やけに映えた。

「良いよユキ。いつも通り何もして無いし、毎日来ないといけないなんてことも無いし。作品は文化祭前の十月くらいにあげてくれればそれで十分だった」

そういうと部長は、神酒さんに座るよう促した。

この美術部という部活は、文化祭に作品を展示するというのが活動理由だ。

逆を言えば、十月に作品を出せさえすればその間、何をしよう構わない。それが故にこのようにゲーム三昧で自堕落な部活動になっている。

今は夏休み前の七月。作品を上げるのが遅い人は制作に取り掛かっているが、作品製作が行われているのは実質この教室ではなく、隣の美術準備室か、自分の家である。煩惱を絶つのが目的だろう。事実、作品が終わった連中はこっちで遊んでいる。

ちなみに知聡、部長の両名は五月中に作品を仕上げていたので、今年の活動は実質終了している。が、部長はこの美術室の鍵を管理しているので、毎日部活動を行っているし、知聡も何だかんだこの環境を気に入っているのか、毎日ここに顔を出す。確かゲームをしている三人組も作品を仕上げている。神酒さんは何をしろるか悩んでいるらしい。

俺は締め切りが近くないと、尻に火をつけないと何もできない人間なので、何もしていない。

焦って作品を作るので、良い作品になるはずもなく。でも締め切りに追われていないと自分を奮い立たせることが出来ないので、結局僧正 優治は絵が下手であるという評価を受けている。

まあ、落ち着いて書いたとしても下手なことには変わりはないのだけど。

「ええ、作品の方は頑張ります」

微笑を浮かべる神酒さん。

その声に、ぞくり、と震えが来た。あの耳元で囁かれるような細かい声に。彼女に野太い声は似合っていない。そう。それこそ消えて無くなりそうな、陽炎のような声こそが彼女に相応しい。そういう意味では彼女の声は理想的。本当に消えてしまえばいいくらいに実感の沸かない声なのだから。

神酒さんは手に持ったコップを口元に運んだ。

その際に浮かぶ彼女の手首の骨を見る。強く握れば折れてしまえばいいような手首。あんなにも大きなコップを持てるのだろうか？　なんて馬鹿な心配をしよう。

「どうかしました？　僧正さん」

震えがきた。彼女の脆い声に舐め尽された体は、風邪を引いてしまえばいいくらいに寒気を感じている。しかし、それが何と心地よいことか。きつとこのまま彼女の声を聞いていれば、凍傷を起こさだろう。それほどにこの声は、心を冷やす。

さつきから鼓動が早くなって痛い。

「えー、うん。ユキに見とれているところ悪いんだけど、僧正君いい加減戻ってきてー」

ああ、部長の言葉が無ければ気づかなかった。どうやら俺は、ずっと神酒さんの事を見続けていたらしい。

「すみません」

慌てて謝罪する。恥ずかしくて死にそうになる。精一杯、絞るように声を出して謝る。

「いえ、お構いなく」

本当に気にしていないように俺に微笑を返す神酒さん。その仕草は自然で、気に留めていないようで安心する。それと同時に、今までの悪寒に似た感覚の正体が分かってしまった。彼女が微笑を浮かべてくれなかったら、きつと今でも彼女を見続けていたに違いない。それこそ魅入られるように。

何故なら俺は——彼女を幽霊のようだと感じている。

あまりにも記号が揃いすぎていて、この世のものではないと思ってしまった。だから、それを否定できるのはそれが不自然だと感じたときだけ。

そう。幽霊は笑わないのだ。

「今日はどうする？　一緒に題材でも考えようか？」

部長は劣勢なのか、机に広がったカードと、手札と、神酒さんを交互に眺める。

「いえ、それよりも雑談の方が」

自分のやりたいことを、いちいち表明する彼女に好意を覚える。いや、これは同族への安心なのかもしれない。

だとしたら最低だ。

それじゃあ少し待っててね、と部長は結ぶと、ゲームに集中し始めた。

しばらく無言で（たまに部長が、ああ、とか、うう、と漏らしていたが）ゲームをする二人と、それを見守る俺と神酒さん。なんだか落ち着かない。

俺だけが勝手に焦って、勝手に緊張しているだけだろうけど。何か会話をしなくてはいけないんじゃないだろうか、気を利かせないといけないのではと、話すら出来ない俺は、悶々としてしまう。

その間に、結局また部長の負けでゲームは終わっていた。

相変わらず秋山君のデッキは卑怯だね。部長もプロッカードを焼くじゃないですか。なんて、ゲームを知っていないと分からない言葉を交わした後、部長は、お待たせ、と神酒さんのほうを改めて向き直った。

「いえ、そこまで真摯にするような話ではないんですけど」

確かに雑談だと最初に言っていたのに、そんな風に向き直られたら困ってしまうだろう。少なくとも俺はきつと俯いてしまいうに違いない。

そう？ と結局カードの束をケースに入れながら、部長は態度を軟化させた。

きつと知聡に負けて悔しかったのだ。だから流れを断ち切るべく、あんな態度を見せたのかもしれない。そんな勝手な分析をしていると、知聡の苦笑が聞こえた。きつと同じ事を考えているんだろう。

「実は今日」

神酒さんは雑談と言ったが、声のトーンとゆったりとした間が、どうしても相談をしているようにしか聞こえない。

「とても夢見が悪かったのです」

古風な言い回しだと苦笑して、会話の内容に気がついた。

まるで少し前の俺のようじゃないか、と。

そしてここで知聡が、胡蝶にでも、と煙に巻いたんだった。

同じようなことを察したのだろう、部長は知聡を横目で何度か見るが、当の本人はどうでも良さそうだ。

俺のことはどうでも良いが、彼女の話は聞くつもりなのだろう。

秋山 知聡とはそのような男だ。

「私は今日、骨だけになった夢を見たんです」

嗚呼、嫌だ。

さつきから寒気が止まない。

何でこの人は俺の心を締め付けてくるんだろう？

きつと俺のことが嫌いなんだ。

だから俺は、この人が恐ろしくてしょうがない。

それに。

それにその夢は。

「骨？ 骸骨ってこと？ 理科室にあるみたいなの？」

部長の声が遠い。

目の前で神酒さんは頷く。

彼女の目は虚空を彷徨い、誰も見ていない。

否。きつと骨になった自分を幻視しているのだ。

その幻視すら。

「穴の中に落とされてしまつて、肉が無いから崩れるしかなくて」
鬱だ。

確信がある。俺は今日これから自分の殻に籠つてしまう。

ここは辛い。家に帰りたい。

布団に包まり、外界を遮断して、息を殺して、頭が、ぼう、となるまでずっと。

みんな盗られてしまった。

その注目すら。

「中には大量の骨があつて、外には犬が」

彼女の語る全てが。

俺が手に入れるものだったのに。

去来する感情は虚しさと悔しき。

気づけば息苦しく、気づけば鼻が水で埋まっていた。

危うく泣きそうになるのを慌てて取り繕った。

「どうしました？」

神酒さんはポケットからティッシュを取り出すと、俺に一枚渡してくれた。

さつきからこの人のせいで、落ち込んだり気恥ずかしかったり散々だ。

「そう怖い話でもなかったらうに」

知聡はくだらなそうに呟く。

どうやら三人からは、彼女が話す内容の恐ろしさに、泣いてしまったのだと思われているらしい。

心外だが、そう間違っているわけでもないので否定できなかった。

確かに恐ろしくてしょうがない。

だってそれは。

「俺も、今日。同じ、骨になる夢を見たんだ」

泣いてもいないのに嗚咽を混じらせながら。俺は必死に自己弁護をした。

そう、彼女の夢の内容は、俺のものなのだ。

「同じ夢を見たってこと？」

部長の戸惑い混じりな声に頷く。

神酒さんは驚いたような顔を向け。知聡も少し関心を示したかのように俺を見ている。さつ

きまでちつとも俺に向けられることの無かったものを油に、舌を回した。

穴から外を見上げる白骨の夢を見た。

骨達は皆、理不尽さを歌っていた。

肉があれば生き返れるのだと、俺の隣に埋まっていた骨は言った。骨を繋いで肉を食らえば蘇るのだと。

でも、犬が体の一部を持ってしまった。

故に贅が落ちようと、私は生き返ることが無いのだと。

その骨の異様な存在感が恐ろしく。

俺の夢なのに、ちつとも俺に優しくないと思った瞬間、目を覚ましたと説明した。

「——大筋は一緒です」

神酒さんは半分恐ろしげに、半分訝しげに漏らした。

自分の夢と酷似しているのもあるだろうし、自分の話をした後には話されたのだから、嘘かもしれないという思いもあるのだろう。

だが、この人は純粹に不気味だと思っているだけだと思った。この人は純粹であってほしいと、疑心に捕らわれ、汚れきった俺は信じているのだ。

きつと、そういう純粹なだけの人間が居てほしいのだという、押し付けにも似た願望。

そして、俺みたいなのが近くに居てはいけないのではないかという、汚してしまうのではないかという焦燥。

前に知聡から、俺が一人で焦って一人で落ち込んでいるのが鬱陶しいと言われたことがある。今まさにそのような状況なのだろう。さつきまで興味深げに俺を見ていた知聡は、既に俺に侮蔑の眼差しを向けている。

「でも、そこまで同じなのって珍しいというか、なんというか」

部長は困ったように漏らした。

そうこれは解決すべき謎でもなく、ただの雑談。

ただ定義しにくい話題なので、こうして話題が虚空を彷徨っているのだ。

「似ているから関連付けたくなるだけだ」

そう、知聡は呟いた。

「似てるも何もほぼ同じじゃない。同じ日に、同じような夢なんて、どれだけすごい確率なの」部長は噛み付くというより、純粹にこの状況への救い主に反応したんだろう。ゲームで負けたからこつちで食いかかるといふのは、部長にしては大人気ない気がするから。

「確かに同じ日に、同じ夢、を見るのであればそれは天文学的数字だろうね。生命誕生もびつくりな確率さ。でも、似たような、夢だ。同じじゃない。そもそも夢は主観で流れる映像だ。確認のしようがないし、できるはずもない」

でも、と言いかけた部長を手で制して知聡は続ける。こいつの悪い癖だ。一度話し始めたら

切りがいいところまで話さないと止まらない。

「君たちの夢は確かに似ているけどね。穴の中にある大量の白骨。蘇る為に肉を求める骨。そして犬。これらは君たちの夢の共通点だ。だがね。言ってしまうとそれだけなんだ。後は役割もシチュエーションもバラバラだ。まず決定的に違うところは主観だね。これだけで大分夢の内容が違うだろう。分りやすくする為に、それぞれの夢を単語にして整理しようか」

知聡は椅子から立ち上がり教壇の前まで行くと、チョークを取り出して黒板の中央に縦に線を引く。線で分かれた二つのブロックの頂上に、【優治夢】、【神酒夢】、と書かれた。更に優治夢のブロックの横に更に縦線を引き、夢から一段下がった場所に上から順に【白骨群】、【蘇る方法】、【犬】、【心境】と加えて表を作る。まるで情報処理の授業みたいだ。

ゲームをしていた連中も、それを横目で興味深そうに見ている。

「見てもらえば分かるが、これはそれぞれの夢の対応表だ。説明しなくても良いだろうが、もの分かりが悪い優治の為に説明しよう」

余計なお世話だ。

「君たちの夢には先ほど言ったように共通点がある。それがこの三つだ」

【白骨群】、【蘇る方法】、【犬】をチョークで叩きながら知聡は説明する。どうやら調子が出てきたようだ。

「最後のはお互いの夢への感想だ。夢の中で自分が感じていたことだね。それじゃ実際に分けていこうか。まずは優治の夢からだ。君の夢では【白骨群】は肉が欲しいと歌っていた。だが、神酒さんの夢ではただのオブジェクトだ」

それぞれの【白骨群】の項目に【肉が欲しいと歌う】、【アクションしない】と書き込む。

「次に【蘇る方法】だ。まずは優治の方だと、骨を繋いで肉を食う。だが、神酒さんの場合だと違ってるね。こちらは骨を組みなおして肉を縫う。これは肉を補填するという考え方と肉を着込むって事なのかな？ 後、優治の場合は隣に居た白骨から蘇る方法を教えてもらっているのに対して、神酒さんは蘇る方法を知っていた」

知聡はそれぞれの【蘇る方法】の項目に【後天的】【骨を繋いで肉を食う】【先天的】【骨を組みなおして肉を縫う】と書き込んだ。

「そして最後にこの【犬】だがこれは役割が一緒だね。どっちも蘇生を邪魔するための存在だ。ただし、二人の場合は捉え方が違う。優治の場合は客観的なのに対して、神酒さんのほうは主観的に犬を恐れている」

【犬】の項目が【客観的に捉えている】【主観的に恐れている】と書き込まれた。

その項目が埋まるのを見て、部長が知聡を止めた。

「秋山君。ちよつといいかな？ この二人の夢だと微妙に時系列が違ってない？ 神酒さんのほうは現在進行形で犬が居るけど、僧正君の方だと犬が居ないし」

部長のその言葉に知聡は、ふむ、と考える。

「確かに、時系列も違っていているね。優治の場合は、隣の白骨が既に被害にあっている。神酒さんのほうは分からない。神酒さんの夢では白骨はオブジェクトだから何も言わない。これでは

どちらが過去で未来か分らないね」

知聡は思考を巡らせているが、俺にはそれが何故だか分からなかった。

「知聡。神酒さんのほうが過去、で俺のほうが、未来、じゃないのか？」

「ほう？ 何となく言いたいことが予想できるが言ってみると良い。言い漏らしを含む考察だったら聞かないといけないからね」

「いや、言い漏らしたことは無いと思うんだけど。えっと、俺のほうでは、既に隣の白骨が犬の被害にあっている。それは神酒さんの夢で、その、やられたんじゃないかって」

「やっぱりそう来たか。でも、神酒さんが未来、君が過去でも説明できるんだぜ？ 神酒さんの周囲の白骨は何も言わない。これは犬の被害にあっているからではないのか。それに、君の過去の更に過去にその白骨は被害にあったんじゃないのか？ だって他の白骨も君の中じゃあ、まだ元気なんだろう？ 骨に元気というのも変な話だけだね」

犬の被害にあったら喋れないのであれば、俺の隣の白骨は何故喋れるのだという疑問は言わなかった。そもそもお互いの夢での骨は、役割が違うのだろう。

知聡は少し迷った末に、【犬は居ない】【犬が近くに居る】と書き込んだ。

「さて、少し脱線したけどこれが最後だ。これだけでも随分違うと分かるけど、最後にお互いの夢での心境だ。夢とは最初にも言ったが主観的だね。心境が反映されやすい。優治はこの夢に、正確には隣の骨にだが、居心地の悪さを感じている。だが、神酒さんは犬が来るまでは楽観的だね」

「これに何の意味が？」

部長は検討もつかないといった様子で問いかけた。

「これは個人的なことなんだが、何故夢に犬が登場するのかが分からなかった。犬の役割はさつき言った通り、蘇生の邪魔だ。しかし、何故犬でないといけないのか分からない。死神じゃあ駄目なのか？ 骨ならば火葬場でも良いはずなんだ。でも、何故犬なのか。骨を啜えるからか。それならそれでも良い。ただ、何故二人の夢に揃って犬なのか気になっただけだよ。まあ、強いて言えば、優治への嫌がらせだ。お前は夢の中で悲観的だからかうための項目だよ」

そう知聡は言ったが、いつもの一笑に付すような感じはなく、肩透かしを食らった。改めて表を見る。確かに細部は違うし、展開も違う。

それでも。

「こうしてみるとすごい夢だね。別人間同士が見た夢なのに、こんなにも似るもんなんだね」

部長の言葉に俺も頷いた。

でも、一緒なのだ。

穴の中にある大量の白骨の夢。

それを同じ日に二人の人間が見る。出来すぎている。恐ろしい。

「まあ、確かにね。それでは何故二人がこんなにも似たような夢を見たのかだが」

知聡のその言葉に驚いた。その問いかけに答えは出るはずがないと思っていたから。偶々だ。それこそ天文学的数字が、重なっただけだ。そう思っていたのに。

「偶然じゃ、ないのか？」

だから、思わず口にしてしまった。

部長も、神酒さんもそれぞれの思索を抱えた顔で、知聡を見る。二人も似たようなことを考えていたのかもしれない。

「偶然？ 偶然とはどうやって起きるのかい？」

知聡はそれこそ疎ましそうに、訝しげに俺に問いかけた。

予想外の反撃に、質問を質問で返されたことに、俺は狼狽した。

意味が分からない。偶然とは偶々起きることだと言おうにも、意味が分からない。偶然とは偶然だ。言葉を変えるだけなら偶発的だとかあるけれども、知聡の言うそれはそういう意味じゃない。俺の中では偶然は偶然にしか起きないのだ。

答えあぐねている俺に知聡は溜め息を吐く。

「良いかい？ 偶然という言葉の意味は、【因果関係も無く予期せぬことが起きること】、を言うんだ。これは言い換えれば【偶然という現象が起こるまでは因果関係の無いものが、予期せぬ形で何らかの因果を持つことによつて起きる想定外の現象】ということだ」

なんとなく理解できたような気になるが、それは気になっただけだろう。コイツの表現はいちいち難解でしようがない。きつと嫌がらせなのだろう。俺を見下しているからこのような、難しい言い回しを使つて意地悪をするのだ。

「例えば、優治と神酒さんそれぞれが、白骨になった夢を見る。そしてお互いに周囲に喋りたいたいという願望を持っているとする。まず優治が喋りあぐねている間に、神酒さんが白骨の夢を見た周囲に話す。これは別に不思議でもなんでもないね？」

知聡の言葉に頷く俺たち三人。隣を見れば、ゲームを一時中断したのか三人組も頷いている。それを確認するように頷き返す知聡。

「というか、何故例え話の中でも俺はそのような立ち居地で、いじられないといけないのだろうか。」

「次に、俺も同じ夢を見たとき優治が言う。ここで始めてこの現状に予期せぬことが起きるわけだ。お互いに同じ夢を見たという者が要る。二人が出会わなければ、これは何ら問題無いのだ。白骨の夢を見たという内容に、相応のレスポンスをしてあげれば良い。それはすごい内容だね、と。だが、それが二人居ることで、始めて偶然というものが生まれるわけだ。それまでは何とも無かった、ただの恐ろしい夢だっただけなのにね。確かにお互いが見た夢には共通点があるかもしれない。しかし、それを話さなければ因果関係は生まれなかつたわけだ。ここでどちらかが話してしまうから、もう一人が反応してしまう。無論、お互いはお互いの夢の内容を知らないからね。予測しようがない」

「どうということだろうか。話が回りくどいのはいつものことだが、正直今回の話題は自分の内から出たものなので、気が気でない。」

それを察したのか、知聡は俺を手で制する。何も言うなということなのだろう。言おうにも何を言えば良いか分からない俺は、ただただ従うしかない。

「さて、優治が痺れを切らしそうなので急ぐけれども、分かりやすく言えば、偶然とは必然と必然の総合なのだ」

「あのね、秋山君。私も話の流れがさっぱり分からないんだけど？　いつになったら偶然の話が終わって夢の共通性になるのよ」

部長が溜め息を吐いて告げた。話が長いのは秋山知聡の特徴だと知ってはいるんだろうが、今回ばかりは、おあずけ、が過ぎていくようだ。

「それは優治のせいだ。僕に小言を言うのは筋違いだぜ？」

だが話しているのはお前だろうという突っ込みは、全員が全員飲み込んだことだろう。でないと反論で話が長くなるのは目に見えている。

「それじゃあ話を戻すけど。必然とは【必ずそうなること、それより他になりようがないこと】の意味だ。つまり必然とは真理に他ならず、真理とは命題、つまりは定理だ。この場合の定理とは方向性を意味している。さて、それでは掘り下げよう。まず一つ目の定理は神酒さんの白骨の夢だ。そして、これに反定理として出現するのが優治の白骨の夢。その二つが出会うときに、総合シンテッセとなるわけだね。さて、ここで二つの定理がぶつかり総合になったことで、周囲が出す結論の一つが偶然なんだね。本来は偶然でも何も無いんだ。【一足す一は二】。これは必然。だが答えが同じ二でも、【エックス足すエックスは二】だと、人はエックスの中身を知らないわけだから、必然だとは言わないだろ？　エックスを知っていれば一足す一で良いんだけど、知らないからエックスを使わないといけない。だが、知っていようがいまいが、答え、つまり偶然と言う現象は起きてしまう。本当はただの必然同士の計算なだけだね。必然足す必然は必然なんだ。これにエックスというものが入ってしまうから、不思議に思ってしまう。必然の反対は偶然だからね。これが偶然の構造だ」

さっぱり分からなかった。知聡の頭の中では完璧な変換がなされているんだろうけど、俺には必然は真理と分かれど、命題とはイコールじゃない気がしてならない。いや、これを実つ込んだら今度は部長が怒りそうだ。

「えっと、つまり。私たちの夢の共通性は偶然じゃない、ということですよ？」

神酒さんの声に一瞬静まる教室、ここは二階だというのにグラウンドから聞こえてくる運動部の声がクリアに聞こえた。

「――間違っていましたか？」

「いや、その通りだよ。さすがだね。どこかの阿呆よりずっと切れる」

「私もあんまりついていけないですけどー？」

おっと、とわざとらしく口を押さえる知聡、頬を膨らませる部長。そして、少しだけ嬉しそうに口元を緩ませた神酒さん。さっきまでの硬い空気が弛緩していくのが分かった。

「ははは、そうむくれないでよ、部長。そうだね。じゃあ、やっと部長の聞きたかった共通性についての話だ」

そういえば、知聡は得意げに話すが、結局はアイツの仮説でしかないんだということを出した。アイツが最初に言ったとおり夢は結局のところ主観だし、すごい確率で同じような夢

をただけかもしれない。鵜呑みにするのは頂けない。どうせ今日の話題は、不思議な体験をした、で締めくくられるんだろうし。これは仮説の即興演奏のようなものなんだ。

ふと、眩暈がした。

みんな、と求愛の声を二つの白骨は聞いている。

目の前には肉。お互い酷く欠損しているので、同時には生き返れないだろう。

どうしても生き返りたかった。

死んでまでもこのように意識があるのなら。生きていたほうがましだ。

それを酌んでくれたのか。どうぞ、と言われた気がして、俺は隣の白骨にお礼を言う。

白骨は、神酒 幸美だ。

「で、ユングは集団的むい——、おい粗忽者。どうかしたのか？」

みんな、と外は五月蠅い。けれど俺は美術部に居た。さっきのは、なんだ？

「悪い。話が、難しくて」

適当にはぐらかす。知聡は少し不機嫌そうに、それで呆けていたのか、と罵る。反論も出来ないでそれに肯定すると、大きく溜め息を吐かれた。

「ここは少し暑いですから。涼みに行きますか」

神酒さんはそういうと、俺に立つように促した。どういうつもりだろう？ 確かに俺は一瞬だけ呆けていたけど、そこまで大事に至っていないはず。

でも、心配してくれるのは少しだけ恥ずかしく、嬉しかった。人から親切にされることに慣れていない俺は、素直に立つことが出来ずに、ああ、とまだ悪いふりをした。

「コンビニでアイスを買ってきますけど、皆さんは何にしますか？」

神酒さんの提案に、美術室は一気に熱を帯びた。さっきまでの静寂が嘘のようだ。一通り皆の食べたいアイスの銘柄をメモして、俺と神酒さんは美術室を出た。

長いコンクリート張りの廊下は、木製の室内より断然涼しい。涼を取るだけならここに居るだけでもいいはずなのに。というか、気恥ずかしい。あまり喋ることの無い人と、しかも異性と。こういう風なことをするのは初めてな気がする。

覚えていないだけかもしれないけど。

「大丈夫ですか？」

並んで歩く白骨、いや。神酒さんは俺を心配そうに隣から覗き込んだ。

長い黒髪が顔に掛かり、その妙な淫靡さに鼓動が早くなる。

俺は頷くしか出来ず、それを返事にするしかなかった。声なんて出したらきつと震えた声になつて、ますます心配をかけてしまう。

「それは良かったです」

白骨のような。幽霊のような女は微笑んで蘇る。肉があるからこそ表情が生まれ、白骨ではなくなり、並んで歩くことで、幽霊ではなくなつた。

「わざわざ呼んでしまつてすいません」

それはこつちの台詞だ。俺なんかの為に気を使つてもらつてと、こつちの方が謝りたいぐらいなのに。

結局、いえ、としか言えずに、無言で涼しい廊下を抜けて、暑い玄関を通り、求愛の五月蠅い通学路を歩く。道の隣に生える街路樹は緑に茂り、コンクリートからは陽炎が昇る。その中を無言で歩く。まるで我慢大会のようだ。

気まずい。何か言わないといけないと焦っている俺は、結局自分のキャパシティーの低さを再認識してしまつた。

「アイス、何が好きですか？」

死にたくなつた。

結局俺の脳みそをフル回転させて出た発言がこれだ。鬱になる。

気の利いたことを言える自分では無いと知っているけれど、これは無い。

恥ずかしくて汗が面白いくらいに吹き出る。顔なんて直視できようはずがない。俯いたまま、蟬の死体を運ぶアリの行列を眺めて歩く。できれば俺も運んで欲しい。

「あの、六十円くらいの、袋に入ったカキ氷ですね」

「ああ、ああ！」

商品を思い出したわけではなく、いきなりの返事に戸惑つた俺は、自分の質問に答えてくれたのだと思うことができずに、それに思い当たつたことで変な声を出してしまつた。

でも、もちろん神酒さんはそんなことは露知らずに、僧正さんは何が？ と聞いてくれた。

俺のくだらない、下賤な質問でもきちんと返してくれた彼女に感謝する。

「俺も、六十円くらいの、動物の絵柄の、あの、しましまの」

脳が回つてないのだろう。商品名が出てこない。

「えっと、トラ吉君ですか？」

それだ。

俺は頷いた。そのアクションに神酒さんは顔を輝かせる。

「あれも美味しいですよ、六十円シリーズのわりにクオリティーが高いというか」

頷く。

昔は良く食べていた。

もうどれくらい食べていないだろう？

「懐かしいですよ。昔は良く食べていましたけど、今は値上がりしちゃつて」

そうなんですか。と呟いてそんな事知らなかつた俺は萎縮してしまう。

「でも、すごいですよね」

何がです？ と。蟬の声より小さく呟いたのに、神酒さんには聞こえたらしい。相槌が終わるのを確認してから喋りだした。

「私たちの夢、繋がってます」

どつちが過去でどつちが未来かは分からないけど。確かに繋がっている。

「すごい偶然。ああ、偶然なんて言葉は存在しないですよ。起こるべくして起こったんでしようし」

そんなこと、知聡は言っていただろうか？ 言っていた気もするし、いない気もする。さっきのことなのに、俺はもう忘れている。

お互いが白骨になったイメージが強すぎて。頭が真っ白になってしまったのだ。

「それじゃあ、あの夢は見るべくして見たんでしょね」

見るべくして見る夢。

それは、夢か？

「どう思います？」

相槌が無かったのが不安になったのか、立ち止まって俺に返事を促す神酒さん。

同時に、生ぬるい風が吹く。

それに合わせて彼女の長い髪が、まるで柳のように揺れる。

素直にその光景は綺麗だと、心が漏らした。

こんなに暑いのに寒気がする。この人と居ると、不安になる。

どうすれば良いのだろうか？

分かりません、と。結局、正直に白状した。

俺は知聡じゃないから何も分からない。

そもそも、あの夢は俺のものだったのだ。

なのに神酒さんは俺の夢を見て、俺に意見を求めてくる。

ざあ、と木々が揺れた。

風に彼女の黒髪は舞い、顔の三分の二を隠してしまう。

嗚呼、柳の下に白骨が見える。

「あの夢は、私たちのどちらに所有権があるんでしょうね？」

その言い草は、自分の夢を俺に盗られたかのようなそんな言い方だった。

夢に所有権なんて無い。誰が持ち主なんてどうやって分かるんだ。それじゃあ、借りた方は使用料でも払わないといけないのか？ 著作権のようなものがあるのだろうか？ 下らない。

「冗談です」

神酒さんは微笑を浮かべた。

自分でもそう思っていたのだろう。

「でも、秋山さんは偶然とは予期できなかった必然同士の総合だと言いました。それじゃあ、私たちの夢は見るべくして見て、語り合うべくして語り合ったことで、露見した総合です」

綺麗な顔で、小難しいことを語る彼女。

意味が分からない俺には、隣に居る資格さえ無いに違いない。

目的のコンビニは、もう少しこの陽炎の立つ通学路を行かねばならない。

さつきから一台も車は通らず、夕方だというのに、人が一人もいない。

「それじゃあ、その総合は更に何かとぶつかる為にできた定理なはずです」

暑いのによくそんな話ができると感心した。もう脳が蕩けているかのように思考するのを破棄してしまっている。

「それじゃあ、この夢の意味はなんでしよう？」

夢の意味。夢とは何か。

それはさつき教室で行われていたようなものだ。

記憶を元にした即語り。即興演奏。意味なんてあるのか分からない。全ては脳次第だ。

「私はできることなら、この夢の行き先を見て見たい。もちろん、私の興味本位でしかありませんし、そもそも意味なんて無いのでしよう」

探るように、神酒さんは俺を見た。

「でも、もし僧正さんがよろしければ、私たちの夢を一緒に解き明かしてほしい。私は酷く、この夢に惹かれるのです」

神酒さんは搾り出すように、それでも俺よりは大きな声で、そう俺に助力を求める。

そんなこと言われても、俺はどうすればいいのだろう。

正直に言えば困惑してしまう。

夢に行き先なんて無い。夢は覚めたら霧散するのみだ。ただ少しばかりインパクトのある夢で、その内容を覚えていたからと言っても、それは次第に薄れ、忘れてしまうものだ。

なのに。この人は夢の意味を知りたいのだという。

そんなのフロイトにでもユングにでも聞けば言い。何なら知聡にでも聞けば喜んで答えてくれるだろうに。

でも、この人は俺に聞いた。俺なんか聞いた。

もちろん夢を見た当事者の一人だからという理由なのだろう。

だが頼られたことが無い、僧正 優治という人間は白状すれば、嬉しいのだ。

それに、俺は神酒 幸美という人間のことも、少なからず好いてしまっているのだろう。ならば、いくら頼りないとは言え、男なら好きな女性の頼みくらい聞けなくてどうする。

そう自分に喝を入れて、俺は一度だけ大きく深呼吸をした。

「俺でよければ、頼りないですが、協力します」

久しぶりに、笑顔を作ろうと努力してみる。

鏡があれば割ってしまうだろう、推定笑顔に対して、神酒さんは本当に嬉しかったのか、まるで蘇ったかのように、笑った。

その綺麗な笑顔は俺を震わせた。きつと麻薬のようなものなんだろう。ずっとその笑顔を見続けたいという衝動に、俺は俯いた。前科があるのだから用心に越したことは無い。

「アイス、買いに行きましょう」

俺を小走りに追い越した神酒さんに、俺も追いつこうと小走りになる。

こんなに暑いのに少しでも走りたかったのは、この湧き出す高揚感を消したいから。

そしてコンビニで頼まれた分までアイスを買って、また少しだけ笑いながら二人で走って学校に戻った。いつもより顔が明るかった俺を見て皆が驚いたのに、俺はまた笑った。

単純に考えれば君たちは忘れていてるだけで、過去に同じものを見ているのかもしれないね。アイスを食べながらあの日の後、知聡は言った。

何でも、夢とは過去の体験や記憶、願望や欲求の再生であり、それを元に再構成された即興の物語なのだそうさ。

知聡は俺と神酒さんが、同じ欲求や願望を持つよりは、同じ体験や記憶をしたと考える方が自然だろうと言った。

そしてお互いに【白骨群】【蘇る方法】【犬】というフレーズに覚えは無いかと聞いてきた。俺は無かった。

白骨なんてそれこそ理科室でしか見たことが無いし、白骨が肉を欲しがる意味も分からない。考えたことも無いのだ。

後、単純に犬は苦手だ。

昔噛まれたことがあるから、それ以来小型犬すら噛まれてしまうような気がして、恐ろしい。同じように、隣で袋に入ったカキ氷を食べながら、神酒さんも犬は苦手だと答えた。

何をされたでも無いが、犬はどう接して良いか分からず苦手なのだという。

俺はどちらかといえば、猫の方が良い。

一日の三分の二を寝て過ごすような生活に憧れる。

そう言ったら皆から笑われた。

神酒さんからも笑われて少しショックだったが、笑った後に彼女は、【白骨群】は、もしかしたら私が小さいときからお寺付近で遊ぶことが多かったからではないか、と言った。近くに沢山のお墓があるのだという。

そこで俺は、神酒さんに格好を付けるために、みんなで彼女の生まれ故郷に行ってみることを提案した。

そうして今、俺と神酒さん、知聡と部長の四人で彼女の生まれ故郷であるY市に電車で向かっている。

古くからあるのだろう、擦り切れて硬い座席に俺と知聡で腰を下ろしていた。一つ前の座席には部長と神酒さんが座っている。

車内には、どこからどこまでがお得だとか、吊り広告には雑誌の切り抜きのような広告が入っている。まあ、どの道座っていたら読めないけれど。

手持ち無沙汰に窓を見た。流れる景色は緑が多く、都会に向かっていているわけではなさそうさ。ガタン、ガタン、と電車の揺れる音だけが充満していた。

「で、結局のところどうなんだい？」

そう、知聡はわけの分からないことを言ってきた。

なにがだよ、と返す俺に知聡は呆れたように溜め息を吐いた。休日の朝からまさかこうも気分が滅入ると思わなかった。

正直、知聡の溜め息は苦手だ。

俺の知らないことを沢山知っていて、頭の切れるコイツから溜め息を吐かれると、何だか恐ろしくなる。自分の未来はお先が真つ暗なのではないかと、焦ってしまう。

別に自分の未来が輝かしいとは思ってはいない。

ただ、将来はある程度逆算できるもので、宇宙飛行士になりたいのなら、こんな学校に行つてこんなことをしている場合ではなく、サッカー選手になりたいのなら、そもそも美術部ではなく、サッカー部に居なければいけない。

そのどちらにもなれそうにない俺は、将来を逆算できない俺は、未来が恐ろしくてしようがない。

だから、俺よりも計算ができる知聡に呆れられることは、ただそれだけで恐ろしい。

お前には未来が無いのだ、と言われていたような気がしてならないのだ。

そんな俺の思考を知らない知聡は、溜め息を吐きながらも苦笑する。

「何って、神酒さんのことだよ。あの後君がやけに、にやにやして、気持ちが悪かったからどうしたのかと思つてね。彼女と何かあったか、一緒だったからかと、色々部長と話したんだよ」

ああ、部長。信じていたのに！

そうか。でもそんなに顔に出ていたのか。気をつけよう。きつと幸せに慣れていないから自分を制御できないんだ。でも、気持ち悪いは、ないんじゃないか。

「それに、君からこんなことを提案するなんて珍しいからね。それだけで随分お熱だと二人で盛り上がったんだ」

結局俺はアイスを買に行つたときに、神酒さんとした会話を一切触れないことにした。なんとなく秘密にしようと思つたのだ。

「別に何もない。ただ、神酒さんは綺麗だから、恥ずかしかつたんだ」

その言葉を待ってました、と言わんばかりに知聡は口元を引きつらせる。

ああ、絶対にさっきのは失言だった。秘密にしようとはぐらかしたのは良いが、やり方が不味かつた。

「ふうん、なるほどね。いや、そうだね。君は神酒さんみたいな儂げなタイプが好きそうだからね。ふうん、でも恥ずかしかつたのか。意識しているんだね、優治は、ふうん」

お前は近所のおばちゃんか。何でそんなに嬉しそうなんだ。

語尾に音符が付いてそうな声で、知聡はポケットから携帯を取り出すと、ボタンを素早く押している。どうやらメールしているみたいだ。そして、打ち終わったのか携帯を閉じた瞬間に、前の席から小さく着信音が流れた。

電車の中だったからか、急いで着信音は途切れ、少しの間の後に、おおー。という部長の感嘆が聞こえた。

最悪だ。

何でも知聡と部長は俺をネタに盛り上がっているんだろう。そもそも、すぐ近くにいるのにメールつてところが、何だかムカつく。

どうかしたんですか？　ちよつとねー、と前の席で会話が行われているのを無視していると、ポケットが振動した。どうやら携帯が鳴っているようだ。

その自己主張を無視したい衝動に駆られながらも、隣から、おや携帯が鳴っているようだよ、と白々しく言われたらしようがない。

二つ折りの携帯を開いて、新着のメールボックスを見てみると、部長からメールが着ていた。

『春だね☆』

「夏だよ！」

俺の叫びは電車の、ガタン、ガタン、という音に吸い込まれていった。

◇

「いやあ、夏だね部長」

「夏だねー、秋山君」

死にたい。

あの後Y市に着き、電車から降りた俺たちは、駅前のタクシープールに居た。

営業する気が無いのか、ハンドル部分に足を乗せて新聞を読むタクシーの運転手。

そのタクシープールの中心には水が吹き出す、申し訳程度に水面が水で押され続けているだけの噴水。

そして、周りにはベーカリーショップと、古い書店。周りには木々が生い茂っている。例えるならば、森を切り抜いて駅に、町にしたような感覚だろうか。なんかタイムスリップでもしたような感覚を覚える。

それこそ、良く言えば自然が多く。悪く言えば寂れた感じの印象を受けた。

「暑いですねえ、部長」

「だって、夏だもん秋山君」

「そうだねー夏だねー、と返す知聡。」

ああ、死にたい。

さつきからずつとこんな調子で、俺はからかわれ続けている。

俺の隣では事情を知らない神酒さんが、どうしたんでしょうね、あの二人。と微笑ましそうに前方で笑いを堪えている二人組みを眺めている。

あのね、神酒さん。あの二人はサドなんです。生粋のいじめっ子体質なんです。貴女が近づいてしまったら穢れてしまいますよ、うん。

暑さのせいで脳が沸いたんじゃないですか？　と神酒さんに返すと、それ酷いですね、と微笑を浮かべてくれた。

またあの二人にからかわれそうだけど、やっぱり綺麗な人だと思った。

「さて、神酒さん。ここから目的の寺まではどれくらい掛かりますか？」

知聡は一応顔を取り繕って神酒さんに尋ねた。

「えっと、ここからバスで四十分くらいでしようか」

うる覚えなのか、彼女は曖昧そうに答える。

「それじゃあ、先に何か腹に入れてどうか。お昼はアレで良いかい？」

辺りを見回して特に目ぼしい店が無かったのだろう、知聡はベーカリーショップを指差した。全員特に否定することもなく、駅近くのパン屋に入ることにした。

目的の店内はクーラーが効いていて心地が良い。お昼時だからなのか、店員の自棄気味になった、いらっしやいませ、が響いた。甘い匂いが鼻腔を擦る。あまり腹は減ってないけど、パンくらいなら食べれそうだ。

「はあ、生き返るねえ」

部長は何だか所帯じみた声を出し、ドーナツコーナーを物色している。種類は見た限り三十種類以上あり、確かにどれにするか目移りする。

「えーっと、チョコは、一、二、三、四、五、六——」

部長のカウントが十一になるあたりで不安になってきた。何で数える必要があるんだろう？ いや、彼女は良識人だ。そんな暴挙に出るはずがない。

「ねえ、僧正君」

何だろう、すぐ返事をしたくない。

「やっぱり全部はやりすぎかな？」

当たり前だ。何を考えたらそんな発想に行き着くんだろう。

というか、チョコレートだぞ？ 何でそんなに食べるんだよ。

とりあえず頷く。なんだか声を出したくない。

「ああ、でも食べてみたい！ 何この店！ オリジナル商品多すぎ！ 目に毒だー！」

地団駄を踏む真似をする部長を横目に、彼女の言葉に従いドーナツに目を向けてみる。

確かにチョコレート系のドーナツだけで、数十種類存在する。

チョコレートを掛けただけの物から、滲み込ませたもの、更には生地練りこませた物、挙句に高価ではあるが、ドーナツ型のチョコレートすらあった。もはやパンではないが。

悶々と何かを言っている部長を横目に、俺はトングでサーモンの挟まったパンをトレイに乗せる。

そのまま列の流れに任せてレジに並び、会計を済ませて先に行った知聡と神酒さんを探す。

店内で食べられるように、レジの反対には幾つかテーブルが点々と置いてあり、その奥の方に二人は居た。

二人のトレイには、それぞれ良心的な構成のパンが置いてあり安心する。

結局最後の最後まで悩んだ部長を待って、四人で食事を始める。

部長のトレイだけ異様に黒かった。



「さて、それじゃあ自由行動と行こうじゃないか」

ベーカーリーショップを出てバスに揺られること四十分。神酒さんの地元にたどり着いた矢先、知聡はそう切り出した。

周囲は申し訳程度にコンクリートの道路があるだけで、木々ばかりだ。

駅があれだったから、それから遠ざかれば緑が増えるのは必然なのか。

それにしても“となりのトトロ”でも出そうな雰囲気の場所だ。

「何でだよ、いきなり」

とりあえず突っ込む。意図が見えない。ここは目ぼしい観光名所があるわけでもないのに、わざわざ別の行動をする必要性が見当たらない。

それにこのS町に来たのは、神酒さんと俺の夢の共通性を探すためなのに、散開する意味がないし。

「あのねえ優治。部長を見てごらんよ」

知聡にそう促され部長の方を見る。

気分が悪そう。うう、と唸っているところを、神酒さんに背中をさすってもらっている。

自業自得だ。あの店で部長はチョコレート系のドーナツを五つも食べたんだから。

「とりあえずあまり暑いで歩き回るのも可哀想だし、僕もあまり暑いのは好きじゃないから図書館とか資料館の方に行って見るよ。そっちは直接現地に行ってみてくれ」

知聡はそういうと、部長を連れてさっさと行ってしまった。まったく。部長はしょうがないにしても、お前の理由は納得しかねるぞ。

「大丈夫ですかね？」

神酒さんは心配そうに俺に同意を求めた。それは、どちらに対しての心配なのだろう？

気分が悪そうな部長に対してなのか、何もできない俺に対しての不安なのか。

考えすぎだといつも言われる。だけど、もし後者だったら？ 前者だと信じて前者の対応をして、それで後者を指していたとすれば？ きつとそれは、酷く。辛い。

「まあ、秋山さんが一緒ですので、任せてしまっても平気ですかね？」

そう神酒さんは苦笑した。

彼女の中で知聡の評価はどうやら高いようだ。分かっていたが少し悔しい。

それに比べて俺はどうなんだろう？ 彼女に対して俺は、どうやって評価を上げればいいのかだろうか？

考えようとして止めた。それはきつと無駄になる。

俺は何かをやり遂げられたことが無いから。

だからきつと、俺はこの人を好きになっても。いや、彼女を振り向かせようと努力しても。彼女を無駄に疲れさせるだけだろう。

「――僧正さん？」

「ああ、ああ」

彼女の声で我に返る。

どうやら思索の井戸に溺れていたようだ。

「すみません。少し呆けていたようです」

「暑いですもんね。それじゃ、行きましようか」

わけも分からないまま彼女に付き添う。

風景はしばらくするとコンクリートから砂利に。塀が木に。駅前にはまだ数えられた人は、ついに数えることができなくなった。

二人つきりで坂道を歩く。黄色い砂利の坂。左右には木が植えられていてそんなに暑くは無い。むしろ風が吹くたびに流れる、木々の擦れる音は清涼感に溢れ、体感的に涼しくらいだ。

ポケットが振動する。携帯がメールを受信してみた。神酒さんの後ろを追従しながら携帯を開く。部長からだ。

『せっかくだから、デート楽しんでね』

ああ、なるほど。あの演技派どもめ。ちくしょう。

思わず漏れた溜め息を吐ききりながら、ポケットに携帯をしまう。それに気づいたのか、神酒さんは呟いた。

「えっと、私、小さいときからおじいちゃんっ子だったんです」

いきなりの発言に戸惑ってしまう。

「お父さんとお母さんは共働きで他県に出ていましたから、私はずっとおじいちゃんと二人で過ごしていました。おばあちゃんは私が生まれたときには亡くなっていましたから」

ああ。俺のせいだ。俺が溜め息なんて吐いたから気を使わせてしまったんだ。

「寂しく、なかったですか？」

だからせめて、相槌は打たないと。俺のせいで始まった会話なんだ。俺が興味を示さないでどうする。俺は会話をなるべく、彼女の隣に並ぶ。

「寂しかったとは思いますが、平気でした。おじいちゃんは私を喜ばせるのが上手い人で、童謡とかと一緒に歌ったりしながら、色々な遊びを良く私に教えてくれましたので」

幸せそうな風景を幻視する。

背中に背負われた子供に、童謡を歌うお爺さん。きつと、それは優しい思い出。

神酒さんは穏やかな顔で、遠くを見ていた。彼女も同じ優しい風景を見ているのだろう。

「例えばどんなことを？」

もつと風景を近づけたい。俺も同じ場所に居たい。その思いで、俺は問いかける。

「梅雨には、でんでん虫虫、かたつむり、秋には、夕焼け小焼けの、あかとんぼ、冬には、雪やこんこん、あられや、とみんなが知ってるようなものばかりでしたね。遊びは——」

そこで彼女は胡乱として。

あれ、忘れてしまいました。と照れた顔で振り向いた。

俺は彼女の僅かながらに口ずさんだフレーズに聞き惚れていた。大きな、聞かせるような音

で歌われていなかったにも関わらず、その鈴のような声に俺は震えた。

「今も、お爺さんとは良く？」

一瞬の間。木々の擦れる音が響いた。

「もう、おじいちゃんは死んでしまいましたので最低だ。」

「ああ、すみません——」

もう、喋ってはいけない気がした。俺はさつきから彼女を気遣うどころか、傷つけることしかしていない気がする。評価以前の話だ。申し訳ない気持ちでいっぱいになる。例え予想できないことだったとしても、それをしてしまったのなら、やはりこちらに非があるのだろう。鬱だ。俺なんか消えてしまえば良い。もう誰の目の前にも居たくない。

「いえ、大丈夫ですよ。ただ、とても悲しかったのは今でも覚えています。当時はずっと泣き止むことはなかったそうです」

えんえん、と泣き続ける幼いときの神酒さんを想像する。とても大好きな人が死んでしまった彼女はまだ幼く、延々と泣くしかなかったのだ。

「どこに、向かっているんですか？」

話を変えないといけないと思った。話を変えないと彼女は泣いてしまうと、馬鹿で身勝手な想像をした。

「えっと、さつきも言いましたけど、私が昔住んでいた家に。その途中に、例のお寺があるんです」

俺が浮世から離れていたときだろう。彼女はきちんと目的地を告げて歩き始めていたのだ。

俺がそれを単純に聞き流していただけ。ああ、俺はいつだって愚かなのだ。知聡に何を言われてもしようがないじゃないか。

「すみません」

謝るしかできない俺は自己嫌悪に陥る。

いえ。と神酒さんは微笑んでくれた。

「えっと、今は日計に、住んでるんですよね？」

でなければ、同じ学校ではないだろう。

「ええ、言いくいですが、両親が離婚してしまいました。それで母が日計で再婚しまして、それで」

「ああ、ああ」

虚ろな声で遮る。それ以上聞いてはいけない気がした。

ただでさえ傷つけているような後ろめたさがあったから。

しばらく無言で歩く。周囲にお墓が見えてきた。もう少しで目的地にたどり着くのだろう。

その前に少し休憩したかった。山に沿って道が作られているのでどうしても緩急があり、息が上がる。それに髪が張り付いて気持ちが悪い。でも、隣で神酒さんが平然と歩いているのだ。

泣き言は言えない。

「そういえば、僧正さんはどんな子供だったんですか？」

彼女に言われて思い出す。俺は、まだ子供の頃はこんな感じではなく。むしろ逆に活発で外で遊ぶのを、学校で友達と遊ぶのを好んでいた気がする。

「昔は、明るかった、気がします」

「そうなんですか？」

驚いたような声を出す神酒さん。それだけ意外だったのだろう。俺だって神酒さんが昔活発だといわれたら少なからず驚く。

「サッカーとか野球とか、外で遊ぶのが好きだった、記憶はあります」

しどろもどろに自分の過去を晒す。

でも、何が原因で、こうなったのかが思い出せない。

俺が軽い鬱の気が出始めたのは、いつからだった？

俺も彼女と同じく、何も思い出せなかった。

「今みたいな性格になった、理由は分かりません」

そう漏らして空を仰ぐ。木々の隙間から木漏れ日が差し込み、目を焼いた。

流れる沈黙。ここは日計と違って、蝉がやけに自己主張をする。蝉にとつて求愛は本能だ。たった七日間足らずで雌を誘い、交わり、次にバトンを繋いで、死ぬ。俺だったら絶対に無理だ。誰にも振り向いてもらえずに、一人喚いて七日間を終えて息絶えるだろう。

「ああ、そこです。そこのお寺から良くおじいちゃんと散歩しながら帰ってたんです」

周囲には木々の代わりに墓が乱立し始めた。

懐かしいなあ、と神酒さんは小走りにお寺に駆け寄っていく。

二十メートルほど先には、全体的に黒ずんだ、明らかに手入れされていないだろう黒い寺。

証拠に屋根の瓦は数箇所剥けているし、壁には蔦が這っている。そんな寺が背負っているのが雲ひとつ無い青空な分、浮いて見える。

まるで、一つの大きな墓のようだ。

閉ざされた黒い寺の門を開ければ、そこには大量の白骨が入っているに違いない。なんて、馬鹿な想像をしてしまう。だがそれほどに、あの寺は雰囲気がちっとも神秘的じゃない。

近づくにつれて、その異様さは増し、同時にその寺は廃屋だということが分かった

人から必要とされなくなった物の末路がこれだ。

俺のような人間が、物に対してそんな懸念を抱くから、九十九神なんてモノが生まれるのだらうと、ぼう、と浮かんできた。

「そこで少し休憩しませんか？ 結構涼しいんですよ、あそこ」

前を歩く神酒さんは、その寺だったモノを指差していた。気づけば、彼女の額にも薄っすらと玉が浮いている。

俺はその提案に頷く。

実際に寺の前まで来てみると、周囲は意外と片付いていた。神酒さんによると、寺は今でも定期的に住職に清掃されていて、冬になると大掃除が行われるのだという。

住職は市が合併した際に大きな寺が新しく新築され、そこに移ったという。今でもここに来て清掃だけは欠かさないらしいが、それが終わると現在の寺でお勤めをするのだとか。

二人ですつかりくたびれてしまっている階段に腰を下ろす。屋根が階段にまで影を伸ばして、心地が良い。

「ああ、懐かしいなあ。おじいちゃんはここで良く、色んなことを話してくれたんです。まだそのときはここに住職さんも居たから、三人で色んな昔話を——」

話の途中で黙ってしまった神酒さん。昔話は忘れてしまったはずだが、思い出したのだろうか？

「あのですね、僧正さん」

頷く。ビンゴのようだ。彼女はどんな話を聞いて育ったのだろうか？

「私、【白骨群】の出所、分かっちゃったかもしれません」

昔話を思い出したわけではない。単純に探していた真相の一部に思い当たったようだ。

すごい。始めから当りは付けていたとは言え、きつと彼女なら一人で夢を解き明かしてしまおうだろう。知聡だけじゃなく、彼女にも多少の劣等感を抱いてしまった。

「どういう、ことですか？」

愚者を演じた。何も知らない男を。実際に何も知らない俺には容易かった。

「一緒に、こつちに着てください」

急に立ち上がる神酒さん。俺もそれに習い、急いで立つ。

寺から離れ、隣の墓石群の間をすり抜けていく。多種多様な墓、その手入れ具合は、どれだけ生前に想われていたかという表れなのだろう。死者は人に感傷を残し消えていく。俺が死んだとき。誰が俺のことで泣いてくれるだろうか。家族以外、泣いてくれるのか。その涙は言い換えるなら生きた証だ。俺はそれを大きく残すことができるのか。

できれば、神酒 幸美には、俺を想って泣いて欲しい。彼女のような人間にすら泣いてもらえないのなら、きつと俺は一人で空を見上げる白骨になるに違いない。

穴には誰もおらず、死して尚、俺は一人で。

「僧正さん、こつち、こつち」

気づけば神酒さんは曲がっていた。俺は一人で直進していた。

いつものことだけど、彼女といると呆けやすいようだ。それは彼女が様々な記号を持ち合わせた女性だからなのか、はたまた、いや。ほら、こうして俺は俺から脱線してしまうのだ。

彼女の呼び声に向かって駆け寄る。神酒さんは近寄らせることなく、それを確認して再度走っていく。この距離は永遠に詰められないような錯覚。

しばらく小走りに墓を縫っていくと、白い石で作られた塔のようなものが前方に現れ始めた。卑猥なことを言ってしまうなら、初めにそれを見たときに感じたのは、男性の生殖器のような形だというもの。先端部分が丸く盛り上がった塔だった。

その塔の下には、長方形の箱。これも白い石で組まれている。まるでチョコレート等が入っている、薄く長い箱のようだ。それに縦に厚みを持たせたような箱。

近くに来てみると、地面から箱を経て塔までの高さは、俺の身長の三倍くらいはあるだろう事と、箱までも俺の胸当りまで高さがあり、真っ白い石で作られたその塔には【無縁仏塚】と表題が彫られていることが分かった。

そして、その表題の下には学校にある机の上板ほどの石窓。二つの石で閉ざされている窓には取っ手が彫られているので、ドアなのかもしれない。

ただ、これがドア——門なのであれば、続いているのは地獄だろう。寺が地獄への通り道を管理しているのは、何だか道理な気がした。

「神酒さん、これは？」

無縁仏塚と書かれた石塔を指差して問いかける。なんとなくニュアンスは分かるが、いまいち、ピン、とこない。

「これは、えっと。無縁仏さんと地元で呼ばれる物で、遺族の方が見当たらない。でも、この村で死んでしまった人を納骨する、集合墓地みたいなものなんです」

遺族が見当たらない。つまり引き取り手が居ない、もしくは引取りを拒否している場合に使われる塚ということか。

「眉唾なんですけど、おじいちゃんが言うには、ここはアメリカ人の遺骨も多々入っているんだとか。何だか怪しいですけどね」

まあ、国籍が違えばそういう問題も発生してくるだろう。この田舎に外国人が居るといことが、想像付きにくいことではあったけど。

「なんでも敗戦後、視察に回ってきたアメリカ人兵士の方を、子供を失った母親たちが集団で襲ったのだとか」

全然予想と違う、生臭い話に驚いた。

敗戦後。つまり第二次世界大戦後のこと。確か一九四五年に終結した、二度目の世界規模の戦争だ。

二〇〇八年の今年。今から約六十三年前の話だ。

想像ができない。

ただ、心情は理解できる。

子を失ってしまった痛みは分からないけど、それを大事なものを失ってしまった痛みに変換することが許されるなら、それはとても辛いこと。

子を返せと。同じ思いをさせてやろうと。女性達は決起したのでだろう。

結果として、真偽は別にしてそのような話が広まったのだろうか。

人の想像は情報を介し現実を侵す。九十九神は人の“勿体無い”という懸念から。そして、この無縁仏に眠るとされるアメリカの骨は“欠落感”から生まれたものだ。

ならば、この中の骨たちは故郷に帰りたいと、歌っているのかもしれない。

「僧正さん。そこを開けてみてください」

神酒さんは、一言。俺に命令した。

ただならぬ語意の力に、俺は寒気を感じた。ただでさえ涼しいくらいの墓場なのに。心も体

も冷やされて、俺は今の季節を錯覚してしまいそうになる。

蟬の声だけが、今の状況で唯一の現実感。

そう、あの日も。

「いいんですか？」

そんな気軽さで、地獄への扉を開けてしまっても。

彼女はそれに頷いた。

正直に言えば恐ろしい。これは禁忌に触れる所業なのではないか。このようなもの、凡夫が易々と触ってはいけないのではないか。

でも、後ろに控えている彼女は、この石戸を開けることを前提に話をしている。ならばこれを開けなければいけないし、開けるべきなのだろう。幸い周囲には誰も居ない。

それに、こんなことを拒否して彼女からの評価を下げるのは馬鹿らしい気もする。

俺はゆっくり石戸に手を掛ける。ずっしりと重いそれを、石同士がかみ合って動きにくいそれを、ゆっくりとずらして、開けていく。

全てスライドさせきって、ランドセル二個分くらいの暗闇が姿を現した。

開けました、と振り返る際に。

だが後ろには神酒さんは居らず、代わりに小さな女の子がこちらを見ていた。

白い肌に細い体。長い髪がまるで柳のように長く枝垂れている。

そのアンバランスさに眩暈がした。

「それでね。その穴から糸を垂らすの」

彼女の手にあるのは、三本の針が、まるでタコ足のように反り返っている釣り針だった。それが白いタコ糸に結ばれている。

彼女は俺が開けた穴に手突っ込み、その糸を垂らす。

まるで食われているかのようだった。

箱に寝そべって、穴に手だけを入れてあるものだから、食べられているように見える。

その塚は仲間を増やそうとしているのだろうか。

この少女の肉を食らうことで、中から大量に兵士達が蘇ってくるのかもしれない。

「お、あった、あった。もうちよい——」

少女は得意げな笑みを浮かべて、何かに熱中している。すごく不謹慎な気がした。

そして少女は真剣な顔をして、手の角度を上へ、上へと上げていく。

「ほら釣れた」

彼女の持つ糸の先には魚ではなく。

一本の黄色掛かった、骨。

骨だ。

塚の中には骨があるのだ。

彼女はそれを知っていて、面白がって釣っている。

その無邪気さが、背徳感が、異様さが、恐ろしくてしょうがない。

「ゆーじ君もやってみなよ」

はい、と渡される糸。先端には骨。触りたくない。恐ろしくて触れない。

それに何故、この子は俺の名前を知っているのだろうか？

いつからお前は居た？

それに、神酒さんは？

早く、と急かされる。

従わないといけない気がした。

あの顔に掛かる、柳のような髪が。まるで幽霊のようで。

場所の効果も手伝って酷く恐ろしい。

恐る恐る骨を指でつまみ、針から外す。

骨の硬さに感心する。

人間を支えている物なんだから当然といえば当然だ。

骨を彼女に渡して、俺も同じように手をつまむ。

食われている感覚。

塚の中は、ひやり、と冷たい。

魂の温度なのかもしれない。

「何を、なさっているんですか？」

手をつまんだ状態で振り返れば、神酒さんが居た。

探せど少女の姿はなく、神酒さんと蟬の声だけが空間を占めている。

我に返れば間拔けな構図。

俺は腹ばいになり、右手を石戸の中に入れ、首だけ振り返り彼女を見ている。

馬鹿みたいだ。

俺は手を引き抜き、慌てて取り繕う。どうも今日は調子が可笑しい。暑いのと寒いのと神酒さんが居るので、大分参っているようだ。

でない、まるで夢遊病のように、自分でも意味の分からないことを繰り返さないだろう。

手を塚から引き抜く。親指と人差し指で摘んでいたはずの糸はあるはずもなく、ただその格好で引き抜かれてきた。なんとなくその形を眺めて、指を解いた。

「それは、骨釣り、の格好ですか？ でもどうして？」

骨釣り。なんと不気味なフレーズだ。先ほどの少女がした遊びが、その骨釣りなのだろうか？
とりあえず、それは何ですか？ と尋ねる。

「背徳的なので、見つかったら怒られてしまうのですが、少し前に流行った遊びなのです」

それはこの町で流行ったということなのだろう。確かに子供達が怖いもの見たさでやる分には十分に刺激的な遊びだ。

携帯ありますか。と彼女は言った。何に使うんだろうと、俺はそれを差し出すと、彼女は受

け取らずに、ライトの機能ありますか？　と言う。

ああ、なるほど。そういうことか。

俺は頷くとその機能をパネルから選び、携帯電話の先端にライトを灯した。

彼女の指に促されるままに、糸の代わりにライトを塚に入れる。

瞬間、携帯を落としそうになった。

塚の中には、夥しいほどの、骨の山。

夢に出てきた白骨群に。俺の見た夢に、似ている。

普段見ることの無い骨という異物に、俺は危うく自分の夢を重ねそうになる。

骨に気圧されただけだ。

こんな辺鄙なところ俺は知らないし、知るはずも無い。だからただの偶然なのだ。骨の山という共通点があるだけで、俺の夢はここではない。

この【白骨群】を知らない俺が、夢でこの場所を見ることは無い。

それは、この場所を知らないのだから、ここの【白骨群】は俺の夢に出てきたものじゃないということ。

だが、彼女の場合は違うのだろう。

神酒さんの【白骨群】はこれなのかもしれない。

ではこの中に肉を入れればこの骨たちは、アメリカ人兵士に、家畜に、身元不明者に、蘇るのかもしれない。

そして、その蘇生の儀式を犬が邪魔しているのだ。

手をつつ込みながら周囲を見渡す。無理な体勢なので首はあまり回らなかったが周囲には、

墓と寺と蟬と神酒さんだけ。

犬も、少女も居なかった。



空調の利いた資料館は、少し肌寒かった。

この空間を冷気で満たすには、どれくらいの時間エアコンを稼働させないといけないのだろうと、くだらないことを考える。

二階建てで、庭を四角形に四面の硝子で囲った作りになっているこの資料館は、その硝子から漏れてくる光のおかげか、妙に開放感がある。けれど、反対側は押しつぶされそうになるくらいの本棚の山。開放的なのか閉塞的なのか良く分からない。

目の前では熱心に秋山君が郷土資料を漁っている。今読んでいるのと別に、三冊ほど机の隅に置かれている。全部読む気なんだろうか？

「うう、気持ち悪い」

お腹がもたれている。重いというより、厚い。いや、どう表現すれば良いのか分からないけ

ど、私のお腹じゃないみたいな違和感がある。人からお腹を借りてきたような感覚だ。

「自業自得だよ部長。アレは食べすぎだ」

私のほうを見ることも無くページを捲りながら、秋山君は受け答えをする。

こういうところだけは感心する。

そりゃあ私だってできるけど、どつちかはおざなりな態度しか取れない。

彼にそんなこと言おうもんなら、女性の方が分割思考を働かせられるのだからと怒られそうだけど、できないものはできないのだ。

長机に二人掛けの椅子。私たち以外にお客さんはおらず、贅沢に対面で座っている。

まあ、折角のお休みをこんなところで過ごすというナンセンスなこと、私たちしかししないんだろうなんて考えたら少しへこんだ。

「いいの。食べたかったんだから。それにおかげで自然と誘導できたでしょ！」

「はは、違うない」

彼は苦笑した。

馬鹿みたいに綺麗な男の子だ。

私みたいに鼻は低く無いし、色も黒くないし、足も短くないし、二の腕たるんでないし、二重瞼だし、うーん。比べてったら悲しくなってきた。

「暇そうだね、部長。僕の顔に何かついてるかい？」

なんで君はそんなに完璧なのかな？

というか全然こつちを見なくせに、視線を読まないで欲しい。

「ついてませんよーだ。ばーか、ばーか」

子供らしく拗ねてみた。

私はナルシストの気があるのか自分のこういうところが好きだ。

それに、彼は苦笑した。

「ここでは蝉の声が聞こえないんだね」

ごう、という空調の音は聞こえるけど。

「代わりに優治達が、嫌というほど聞いてくれているよ」

「あはは、上手くいくと良いね、あの二人」

私達のおかげというわけじゃないけど、もしも二人が付き合うことになったら、それはとても素敵なことだ。

僧正君は内気すぎるところがあるから、少しは男らしくなるかもしれないし、ユキだってそうだ。彼女は歳不相応に落ち着きすぎているから、近くに男の子が居た方が安心する。変なのに引つかかったら正直悲しい。それこそ最近の勘違いした気持ち悪い男なんか、彼女を触って欲しくない。だって、あの二人はとても絵になる。

ユキは冗談みたいに綺麗で、私なんて足元にも及ばないっていうか、綺麗さのベクトルが違うってことにしてもらわないと、同性的にへこむと言うか。

僧正君だって、私の美観で言えば結構、ううん。かなり良い線行ってる。

そりゃあ、秋山君に勝る男性は正直未だに見たこと無いけど、彼だって十分格好良い。なんていうんだらう。色気なんだよね。色気。内向的が幸いしてるのか、まるで肺病を病んでいる患者のような色気というか。目が据わっていて、薄い唇で、あまり物を言わないのも良い感じ。でも、喋ったら喋ったで、声が少し幼いというか、やんちゃっぽくて、そのギャップも良い。というか、秋山君は少し喋りすぎだから、少しは彼を見習って欲しい。

「いやあ、どうだろうね。個人的には無理なんじゃないかと踏んでるんだけど」

その言葉で私的ジャーニーズ軍団の妄想から抜け出した。

「え、なんで？」

「そりゃあ、優治は良いかもしれないけど、神酒さんがね。なんだか彼女は優治を見ていない気がする」

そうかな？ そんなことないと思うんだけど。

「まあ、僕は何を見る目が無いからね。あるのなら優治になんかに付き合わず、そうだね今頃は瀬尾君達とゲームしてる」

彼は憂い気に溜め息を吐いた。でも、その口調は優しい。

ああ、君もいちいち絵になるね。

もちろん言わないけど。こういうのは口に出したら危ない人だ。

「本当に秋山君ゲーム好きだね。古今東西さ」

まあね、と彼はページをめくる。さつきから彼は熱心に何を読んでいるのだろうか？

「ねえ、それ何読んでるの？」

「何って、そりゃあこの町における資料だよ。まあ、最近合併しちゃったら正しいから正確には街なんだけど」

同じ発音だけど、きつと字と意味が違ったんだらう。彼はそういう所にこだわる人だ。

「それは分かるよ。ここに来た時点でき。何を調べてるのかなって聞いているの！」

「今のこれはこのS町で起きた事件についての資料だね。このS町が新聞で取り上げられて記事になったものを集めてカタログにしているものを読んでいる。それでこっちは、この町に古くからある慣わし、風習を集めたもの。で、これがこの町で印刷された物、まあ、広告や回覧板とかを集めた資料だ」

うーん、全然意図が掴めない。なんで彼はそんなものを読んでいるんだらう？

風習はまだ分かる。でも、事件の記事とか回覧板とかの本を読む意味が分からない。私達はユキ達の夢の共通性を解き明かして来たのに。

そりゃあ、彼女等を引っ付けようとか色々してるけど、それとは別に。いや、本筋から離れてしまっているんだから、彼女等以上に頑張らないと僧正君は怒るんじゃないだろうか？

「最後のこれは、このS町の小学三年生たちが毎年行っているらしい、この町を彼らなりに調べたものを纏めて本にしたもので、この資料館がその小学校に寄贈した本だね。地元の三年生はこの資料館などで地元を調べ、知り、学び、それを一枚のポスターに纏めるらしいんだけど、それが授業などで使い終わるとこの資料館に贈呈するらしい。資料館としてはありがた迷惑だ

ろうけど、捨てるのも体面が悪いと考えたんだろうね。それでこのような本ができたのだ。良
い大義名分だ」

むう。最後の本は特に意味が無いじゃないか。彼は既に夢の話なんてどうでもいいのかもしれない。案外薄情だし。

「で、何でそんな本読んでの？」

「何って部長。君はこの町に何をしに来たんだい？」

言いたいことをそのまま返されてしまった私は、頬を膨らませた。

「だって、何をしていいか分からないんだもん。秋山君も何してるか全然分からないし」

「何って調べ物をしているんだけど。はあ、しょうがないな。それじゃあ一から説明するぜ？」
頷く。そして多少の後悔。長くなるかもしれない。いや、長くなるに違いない。

「まず、僕がこの四つの資料を読んでいるのにはもちろん理由がある。優治と神酒さんは夢に
共通点が多々合った」

【白骨群】、【蘇る方法】、【犬】の三つね

秋山君は頷く。

「そして夢とは性質として、体験、抑圧、欲求、解放などを司っていることが多い。無論夢は
ある程度操作できるものだけだね。部長も夢を見ていて次の展開を自分で選んだことぐらいあ
るだろ？」

ああ、確かにそれはある。夢を夢だと認識できたとき、私は自分の夢をご都合的に展開させ
たことが何度もあった。

「まあ、夢はある程度訓練次第で操作できるんだが、今回は触れないでおこう。さて、夢とは
先ほども言ったが、大体は体験だね。当たり前だけど、知らないものは夢に反映できない。無
論実際に体験しなくても知識として知っておくだけでもこの場合は体験だ。まずは体験ありき
なんだ。これは理解できるね？」

彼は私を馬鹿にしているのかもしれない、なんとなく思った。

体験しないと夢に反映できない。当たり前だ。

向日葵ひまわりはどんな花か、どんな形で、どんな匂いで、どんな色で、どんな性質を持っているの
か。それは実際に見るか調べないと知りようが無い。知らないということは想像できないとい
うこと。

つまり、土壌つちめには体験していないと向日葵は咲けない。

いくらそれが花だと知っていてもだ。もちろん、花とだけ知っていれば、桜や薔薇の形を持
った、向日葵、はその夢に咲くかもしれない。夢は本人が認めればご都合が許されるから。

「ああ、部長にいくら知識があるからって、集団的うんちゃら、とかを持ち出すのは止めてく
れよ。こんな話始めでいちいち赤子の呼吸の仕方なんて脱線したくないからね」

本能の話をするなど釘を刺された。

秋山君はさすがだ。

自分の話をスムーズに進める為に、潰せる杭は潰しておくだけの知識幅がある。

ああ、彼がくどくなければ、最高の男性なのに。もし彼と付き合えたとして。いや、もちろん仮に。万が一に。彼と付き合えたとしても、毎回自分の無知を露見して、彼にその知識の誤りを正されると思うと、正直げんなりする。そういう意味じゃあ、僧正君のほうがタイプだなあ。黙りあつていても成立する仲は少し憧れる。

なんて、早くも彼の長くなりそうな話に飽きてきた。

「夢は体験がないと反映されない。それじゃあ、彼らはその三つをどこかで体験しているはずなんだね。正直言えば、その三つのうち【白骨群】と【犬】なんて、見る機会は沢山ある。前者はそれをモチーフにした作品なんてこの世に腐るほどあるわけだし、後者なんてそこら歩いてる。だが、二つ目の【蘇る方法】だけは少し特異だね。いや、これだってモチーフにした作品は沢山あるにはあるんだ。例えば、ゾンビ、パウダー”だつてそうだし、“フランケンシュタイン”だつてそうだ。日本だつて安倍晴明だつて一回首を切られて死んでいるけど、師匠である白道上人の“生命存続の法”で蘇るくらいだ。ネタには事足りない。けれど、二人はその数多くある【蘇る方法】の中から、人身御供タイプの。穴に肉を入れるという夢を見た。それだけ共通点があるのだ、二人は共通した過去を持っていると考えた方が自然だ、というのが。今日の開合の前段階だね」

ああもう、話が長い！

しかも無駄に活舌が良いからまるでマシンガンのように話が進む。しかも聞き覚えの無い単語も混じってきたし。ああ、本当にこれさえなければ、素敵な人なのに。

「まず、二人は共通の過去を持っているかもしれない。そして、神酒さんはその過去に思い当たるものがある。だからここに来た。彼らは現地に赴き、僕達は色々な計略を孕んでここに居る。さて、話がやっと今に追いついた」

「ここまでが状況整理だつたのだと知らされて、口は災いの元だと改めて思った。私は私で彼に指示を仰いで調べ物を手伝うだけで良かったのではと、今気づいた。もちろん、もう遅い。

「これらの資料はどれも、当然のように僕らが生まれる前の時代も網羅している。今から十六年前。一九九二年に僕等は生まれたわけだけど、流石にそんな時期にそんな体験はしていないだろう。でも、記憶というのは母胎に居るときからあるらしいからね。一応ここから記事を読んでいたんだ。彼女が生まれてから今まで、何か記憶に残るような事件、事故が無かったかを。白骨や蘇り方に関わりそうな、風習、逸話が無かったか。何かあるのなら、回覧板などで注意を促すかもしれないし、当時の子供達なら何か知っているかもしれないし、当然この授業は神酒さんもやっているはずだからね。当の彼女も何かを書いていたかもしれない。そう思つてこの資料群を漁っていたんだよ」

なるほど。それでその手の資料だつたのか。

考え無しに彼が何かをするなんて思えなかったけど、それを聞いて安心した。

むしろ私の出番なんてなさそうだ。

「何か手伝えることある？」

そうだなあ、と彼は呟いて。

「それじゃあ、こつちのほうを頼んで良いかい？」

と彼は私に【Y市の伝承 風習】という本を、机に滑らせてよこした。

できれば、回覧板とか広告が載ってるやつの方が気楽そうで良かったんだけど、自分から協力を申し出た手前言いづらかった。

序文をとりあえず飛ばして、目次を開く。

郷土料理、方言、月々の行事、決まり事。他にも沢山のY市における風習やらがあるけど、とりあえず逸話という項目を開いてみる。

最初のページには、犬神、という文字。

犬の神様？ 狛犬とかそういう類のものだろうか？

項目の隣にある図には、偉そうに帽子と羽織を着た犬がいた。正直気持ちが悪い。でも、犬だ。夢に出てきた犬。こんなのが出てきたらそりゃあ、私だって夢見が悪かったと遅刻してしまふかもしれない。

三ページその説明にページが取られていたのを読み飛ばす。

次の項目には、子減らしの儀、というキャンプファイヤーみたいなのを囲んで、みんなで食事している絵が載せられている。

これも同じように二ページが割かれていたので読み飛ばす。

「おい部長。さつきから何をやってるんだい？」

そこで、秋山君が私に呆れたような口調を投げかけた。

「何って、白骨群に関連してそうなページを探してるんじゃない」

その言葉に、あからさまな溜め息を吐く秋山君。うーん、嫌味ったらしいなあ。少しだけ僧正君の気持ちが分かった。

「関連してそうって、どつちも僕には関連してそうに見えるんだが？」

彼に促されて渋々ページを最初に戻す。

犬神。こんなの神様っぽくない。せいぜいお犬様だ。

「部長、その本の序文にはね。この市を数年フィールドワークした民俗学者のコメントが書かれているんだ。自分が調べて行き当たったものを、真偽を問わず、全て掲載しているとね。その資料は、このY市の者が書いたわけではなく、部外者がこの市を調べて見聞きした物の纏めだ。最後に纏めたそれを本にしてこの資料館に寄贈したのだからね」

私が読み流した序文にはそんなことが書いてあったんだ。というか、何で既に内容を知っているんだろう？

「もう、この本読んだの？」

有りうる。秋山君ならそれをやりかねない。

「まさか。そんな早くその手の本は読めないよ。ライトノベルならまだしもだけどさ。先ずは本の序文を読んで、漁る優先順位を付けたんだ。だからその本の概要を知っているだけだよ。でも、驚いた。真偽は別とは書いていたけど、まさか“犬神”なんて妖怪出てくるとは思わなかった」

妖怪。この犬神は神様なんかじゃなくて妖怪なんだ。確かに顔が化け物染みてる。私は改まってこの犬神について知ろうと思った。

この犬神については、S町に住む五十代の男性、大輔さん(仮名)が語ってくれた。まずはこの人の言葉を、その時の会話をそのまま掲載しよう。

『この村は山が多かやろ？ んでよ、最初は猪とかの仕業と思っただよ』

『仕業というのは？』

『家畜が居なくなるったい。家畜が。でよ、こら懲らしめないといかんってなつて。夜通し見張ったとよ。したらっさい？ 犬やっただよ、犬』

『犬、ですか。犬が家畜を襲っていたと？』

『そぎゃん。アレは流石に驚いたけん、逃がしてしまったばってんね。んでよ、それをばあ様に話したら、それは犬神さんっつーらしいとよ』

『犬神ですか？ あの妖怪の？』

『あら、犬神さんつてのは妖怪ね？ それは知らんやっただばってん、昔から出るらしいとよ、この山では。何でも食べてしまいうらしいと』

これがそのときの会話の一部である。

彼の言葉を鵜呑みにして、犬神という存在がこのY市に居るとしよう。

犬神とは本来(この町で通用するかは別として)、こじつ蟲術によって作られるものだ。

蟲術とは道教や陰陽道において生物を使役する技法のことである。

最初は三戸さんしという魂に寄生する虫を操る技法であったが、時代が下ると実際の生物を操るものへと変化していった。

その課程でできたものに犬神というものがある。

犬神の作り方は犬を首だけ露出する形で地中に埋め、目の前に食べ物を置く。その後しばらく放っておき犬が餓死する寸前に首をはねる。すると首だけが飛んで行き食べ物に食らいつくのだ。これを焼いて骨にして、器に入れて祀ることで、犬神は誕生する。

霊体となったそれは、術者の願いを適える存在になる。

これが、犬神と呼ばれる存在の実態である。

しかし、このY市で語られている犬神は、実体を持つらしい。

つまり、それは犬神と呼ばれた別物である。

ただ、大輔さんが語ってくれたように、家畜を食らうだけの物であれば、ただの野犬で済むはずなのだ。

何故それが、犬神と呼ばれるようになったのか。興味は尽きぬところである。

そこで、犬神についてのページは終わっていた。

不気味だ。

このY市には何故か犬神というものが存在している。それはもちろん、本物とはかけ離れた

存在なんだろう。

でも、それがモデルになったモノが存在する。

得体の知れないこの不安な気持ちには、夢に出てくる犬と同一視してしまうからだろうか。この場に僧正君かユキが居てくれたら、夢に出てきたのは犬神じゃないと言ってくれたら、私の不安は無くなってくれるのに。

次に、子減らしの儀というページに手を掛ける。

このS町には、無縁仏さんと呼ばれる塚がある。どこの墓にもあるような、無縁者を入れる集合墓地だ。

この集合墓地には大量に子供の骨が入っているらしい。

というのもこの町は昔、大変な飢饉に見舞われた（これは誰もが口を揃えて肯定した）。

その折に、毎月子供を一人選び、食らっていたというのだ。

無論、真偽は最初に書いた通り定かではないが、私が無縁仏塚の中を見せてもらった折に、小さな骨も多少なりと入っていたという事だけは、付け足そう。

ただ、私個人的に姥捨て山の逆パターンだというのは、ありえない気もするが。

本文の隣には、キャンプファイヤーのようなものを中心に、何かを食らっている大人たちが描かれていた。

狂気沙汰だ。

子供を食らう大人達は、食い終わって骨を、塚に入れるのだ。

ああ、想像したくない。

犬神も、子供を食う大人も、何もかも。

この町は知れば知るほど、怖い。

真偽は定かではないと書かれているけれど、火の無いところに煙は立たないのも事実。

その事実が無いにしろ、どんな形であれモデルがあるはず。それに尾ひれが付いているだけ。

気持ちが悪い。

この民俗学者は、何故最後まで調査をしてくれなかったのだろうか？

知らない人を罵ってみる。もちろん、気分が晴れることはない。

滅入る気分のままページを読み進めるが、後は特に夢に関連しそうな記事はなかった。

私はもう一度、指を挟んでいた逸話の最初のページを開き、小賢しそうな犬神と、子供を食する大人たちを眺める。

僧正君じゃないけど、滅入ってしまいそうだ。

そのうちに、私の視界は胡乱でいき、ついには瞼を開けるのすらおっくうになってしまふ。しようがない。くうちょうのきいたしつないだから、しようがない。おなかもいっぱいだし。みなれないじもたくさんみたし。しようがない。

ああ、あきやまくんのためいきがきこえる。しようがない。

「どうでした？」

隣に座る神酒さんは蝉と同じくらいの声で聞いた。

「なんか、部長が寝てるらしいので、資料館まで来て欲しい、とのことですよ」

廃寺の階段に腰を掛けて、俺と神酒さんは休憩している。ここは無縁仏塚と比べて涼しく、心地が良い。ここからしばらく動きたくない。蝉も休憩してるのか、静かだ。

「古賀さん、そんなに悪いんですか？」

心配そうな顔で俺に問う彼女。

「いえ、涼しい所で、気持ちよくなって、昼寝してるとか」

俺達はこんな暑い場所（ここはそれなりに涼しいけど）に居るというのに、なんだか不公平だ。

「それは、良かったですが」

額に薄っすら汗を掻いているからか、彼女も同じような気持ちなのかもしれない。眉を顰め、少し複雑そうだ。彼女のその様子が、少しだけ可愛かった。

お互いに何を考えているか分かったからか、俺達は苦笑しあう。

勝手に良い雰囲気だと感じた。

十分ほど休憩して。それじゃあ、行きますか。と呟いても、彼女は一向に反応しない。

どうしたか聞こうと彼女を見て、彼女が一点をずっと眺めているのに気づいた。

神酒さんの視線の先には乱立した墓。

その墓から見守るように。

いや、まるで俺達を監視しているかの如く。

黒い袈裟が居る。

遠くて見えない。けれどアレは男性だろう。頭は坊主。なら住職だ。危害は無いはず。けれど、恐ろしい。俺はアレがきつと嫌いだ。ならアレも俺が嫌いだ。威圧されているような気がする。あの服装は威厳だらけ。遠くからでも人に信仰を強要するかのような。人の思考を乗っ取る服装だ。俺みたいな芯の細い人間は、すぐにでも言いなりになってしまう。傀儡になるのは恐ろしいけど、でも、俺はゴミのようになるだろう。教えに反するが故に見捨てはしないかもしれないけど、きつと見て見ぬふりをされるようになるのだ。アレは絶対に俺を救ってくれない。むしろ、俺を壊す方の人種だ。恐ろしい。怖い。逃げないといけない。でも、足がすくんでしまう。嗚呼、神酒さんは大丈夫だろうか？

ああ、という俺から漏れている音で我に返る。ずっとあの袈裟を見ていたようだ。

神酒さんは俺と同じように。

いや、俺よりもあの袈裟の男に魅入っているようだ。

だけど、足は震え、歯はかみ合わず、ガチガチ、と鳴っている。

見ていられなかった。

階段についている彼女の手を握る。

彼女の手の平は冷たい。その温度に心臓が跳ねるが、それを我慢して彼女の手を引つ張り、起立を促す。

それでも彼女の視線は定まったままだ。

俺はそれを引き離すようなつもりで手を引き、廃寺から来た道へと歩を進める。

でも、本当は怖い。怖くてしょうがない。

それは、その袈裟の坊主の隣を素通りしないと、元の道に帰れないという事実。俺は地元の人間じゃないから、来た道を逆に戻るか、帰る手段を知らない。

でも、あの男の隣を通るのは。神酒さんを取られてしまうような錯覚を覚えて、恐ろしい。

証拠に、まだ彼女は歩きながらもその坊主を見続けている。

何が起きているのだろうか？

今ほど知聡の存在を強く思ったことはなかった。

アイツならきつとどうにかしてくれる。

早く資料館に行かなければいけない。

神酒さんを早く連れて行かないと。連れて行かれてしまいそうだ。

彼女の手を更に強く握り、引く。

心臓が痛い。さつきから血管に血が送られすぎて、痛いくらいだ。

後十メートル。

五、四、三、二、一。

隣には皺だらけの。六十を過ぎているだろう、古びた黒い住職。

まるでさつきまで居た廃寺のような、古汚い老人。

でも。そのまるで開いてないような瞼の奥にある、血走った目は。

確実に俺達を睨んでいる。

走った。

神酒さんの手が外れるくらい強く引き、逃げた。

捕まってしまったら、きつと食われる。

アレは骸だ。

自己を蘇らせる為に、きつと俺達を食うに違いない。

逃げた。全力で駆け抜けた。

墓を何個も横目に映しながら。来た道をたまに逸れながら、でも大筋を間違えないように全

力で駆け抜けた。

一度だけ後ろを振り返る。口で必死に呼吸をしている神酒さん。

そのずつと後ろで、黒い骸がこちらを見ていた。

お寺の敷地を抜けて、スピードを落としながら来た道に戻る。

途中にある柳の下で、俺達はやつと速度を落とすきつた。

全力で多分一キロほど走ったか。隣では神酒さんが、肩を上下に動かしながら呼吸を整えていた。普段の落ち着いた雰囲気とは打って変わった、生き生きとしたその姿に、安心した。さつきまでの彼女は、少し恐ろしかったから。

「大丈夫、ですか？」

俺もまだ息が荒い。言葉を発するにも、少し飛ぶ。

返事はなく、彼女の荒い息だけが聞こえた。

あの、と言いかけて、それをもう一つの手で制された。

「少し、待って、下さい」

彼女の復調を待つ間、その前のめりに呼吸を整えている、生き物っぽい彼女を眺めながら、俺は先ほどの状況を思い出す。

何故俺達を睨んでいたんだろう？ それに、彼女は何を思っていたのだろう。どちらにせよ、

彼女が落ち着くのを待たないといけない。

彼女の汗だろうか。雫が地面に吸い込まれていく。俺も彼女ほどでは無いが、膝が笑っている。

面白いくらいに吹き出る汗を、片手で拭った。

それから二分ほど待ったか。最後に大きく深呼吸をして彼女は、大丈夫です、と言った。

「無理をさせてしまって、すいません」

謝る。彼女はそれに微笑を浮かべて頷いた。

「いえ。平気です」

あまり平気そうではなかったけど、彼女がそう言うならそうなのだろう。顔から雫が流れている。

「さつきの人とは何か？」

でない、あんなに態度が急変しない。

変なことを言えば、俺は少しだけさつきの住職に嫉妬してしまっている。

彼女をここまで感情的にさせることができるなんて、少しだけ羨ましいと。

「さつきの方は、少し前に話した住職の方です」

——三人で色んな昔話を。

ほんの一時間ほど前の言葉を、脳が吐き出した。最低だ。

別に逃げる必要性なんてちっともなかった。彼女は昔を懐かしんでいただけなんだろう。

彼女の様子は、俺の悪い妄想から生まれた、そう蜃気楼のようなものだったのかもしれない。

一人で勘違いして救った気になって。馬鹿も良いところ。だから俺はいつまでたっても知聡から悪態を吐かれるのだ。

「すいません」

謝らなくて良いと言われたが、それでも謝らないと気がすまなかった。

彼女の思い出に浸る機会を奪ってしまったから。

俯く。

眼下には森のように木々が生い茂っている。高低差があるからだろう。これからこの山道を降りて資料館に行かないといけない。

途端、手を引つ張られた。

見上げれば微笑を浮かべる神酒さん。

恥ずかしくてまた俯く。

さつきとは逆の構図に、俺は思わず隠れて苦笑してしまう。

意識を変えようと、俺は深呼吸をして、汗ばんだ手を少しだけ強く握りなおした。

◇

「部長、良いから起きろ。面白いものが見れる」

資料館に着いた俺達を見るなり、知聡は隣でうつ伏せになっている部長を揺すり起こした。

寝ぼけ眼で目を擦り、俺達を確認するなり部長は、きゃー、と俺達を指差した。なんだか失礼だ。

俺たちの居た場所。外なんかと比べたらここは寒いくらいだ。だけどそれが心地良い。

「いやあ、まさか三時間足らずでこんなに進展するとはね。正直優治を見直したよ、うん」

知聡は意味不明に、にやにや、と頷きながら読んでいた分厚い本を閉じた。

その【Y市における印刷物】というタイトルに、俺は何をしているんだと少し呆れた。こっちはあんなクソ暑い中歩き回っていたというのに。

「それで、いつまで君達は手を繋いでいるんだい？」

その言葉で改めて、手を繋ぐ、という行為がとても恥ずかしい事だということを知覚した。

あの寺から約一時間半繋ぎっぱなしで、神酒さんも何も言わなかったから、正直それが普通になっっていた。

お互いに顔を見合わせて、手を離す。

熱が急激に逃げて行き、右手は心地よい冷気に晒された。

「ああもう秋山君、言わなくても良いじゃない」

部長はそれに反感を持つたらしい。正直俺は知聡に久々に感謝した。指摘されなかったらずっと、彼女の手を握っていたらだろうか。

それにしてもよく俺は、あんなにも彼女の手を繋いだままで居られたものだ。

「それで、そっちは何か、分かったのかよ」

恥ずかしさを隠すように語彙を強めても、俺みたいに言葉が途切れてしまう人間には意味の無いことなんだろう。証拠に知聡は苦笑している。

「まあ、その話の前に座れよ。長くなるだろうしね」

その言葉をきっかけに、俺達は情報を交換しあった。

黒い廃寺、無縁仏塚。そこに骨が大量に入ってた事や、骨釣りという遊び、アメリカ人を襲

った女性達。

彼女が昔、おじいさんと住職との三人で良く話をしていたことは伝えたが、住職と出会ったことは、言わなかった。

知聡からの情報は、言うなら胡散臭かった。

正直、子減らしの儀に犬神なんて聞いても、どう反応して良いか分からない。

そして、ユイツは自分で提示した情報を自分で否定し始める。

「僕もね、胡散臭いとは思っているんだよ。まずはこれを見てくれ」

それはカラフルだが、とても見づらいポスターの写真だった。まるで画集のような大きさではあるが、ポスターを一枚掲載できずに縮小してあるもんだから、元々字が書き文字で見づらいのに、縮小がそれに拍車を掛けている。まあ、この資料の製作者も同じ事を思っていたのだろう。それぞれ文字の部分には数字が振っており、その数字はポスター外にもあり、原文が印字された綺麗な文字で見ることができた。

知聡の指差す番号を確認し、ポスター外に辿っていく。注釈の文字は小さく、俺は自然に体を本に近づける。本の独特な匂いがする。

そこには“神隠し”という文字。

その文字の下には少し詳しく、遠まわしに表記してあった。

『このY市には、神隠しがあります。私のおばあちゃんも、タダシ君のおじいちゃんも、神隠しはあると言っていました。子供が夜中まで起きてると神隠しにあうので、早くねないといけなそうです。私は、こわいなあと思いました』

説明になっていない辺り、小学三年生なのか。それとも、その現象は説明するまでも無いくらい、この町では有名だったのか。いや、そもそも小さい子供が神隠しは、ある、と断定するくらいに、この町ではそれが身近だったのか。

俺だつて一応神隠しの概要くらい知っているつもりだ。簡単に言えば行方不明になること。

その際は大体方法が分からないし、戻ってこられたとしても、その間の記憶が無いというのが通例。そんな不可思議な現象がこの市では起きるというのか。でもこれは。

「子減らしにも、犬神にも関係ないじゃない」

同じ場所に居たはずの部長は質問する。この人はすぐに寝てしまったのだろうか？

「そうだね。でもこの件は、こう関連付けられないだろうか？」

知聡は語り始めた。

「まずこの犬神とは野山に住み家畜を荒らす野犬のことだ。この大輔という人の証言を見る限りでは、何の霊的な力は見られない、ただの犬だ。そもそも、犬神を作るのは平安に禁じられているからね。当時の日本の中心からこうも遠い田舎では、こっそり行われていたかもしれないけど、そもそも今は平成だ。そんな事実無い」

知聡は、犬神なんて居ないと言い切った。

では、子滅らしは特異だとしても、神隠しは？ これはまだ昭和でも起こっていた現象のように感じるが。

「神隠しの方だって偶然と同じだよ。失踪した理由を定義できないだけで、居なくなるのは必然的なものがあつたんだろう。それを思い当たらないから、神隠しなんて呼ばれているだけさ。例えば、誘拐だって狙いやすいだとか、金持ちだとかいう理由でされるべくしてされたんだろうし、崖から転落し川に流されても、やはりそれは滑るべくして滑って居なくなったという必然だ」

そうかもしれないけど。それが身近にこの町にはあつたんだ。神隠しが定義できない必然による失踪だと知聡は言う。その考え方は恐ろしい。偶々だったらまだ諦めが付くのに。失踪する必然性が普通に混在しているこのS町は、どこか不気味に思えた。

「さて。神隠しとは失踪であり、行方不明になることだね。でも、この世には完全な消失、消去、消滅は存在しないんだ」

「でも、死んだら居なくなるじゃない」

部長は反論した。

「何故だい？ それはその本人が動かなくなっただけで、その遺体は残ってるじゃないか。火葬したつて骨は残る。骨を砕いても塵は残る。その塵だって、消去しようとしても必ず何かに変換されるだけで、完全な消滅はありえない。今の技術じゃあ、どうしてもそれはできないんだ。ましてやこんな田舎なら尚更だ」

その塵を海に撒いても、海の中で存在し続ける。それが例え磨耗して目に見えなくなっても、見えないだけで存在するということなのか。

その考え方を肯定するのなら。この世界は、屍骸に溢れている。

海だって何億、いや、兆をはるかに越える、それこそ、生命誕生の瞬間から始まった無限にも近い屍骸の山だ。

この瞬間にだって呼吸をすれば、何らかの屍骸を吸い込んでいるのだろう。

そう考えたら、俺は呼吸できなくなる。

今まで何気なくやっていたことが、途端に恐ろしく感じた。

それじゃあこの世界は、さっきの無縁仏塚のようじゃないか。

「だから失踪しても、必ず本人の痕跡はあるはずなんだ。本人がどのような状態になつていようかね」

つまりそれは。

「それが骨になつて、無縁仏塚に入つていようと、ですか？」

神酒さんの言葉に知聡は頷いた。

「無縁仏塚の特性は、【身元不明者の収容】。野犬の特性は、家畜を襲う。つまりは、【襲った対象を神隠しする】ことだ。そして、子滅らしの儀の特徴は、もちろん子供を滅らす。つまりはこれも【子供を神隠しする】ということ。ほら、なんだか繋がってきたら？」

全員頷く。怖いぐらいの関連性。いや、本当に怖いのは知聡の関連付けだ。ユイツの言い回

しを聞いてると、嘘でも簡単に信じてしまう。

「でも二人の夢どうなるの？」

部長は首を傾げた。

「どうにでもなるさ」

知聡は苦笑した。

「例えば、死体復活説を説くならば、無縁仏塚は遺体安置室、犬と子減らしの儀はその生贄を調達するための隠蔽工作だ。まあ、こんな時代にフランケンシュタインを作ろうとする奴は居ないだろうけどね。優治達が言うアメリカ人虐殺説だって、何かの隠喩なのかもしれないんだぜ？ まあ、個人的には噂の出回りが敗戦した直後って辺り、流言だと思っただが。国家の敗北を、何とかして忘れたかった人種にはこういう話は痛快だろうしね。良いかい、部長。ここでの話は何が真実かではなく、それぞれの噂などが、どのような役割を持っているかだ。役割はさっき言った通りだよ。ただこの役割には重なる部分があるね。犬神と子減らしの儀だ。そこは何を当てはめるかで役割を補強しあうだろうから、あんまり深くは考えないで良いと思うけどね」

一気に回りくどいことを言う知聡。理解が追いつかない。人に聞かせる気が無い喋り方だと改めて思う。もしかしたら自分に言い聞かせているのかもしれない。

「それじゃあ、君達の夢にこの役割を当てはめていこう。これは仮説だから少し無理やりだぜ？」

始めに知聡は断った。俺達が領いたのを確認して、再度知聡は喋り始めた。たまに通るかか
る職員さん達に、好奇な目で見られて少しだけ恥ずかしい。

「まず、無縁仏塚が神酒さんの夢に出てきた穴のモデルだと言ってたね？ それじゃあここでは穴イコール無縁仏塚ということで話を進めよう。まず、小さいときの優治と神酒さんが出会う。でないと共通の体験は出来づらいからね。優治の地元はこっちなじゃないから、知り合い辛いかもしれないけど、それは置いといて。二人は知り合い、仲良くなる。神酒さんの主な遊び場はお寺だったようだからね。優治ともそこで遊んだのだろう。そして、無縁仏塚を使って行う遊び。つまりは骨釣りを二人で行う。そして神酒さんは以前から見ていたが優治は初めて骨を見る。そして優治は無縁仏塚で、この骨達が蘇る方法を知るわけだな。肉を食らわせれば良いと。幼いときに見た白骨群は、そりゃあ心に何かしらの歪みを形成するだろう。優治みたいな性格だったら尚更だね。そして二人は帰宅途中に、野犬に出会う。神酒さんは地元人だから、アレは家畜を食べてしまう犬神さんだと。食べられてしまうかもしれないと、二人は逃げる。もちろん犬から人間が逃げられるはずないけど、何らかの要因が働いて逃げおおせることができるだろう。地元の人が助けてくれたのかもしれないね。こうやって辿っていけばなんとなく自然じゃないかい？」

「どうだろう？」と知聡は一息ついた。よく舌が回るもんだと感心した。コイツにそう言い切られたらそんな気がする。でも。

「俺は、その出来事を忘れていたのか？」

自分のことなのに、それが認識できなかった。いや、忘れていたら当たり前だけれども。少しばかりの説明できない違和感がある。

「そんな事は知らないよ。君の夢はまったく別の箇所から【白骨群】や【蘇る方法】【犬】を持ってきた可能性だつてあるんだから。仮説だと言ったじゃないか、まったく」

いや、その通りなんだけど。でも、ここまで関連性がある場所が電車一本の圏内にあつて、ここじゃない同じ属性を持った場所というのも無い気がする。

でも、それじゃあ俺は当時ここに来たことがあつたとして、知聡の言うように俺は彼女と幼少に出会っていたとして。何故俺はそれを忘れているんだ？

「そうは言うが。君は昔のこと。それこそ幼稚園や小学校低学年の時期を、明確に思い出せるのかい？」

それは。もちろん、思い出せないけど。

「断つておくがこれも仮説だぞ。君は幼少時に体験したそれが酷く恐ろしかった。それがトラウマになって記憶を封じたのかもしれないじゃないか」

恐ろしいから記憶に蓋をしたというのか。

確かにそれはあるかもしれない。けど、何だか釈然としない。

それはこれが真実ではなく、仮説だからだと自分に言い聞かせた。

「もちろん、虫食いだらけの説だと分かっているんだよ。情報が足りなすぎるからね。でも、今回情報を得たことで、夢の中の犬は犬神さんという側面を手に入れたし、舞台となる穴は無縁仏塚である可能性が出てきたわけだ。少しは進展したんじゃないかな？」

まあ、それはそうだろう。

他の二人も頷いている。ん、神酒さんの顔が少し暗い。

どうしましたか？ と彼女に問いかける。その言葉で、知聡と部長も神酒さんを見た。

「ああ、いえ。少しここは寒くて」

確かに気づけばすっかり汗は引いてるし、肌は少し寒いくらいだ。

「ああ、ユキの席は直接風が当たるっぽいしね」

「それじゃあ、一旦ここを出ようか」

知聡の言葉をきつかけに、俺達は椅子を直して資料館を出る。

なんだか悪寒がすると神酒さんが言うので、今日は解散することになった。

電車に乗り、地元に戻る。

帰りは知聡達の余計な気遣いで、神酒さんと隣同士の席になる。

神酒さん越しに見る窓からの景色はあまり変わっていない。

まだ昼の四時だ。夏ではそこまでの時間の変化は感じられない。

でも、今日はその約四時間足らずで色んなことがあつた。

大量の骨を見て、住職から逃げ、神酒さんと手を繋いだ。

言葉にすればたつたそれだけけど、濃密に感じられた。

いつの日かの俺も、同じような濃い体験をして、それを忘れてしまったのだろうか？

「僧正さん」

まるで俺のように小さな声なので、そのトーンからこれが内緒話だと気づいた。どうしました？ と合わせるつもりで、元から小さい声を更に小さくする。

「今日は色々ありがとうございます。おかげで色々思い出しました」

忘れていたかもしれない俺の隣で、思い出せたと微笑を浮かべる神酒さん。少しだけ羨ましい。自分のことを思い出せない俺は、まるで地に足が付いていないようなのだから。

何を思い出せたのですか？ 電車の揺れる音よりも小さな声で呟く。

「おじいちゃんのことや、先ほどの住職さんとのことです。おじいちゃんは町長もやっていたので、忙しいときもあって、お寺で一人遊んでいたときもあつたんです」

お墓で一人遊ぶ少女。何だかそれは物寂しい。

木々ならまだしも、石が乱立している場所で追いかけてっ子などをするのだろうか？

一人で遊ぶ幼い神酒さんを幻視する。小さいときの彼女はどんな風なんだろう。

「住職さんも手が空いたら色んなお話とか、遊びを教えてくださいましたから。おじいちゃんもあまり心配してなかったのですね。小さいときからおはじきやお手玉、カルタに百人一首。

後は、昔話や落語とか、怪談を良く聞きましたね。竹取物語とか唐茄子屋政談とうなすやせいだんを。怪談は皿屋敷などを聞いていた覚えがあります。でも、怖いのは苦手でしたのであまり覚えていないんですけどね」

彼女は恥ずかしそうにするが、俺は聞き覚えの無い単語に眉を顰しかめる。最初のはかぐや姫の話だ。けど、次のは知らなかった。最後のは確か、一枚、二枚、と皿を数えていくやつだ。

小さいときにそのような背景があるから、彼女は少し浮世離れたような雰囲気があるのだろうか。

「でも、何で忘れてしまっていたのでしょうか」

俺もそれが分からなかった。

何故忘れる必要があるのだろうか。後で知聡に聞いてみよう。

なんだか眠くなった。

汗を掻いて、走って、頭を使って。まだ一日は終わっていないというのに、色々あつて疲れしている。

微かに効いている空調が心地よい。さっきの資料館は寒すぎたから。

ああ、そうだ。彼女は大丈夫だろうか？

「寒くないですか？」

「ええ、大丈夫です。このくらい一番良いですよ。寒すぎるのはちよつと」

彼女の言葉に頷き、安心して目を閉じた。

微睡まどろむ中、必然性。と隣で神酒さんの難しそうな声が聞こえた。

この二日で、偶然と必然という二つを痛いほど聞いている気がする。

彼女の前でこんな格好をしてしまうのは、評価的にどうなのだろうと思いつながら、俺は先ほどの体験に蓋をした。

◆
その日の夜。

私はある事を思い立ち、その根回しが終わった後に、秋山君にメールした。

『私ね、あの二人には後押しが必要だと思うのよ!』

『こんな時間になんない。それに、今日だけで随分進展していたみたいじゃないか。部長も見ただろ? 手を繋いでいたんだぜ?』

『そこよ! 手を繋ぐってことは、どっちもお互いを嫌がってないってことじゃない?』

『まあ、優治はともかく。神酒さんは意識してないだけなんじゃないかい?』

『いやいやいやいや、甘いねワトソン君!』

『いや。相槌を促すようなメールじゃなくて、もっと内容の詰まったメールをしてくれ部長。こっちは君と違つてメールが無料じゃないんだ。でもまあ聞こうか、ホームズ先生?』

『いやね? ぶっちゃけ、ユキは古風な所あるから、男の子と普通には手を繋がないと思うんだよね。だから明日ユキを呼び出して、どう思っているのか聞こうかなーと思つてるのよ』

『ふむ。なかなか直接的な探偵だね(笑)。でも、何だつてそんなに二人をくっ付けたがるのかい?』

『んー。だつて、二人には幸せになつてほしいし。二人とも若いのに少し陰があるからね。もっと最近の若者っぽく、高校生活を明るく過ごしてほしいというか』

『本人達にとつては余計なお世話なんだろうけどね(苦笑)。というか、部長だつて最近の若者っぽくないよね、喋り方が。それに最近の、と使っている時点でアウトだ(笑)』

『がーん! 秋山君にそんなこと言われるとは思つても見なかつたですよーだ』

『僕は自覚あるから良いよ。部長だつてそうだろ?』

『まあねー。正直、女の子やるのも疲れるというかねー(苦笑)』

『それを僕に言うなよ、反応に困るだろ(笑)』

『いやね? 秋山君くらいにしか言えないのよ、こういうのは。正直、周りの男は女子に、女の子を期待するわけでしょ? 私は私だつーの!』

『君も二人と同じくらい病んでいるね。というか、愚痴になつてきているぞ。もう寝なさい』

『うう、秋山君にも無碍むげにされたー! 信じてたのにー!』

『ハハハ、無碍なんて言葉使っている時点で若くないね、部長(笑)。それに、俺だつて部長には女の子を期待しているぜ?』

『あれ? 私、今告白されちゃつてるー!?』

『ハハハ、それは無い。寝ろ(笑)』

『がーん! まあいいや。明日ユキにちよっかい掛けてくるよ。もう約束はしてるから。それじゃ、おやすみ!』

彼からのおやすみは来ないまま、寝る前のやり取りは終わった。
正直少しだけ、枕を濡らしちゃうかもしれない。
まあ、そんな乙女チックな発想自体に憧れている時点で、色々アウトだ。
彼の言う通りだなー、なんて思いながら私は寝ることにした。
変な夢を見たら、今日のせいだ。



次の日。

朝というより、昼に近い時間に目が覚めた。

結局、変な夢は見なかったけど、気分は少しだけ重い。まあ、いつものこと。
適当に身支度を整えて、スカートかジーンズかを一分ほど悩んで、ジーンズを穿いて、私はいつも使っているカフエに向かった。そこでユキと待ち合わせをしているのだ。

玄関の扉を開ける最後の最後まで服装に悩んだけど、結局そのまま出かけることにした。
女同士の集まりに、スカートを穿く意味は無いし。

でも、カフエに行くまでの十分間で私は後悔した。ジーンズは暑くて蒸れる。最悪だ。せめてハーフパンツにしておけば。と後悔しまくりだけど、一旦戻るのも馬鹿らしいし我慢しよう。やっとカフエに着くと、既にユキはいつものテラスで紅茶を飲んでた。

彼女が着ているのはレースの多い黒のワンピース。彼女が黒を着ていると、ゴシックロリータというより、喪服を連想させる。いや、どっちも今の格好とは似つかないけど。

露出が多いのに喪服をイメージしてしまったのは、落ち着いた彼女の雰囲気のせいだ。けれどそれは良く似合う。まるで優雅に茶会を楽しむ貴婦人のようだ。

私と違って、格好に気遣っているからだろう。

機能的で格好を選ぶ私とは大違いだ。まあ、今回は失敗したけれど。

「ユキ、お待たせ。待った？」

できれば男の子に言いたい台詞。

私の声に気づいたのか、彼女は読んでいた本を閉じて顔を上げ、いえ、と微笑んだ。

はあ、悲しいくらいに綺麗だなあと、見とれてしまった。

正直、私が彼女くらいに綺麗だったら、もっと人生が楽しかっただろうな、なんて思ってしまう。無いものねだりなのは分かっているんだけど、しょうがない。

対面する席に座り、少しだけ格好良い無精髭のウェイターさんに、アイス珈琲を注文する。

「にしても、暑いねえ」

昨日はまだ秋山君と僧正君という、個人的に気に入っている男の子二人が居たので、それこそ薄化粧もして、露出もしていたけど、今は全然だ。ジーンズ暑いし。

「暑いですねえ」

そう、涼しそうにユキは微笑を浮かべた。

ここは木陰の席だし、来たばかりの私より落ち着いているんだろうけど、なんだか悔しい。この子は本当に暑さを感じているのだろうか？

「にしても、何を読んだの？ うわ“更級日記”？ またタイムリーな物を。あ、アイス珈琲私です。はい。——はあ、冷たい。で、何で？」

やっと一息ついた私は、なんとなく質問してみた。聞きたいことが聞きたいことだけに、少し聞き辛い。

「古文の黒崎先生は、夏に必ず読書感想文を出されるので、今のうちに、と」

だからって、今まさに授業中にやっている作品を読まなくても良いような気がするんだけど。まあ、この辺りが彼女っぽいと、私は思わず苦笑してしまった。

「可笑しいですか？」

少し拗ねるような仕草を見せるユキ。可愛いなあ、もう。

「いや、ユキっぽいなってね。で、面白い？」

私は古典なんて、ちーつとも面白くないと思うんだけど。

「そうですね。作者の菅原考標すがわらたかすけのむすめ女は過去の人ですが、同姓として納得する部分も結構ありますし、考え方も現代人っぽくて面白いですよ？」

うーん、古文のクロツティーなら涙を流して喜びそうな台詞だけど、私はどうも興味がでない。

「例えばどんな考え方なの？」

一応興味があるポーズを試してみた。

授業でも習ったじゃないですか、と苦笑されたが、正直覚えていない。

「例えば彼女は幼少時に“源氏物語”の光源氏のような、素敵な男性と恋をしたと思うところですかね。他にも——」

チャーンズ。私は思わず、にやり、とってしまった。

「ユキも、素敵な恋をしてみたいんだ？」

どう誘導しようか悩んでいたというのに、こうも簡単に事が済んでしまった。強引に話を遮り、質問してみた。これが今日の本題だ。

「——そうですね。できることなら、してみたいですね」

歯切れが悪く、ユキは答えた。彼女も色々考えるところがあるのかもしれない。

思案しながらアイス珈琲を口に含む。冷たくて心地良かった。

「でも」

微妙に勝ち誇った感があったのに、彼女はそれを遮った。

「今はどうしても、夢のほうに気になるのです」

だから恋愛に目が向かないのか。

贅沢な悩みだと、私は呆れた。

「何でそんなに、夢が気になるの？」

ただが夢じゃないか。

何故そんなにそれが気になるのだろうか？

ユキのそれは。まるで夢に恋しているような熱の入れようじゃないか。

それじゃあ。彼女は骨に恋をしているのと同じだ。

「そうですね。何故でしょう？」

彼女は笑った。でも、寂しい笑顔だと思った。

不思議な空気になる。私達はお互いに飲み物を飲む事でそれを消化しようとした。少しだけ後ろめたい。彼女が綺麗だからだ。綺麗だからその一つ一つの仕草が、過剰な意味を持つのだ。

「これからどうします？」

彼女のその一言で、なんとなく救われた気分になる。

「付き合っってほしい所があるの」

昨日の無念を晴らしに行きたかった。食べないとやってられない。



「それで、ここですか？」

それで、ここなのです。

ユキを連れてY市に到着する。その足で速攻、ベーカリーショップの扉を開ける。お昼時なので、やっぱり自暴気味な、いらっしやいませ、が響いた。

「昨日も来たじゃないですか」

ユキは溜め息を吐く。おお、なんか珍しいものを見た気がする。

問答無用にトングとトレイを渡しながら、感心する。

この子も溜め息が吐けるんだなあ。

私も自分のトングとトレイを持っていざ、出陣。

チョコ。チョコ。昨日食べたのは置いて、ああ、これも美味しそうだ。

「貴衣さんは本当に、チョコレート好きですね」

二人のときにしか使わない人称で呼ぶ、彼女のトレイは昨日とあまり代わり映えのしない内容だった。そんなにこの店に魅力を感じないのだろうか？

「まあねえ。甘味は人生を豊かにするのよ」

そして、お腹周りも豊かになるのだ。うーん、切ない。

とりあえず目ぼしいチョコレート系のパンやらドーナツをトレイに載せて、忙しそうにする店員に珈琲を注文してそれを受け取り、会計をしてもらおう。バイトなんだろうか。手際が少しだけ悪いように思えた。

まだパンを選んでいるユキの代わりに、長話をするつもりでなるべく隅の空席に座る。前回はパンの種類を全て見渡して吟味していたけど、今回は見渡さなくて良い分、少し早かった。

しばらく、ぼう、と硝子製の壁越しに景色を眺める。

緑が風で揺れているのを確認して、外で食べたら気持ちが良いかもしれない。でも、外に出たらどうせ汗を掻くのだ、その提案は却下。やっぱり夏はクーラーの中で過ごすのが一番だし。

自分のへたれ具合に苦笑しながら、私はホットを口に含む。どうせ寒くなるのだ、なら暖かいのを頼んでいた方が良さ。それに、甘いのは暖かいのを飲んでこそ引き立つ気がするし。

ようやくユキがトレイを持って、きよるきよる、しながら私を見つけた。

「貴衣さん早いですね」

前回は彼女の方が早かったからだろう。素直に驚かれた。

「貴衣で良いってば」

私は彼女を名前で呼ぶのに、彼女は私を苗字で呼ぶのは距離を感じるからと、名前を呼ばせているのに、未だに彼女は私をさん付けする。

まあ、もう慣れたけど。言い続けて二年目だし。

「いやですね。これは敬称じゃなくて、愛称なんですよ。うん、そうなんです」

必死に弁解する彼女が、少し面白かった。

「まあ、食べよっか」

彼女はそれに頷き手を合わせて、いただきます、と言った。最近の子にしては律儀なことだ。

私も一応それに習い、同じことをする。正直歯がゆいし、恥ずかしかった。

「今日はここに来る為に？」

最初のを食べ終わり、二つ目のドーナツに手を掛けようとしていると、ユキはそう尋ねてきた。彼女も手持ちを食べ終わり、丁度良かったのだろう。

まあ、残りのパンは彼女が残り一つ。私は残り三つ。食べ終わる時間がどうしてもユキの方が早くなるのを加味した会話なのかもしれない。

でも、本題は彼女が僧正君をどう思っているか聞くことなので、素直に言うのは憚はばられる。

「まあ、そんなとこかなー」

適当に濁す。きつと不信に思われているだろうな。

「それならこれからどうします？」

ここに来るのが目的なら、もうそれは達せられたらとうとうという、圧力を掛けられた気がする。気のせいかもしれないけど、それを感じたからにはそれなりの返事をしないとイケない。

「そうねえ。ユキのオススメある？」

私はこの町を知らないし、と結ぶのが悪かったのか。

「それじゃあ昨日、貴衣さんが行けなかったお寺とかどうです？」

ユキは、静かに提案した。

昨日行けなかったのなら、さぞ残念だろう。

と遠まわしに言っている。けれどこれは口実で、手引きのようなもの。彼女はどうしても行きたいのだ。いや、会いたいのもかもしれない。

骨に。

私は僧正君ではなく、彼女が骨と会合するための手引きをする。

◇

正直疲れた。

まさか昨日、彼女達がこんな山道を登ったとは。

そりゃあ、勾配は緩いし頂上まで歩かなくて良いんだろうけど、夏だし。ジーンズだし。汗がすごい。

「ほら、あそこですよ」

指を差す彼女は平然としている。いや、薄っすらと汗は掻いているけど、私とは違って苦を感じていないようだ。高く無いとはいえ、ミユールなのに良くこんな登れるなあ。

指の先に視線をやると、そこには確かに寺があった。

山を平らに整地して作ったかのような立地だ。

大きく深呼吸をして、足を上げる。目的地が見えたのだ。泣き言は言えない。

「これが？」

「そうです。無縁仏さんですね」

その十分後には、ユキの案内でお墓をすり抜け、朽ちた寺を見学して、ここに来てしまった。

巨大な塔のようなオブジェには、確かに仰々しい金色で無縁仏塚と書いてある。

その下に小さな扉。これを開ければ骨釣りができるに違いない。

つまり、この下に彼女の焦がれる相手が居るのだ。対面させてはいけない気がした。

「開けてみますか？」

開けたいのだろう。

彼女の問いは静かな凄みがあった。これは半ば強制だ。

「いや、遠慮する。怖いし」

それを阻止したいのもあったが、純粹に怖くもある。

私は、この塚と、彼女に、少なからずの恐怖心を抱いていた。

「———ですか」

名残惜しそうな声が、墓場に満ちた。

いや、私の耳に残っただけだろう。声は大きくなかった。ただ、彼女の声は特殊なのだ。彼女の声は耳で拾うのではなく、もつと深いところで拾っている気がする。

だからかもしれない。

「でも、私は怖くて開けられないけど、興味はあるよ」

そんな馬鹿なことを言ってしまったのは。

「———嗚呼、それじゃあ私が開けましようか？」

彼女は笑った気がする。

怖かったのだろう。気づけば半歩後ろに下がってしまったている。

ユキは塚の石戸に手を掛ける。それを全部開けた彼女は振り向く。私の心臓は跳ねた。

「ほら、貴衣さん」

彼女の白い指を差す。その暗闇を。

夏でこんなに日差しが高いというのに、その塚の中は暗闇が跋扈はつこしている。

うん、とまるで自分の声じゃないような音を出して。無縁仏塚に近づく。

指の先にはやはり暗闇。

「そこからじゃあ見えませんよ？」

ユキは笑った。

私は泣きそうだ。

足を曲げなければ中は覗けない。

そもそも覗くような場所じゃないのだから当たり前だ。

中を見るのが怖いのか。

彼女と同じ体勢になるのが怖いのか。

そもそも、彼女が怖いのか。

もう、泣きたくなった。

わけが分からず涙が零れそうだ。

ユキが背中を押す。

「ほら、沢山骨があります」

中には無数の骨が確かにある。

けれど何故それを私に見せるのだ？

自分一人で見れば良いのに。

暗くてあまり良く見えなかったけど、私は彼女の言葉に同意する。

彼女の手が背中から静かに離れた。

それをきっかけに私は塚から飛び退く。

「どうです？」

何に對しての感想を言えというのか？

「怖かった」

これだけだ。感想なんてこれだけだ。

そうですか。とユキはまた笑った。

何が愉快なんだろう。こっちはちっとも楽しくない。少しだけ不愉快だった。

「何故、この中を見せたの？」

自分から興味あると言っておきながら、私はそんなことを言った。これじゃあ興味が無かったのにと、自分で言ったようなもんだ。我ながら失言だったと自己嫌悪する。

彼女は微笑むだけで回答しなかった。

いや、できない。だって、答えは私が本来持つべきものなんだから。

「貴衣さんとここに来て。懐かしかったのかもしれない」

けれど、彼女は答えた。答えてくれただけなのかもしれないけれど。

「昨日も来たのに？」

「ええ。何故か懐かしさを感じました」

彼女は、自らが忘れてしまった過去を、思い出そうとしているのか。

私と僧正君の違う点と言えば、夢を見ているか見ていないかくらい。でも、彼と一緒にいるのは感じなかった懐かしさを今感じているのなら、夢は関係ない。

えっと、他に彼と違うのは、名前と性別、趣味、信条。容姿も違うし声も違う。

まあ、絞りきれるはずが無い。

私も過去にここに来ているのかと、一瞬馬鹿なことを考えて止めた。それよりも。

「年齢が近い、近所の女友達とでも遊んでたんじゃない？」

このお墓が遊び場だったというし。ここで飯事まめことをするというのは、少しだけないけど。

「ここで、誰かと？」

「ほら、まだ推測だけ僧正君とも遊んでたらしいしさ。有り得なくは無いでしょ？」

男の子より女の子と遊ぶでしょ、そりゃあ。

自分で言っただけ、そういえば本来の目的を忘れていたと思ひ出した。

「一人で、遊んでいなかった？ でも、お爺ちゃんも、住職さんも居たし、一人じゃ——」

呟くように。いや、言い聞かせるように。過去を掘り起こしていく彼女。

「まあ、分かんないけどさ。それよりそろそろ帰らない？」

坂を降りて、バスに乗って、電車に乗るのなら、そろそろ時間が微妙だ。遅いと親が怒るし。

そうですね。とユキは呟いた。ここに来るまでの元気さはどこに行ったんだらうか。

緩い山道を降りて、バスに乗り、電車の待ち時間が二十分あるのに気づいた私は、駅構内に入ろうとするユキを引き止めた。

なんですか？ とすっかり元気の無い彼女に私はベーカリーショップを指差す。

「えっと、時間が——」

戸惑うユキ。

「違う、そこで食べない。テイクアウト、持ち帰り」

何故か片言になってしまった私の言葉に、彼女は苦笑した。

「貴衣さんは本当に好きですね」

あの店のチョコレート系は、後四つぐらいでコンプリートなのだ。

私はそれに頷いて走った。

そういえば、ドーナツとかは保冷剤を入れてもらえるのだろうか？

そんなことを考えていたらまた思い出した。

ごめん、僧正君。電車の中では必ず聞くからね！

月曜日。

神酒さんは学校に来なかった。

土曜日に行った資料館の空調のせいで風邪を引いてしまったのかもしれない。

昼まで待っても美術室に来ない彼女に、なんだか落ち着かない。

というのも基本的に俺達美術部はお昼を美術室で食べる。教室の賑やかな雰囲気はなんだか苦手だし、こっちだと昼が終わるまでは自由に珈琲も飲めるから。

同じクラスの知聡は堂々とゲームをする為に昼はここに居るし、部長も鍵を開ける為にここに居る。まあ、彼女もゲームが好きなんだろう。鍵を開けるといふ理由でいつも付き合ってくる。本来だったら、喧騒を嫌うのか、神酒さんもここでよく食事をしているけど、今日は居なかった。

それに、さつきから彼女と同じクラスの部長が、にやにや、しながら俺を見ている。正直、気が散ってしょうがない。

「この前散々一緒に居たからね。君の遅刻癖でもうつつたんじゃないか？」

隣の席で知聡は笑った。感染症のように言わないで欲しい。ただでさえしないように心がけているのに。まあ、本当にそうなら、放課後には来てくれるはずだ。

「それは無いんじゃないかな？ 担任が風邪だって言ってたし」

部長は鞆を開けながら気楽に言った。

やっぱり風邪を引いたのか。

俺がちゃんと気づいていればそんなことにはならなかったのに。

小さく溜め息を吐いたら、知聡に睨まれた。

「優治いい加減にしろ。好きなのは分かるけど、彼女の風邪は不可抗力だぜ？ お前が気に病むことじゃない」

隣で部長もカードを片手に、もう片手に黒いパンが握って頷いている。

そう言われても、未然に防げたかもしれないなら、やっぱりそれは。俺の責任なわけ。

知聡は露骨に溜め息を吐いた。

「何を全て背負うつもりで居るんだ君は。好きになったからと、そこまでしないとイケない理由なんて無いんだぜ？ そんなのせめて彼氏にでもなってるからにしろよ、重苦しい」

カードを机に置きながら、彼は苦笑した。自分で言っただけで面白かったのか。

でも、コイツの言うとおりで。俺は彼女の荷物を背負う権利すら無いのだ。

「秋山君は言いすぎだけど、そうだよ。僧正君は何も悪くないんだから。昨日私と遊んでたし。

土曜日は関係ないよ」

部長もそれに続く。俺は何を自惚れていたのだろう。彼女に少しでも頼られたらもうこの様だ。恥ずかしい。

ぼう、と二人のカードゲームを眺める。相変わらず部長は劣勢だ。

神酒さんはどうしているだろうか？

そういえばあの日、彼女は最後に何を言ったんだっけ？

ああ、忘れる理由だ。何故人は忘れるのか？ 大事な思い出だったのに、何故と。

「なあ、知聡」

気づけば声が出ていた。

「なんだい、色ボケ」

いちいち棘がある言い方だけど、まあいつものこと。

「何で人は忘れてしまうんだ？」

俺の問いに、知聡は溜め息を吐いた。

「何でって、脳が疲れるからに決まってるだろう」

当たり前のように返された。

脳が疲れるから人は忘れるのか？

「はあ、何だって貴重な昼休みにそんなことを聞くんだい、君は」

「俺が何故、Y市のことを忘れたのか気になって」

本当は神酒さんの言葉が気になったただけだけど。

「ふむ。まあ、目下の話題はそのネタだからね。君が本当にY市に関係しているかは別として、それについて考えていてぶち当たった悩みだっていうのなら、僕なりの定義でよければ答えるが？」

これまでも、お前の定義、仮説を前面に進んできたんだ。今更信じないというのも変な話だし、自分で考えるよりも合理的な回答が得られるだろう。

それに俺は頷いた。知聡は部長に少し休戦だと告げてカードを机に置いた。

彼女もそれに習い、カードを机に置くと、両手で黒いパンを持つ。

またチョコレート系か。無駄に好きだよな、この人。というかなんか見覚えあるし、それ。「えっと、それじゃあ分かりやすいかは別として。脳をパーソナルコンピュータに例えようか。

想像してみてください。パソコンを起動したら大抵デスクトップにフォルダがあるだろ。そのフォルダが記憶だ。その記憶と明記されたフォルダを開き、階層を下るとまた沢山のフォルダが入っている。それは様々な記憶ごとに整理されていて、例えば学業だとか、例えばスポーツだとか、様々な記憶が整理されて置いてあるわけだね」

生物としての記憶の話が、急に機械チックになったのに違和感を覚えながらも、必死に想像する。

「例えば、君が神酒さんの顔を思い出そうとする。その際の手順は、デスクトップ上の【記憶】のフォルダを開いて、【人物】のフォルダを開く。その中の【神酒 幸美】というフォルダを開き、中には大量にテキストデータが保存されている【個人情報】と書いてあるフォルダや、彼女の仕草などを纏めた【ムービー】フォルダを尻目に、【画像】というフォルダを開くことで、脳という名のモニターの前に座っている君は、初めて神酒さんのことを思い浮かべることができるわけだ。これが記憶のうち、【思い出す】という手順だ」

なんとなく想像ついた。少しだけ分かりやすかったのは、知聡の中で明確な定義付けができていたからだろう。仮説のうちにはコイツの説明は理解し辛い。

「次に【忘れる】という手順なんだが、これには三通りあってね。まず一つはさつきも話した、疲れるから忘れるというパターンだ。これは言わばリソース不足と同じ意味だね」

「リソースって何？ 私は情報処理を取ってないから分かんないんだけど」

部長は口を尖らせた。俺もその授業を取っているけど、説明するには自信が無い。

「リソースというのは、資源という意味だね。説明するとすると、ウィンドウズ自体の話からしないといけないからそれは割合するけど。要はこのリソースが足りなくなるとアプリケーションが起動できない。最悪の場合、ストールする。つまり、記憶を思い返すどころか、他の命令系統である【走る】だとか【手を振る】ということも困難になるわけだ。これは言い換えればパニックだね。脳は記憶だけを司っているわけじゃないから、他の動作に関するアプリケーションも使用する。さて、これらを引き起こすリソースが少なくなる条件は、アプリケーションを多数起動させていること。つまり、脳がフルに回転している時だ。その際には、記憶しようにも、フォルダを作ることができないから、その情報は記憶されない、つまり【忘れる】ということになる。ちなみに、ど忘れなんかもこっちに入るんだぜ？ あれは、思い出そうとしている物の容量がでかすぎて、思い出すにはリソースをどうにかしない限り思い出すことができないという、実行することができないという状態だ」

なるほど。記憶を迫られる際に、脳が手で一杯の場合、それが保存されることなく消えてしまう可能性があるってことか。それは忘れるというより、脳を通過するというか。

「もちろん、本人は脳の回転のことなんか分からないからね、記憶できたかなんて確認できないし、しようがない。だから、この場合は【忘れる】というより【知らない】が正しいのかもしれない。でも、今回はそれも加味して話しておくよ。後から聞かれたら面倒だからね」

「うう、なんかパソコンの用語が絡むと混乱するなあ。ちなみに、ストールって？」

今回は分かりやすいと思っていた俺と裏腹に、部長はパンを片手に唸っている。いつもと逆の構図が少し可笑しかった。

「車とかのエンストって言えば分かるかい？ まあ、部長は文系だからね。それはしようがない」

知聡は笑った。コイツは文系と理系のどちらにも属していない気がする。

「さて、昼休みは短いからね。次のパターンだ。さっきの【忘れる】は、記憶できない状況なのに、記憶していると勘違いして起こる、記憶違いというケースの【忘れる】だ。そして今回は、情報不足による【忘れる】だ。これは分かりやすい。何せ、記憶が無いだけだからね」

「えっと、記憶喪失とかいうこと？」

そうとしか聞こえない。でもコイツの性格上、絶対にその回答は間違っている。というか、わざと間違いを促させて、その解答をすることで話をスムーズにしているだけ。コイツからの問いかけは大体に誘導なのだ。

案の定、部長の回答は否定された。

「いや、情報不足だよ。欠落じゃない。そうだね。まずはフォルダの作られ方から行こうか。まず、正しい記憶というのは、画像だけじゃ構成されていない。もちろん、情報だけでもだ。今回は部長を記憶してみるとしよう。まずは彼女の外見。これを見ればまず、【未定義フォルダ】の中にある【画像】フォルダに彼女の外見の写真が保存される。このままでは、彼女と別れ、再度出会った時にしか、このフォルダの自身は参照されることはない。次に彼女の個人情報だ。彼女から名前を聞くことで、初めて【古賀 貴衣】というフォルダが作られるわけだね。まず、名前ありきなんだ。名は体を現すとかいうだろ？ 記憶の場合はそれが顕著でね。名を与えてやらないと記憶できないんだ。ああ。無論、自分で勝手に名前を付けてフォルダを作るのもありだぜ？ だから勝手に記憶している場合も多々ある。例えば綺麗な人が通りかかった時なんかは、他の記憶との明確さが歴然だろ？ それはちゃんと【名前を付けて保存】しているからなんだ。美人さんとかね。さて、記憶というのは厄介でね。画像だけの場合だと、【未定義フォルダ】に入れて終わりだけど、中には名前だけ知っているってパターンもあるだろ？」

頷く。神話とかに登場する神様や妖怪、刀剣類など、名前しか知らないものばかりだ。

「そういうのはね、一応フォルダは作られているから、いちいち【未定義フォルダ】を参照しない分、読み込みは早いんだけど、フォルダの中には何も入ってない。入っていたとしても、ただが、どこで見聞きしたというくらいだ。そんなもの何のパーソナルでもないのにな。さて、この瞬間に。その物は知っているのに、それについて何も知らないというある種の矛盾が生まれる。脳は矛盾を嫌うものだね。何故知っているのに知らないのだと自問する。その回答の一つが、二つ目の【忘れる】だよ。フォルダがあるからにはそれを知っていた。フォルダが空なのは忘れてしまったからだ。と脳が結論するのだね。つまり、完璧な情報で無いが、記憶されたが故に起きる現象だ」

記憶した直後ではなく、しばらくしてその事柄をもう一度思い出す際に、確かに詳細を思い出せないときがある。つまりそれはそういうことなのだろう。

適当に覚えていたりする俺は、結構こういうことがある。本などを読んで、いざその記述を思い出そうとしても、思い出せないときがあったりするの、こういうことなのか？

「なんだかそつちは分かりやすいなあ。私もたまにテキストの読み違いはあるし」

「それは誤認なんだろうけど、まあ同じようなものだ。保存していたテキストが違うわけだから、悪いのは脳ではなくそのテキストを書いた本人なわけだけだね」

むう、と唸る部長を尻目に、知聡は少し顔を顰めた。

「さて。それじゃあ最後のなんだけど、これは少し特殊だね。本人が関わることが無い忘却の仕方とも言おうか」

記憶を保持しているのはその本人なのに、忘却するのは本人に関わりが無い？ 意味が分からない。記憶は夢と同じく主観だ。人は人の記憶を覗くことができない。故に先ほどの先例のように、自身が記憶できない状態であったり、記憶違いをしている状態であったり、本人が本人の記憶に関わるしか記憶に干渉ができないはずではないのか？

俺の顔を見て、知聡は満足そうに頷く。俺の心を読み当てられたような気がして、鼓動が早

くなる。

「そう。普通は記憶に関することは、その持ち主である本人しか干渉しないんだ。けどね、それを完全とまでは行かないが、外部から操作する方法はある」

それは酷く恐ろしい。

そんなことが可能なら、人は何を頼りにして生きていけば良いのだ？

過去があるからこそ確固たる自我が生まれるというのに、それが無くなってしまったら。過去が信頼できないものなのだとしたら。自分は自分で無くなってしまおうではないか。

あまり聞きたくない。

聞いてしまったとき、自分が自分で居られないような気がする。

「簡単だ。催眠を掛ければ良い」

簡単そうに。そして、いかにも当たり前のように知聡が言うもんだから、俺はつい苦笑してしまった。予想とは裏腹に多少のユーモアがあったから。

それに知聡は反感を覚えたのだろう。俺を軽く睨みつける。

「ふん。どうせ君の考えている催眠なんて、テレビとかで良く出てくる、被験者を眠らせたりした後には鳥などにしてしまう、所謂“舞台催眠”とか言われるショウ催眠なのだろう？」

言い当てられて恥ずかしくなった。

隣で部長が少し驚いている。

「うーん。えっと、どう違うのかな？」

実はこの人も言い当てられた口なのかもしれない。

「そうだね。まずは催眠について簡潔に説明しないといけないね。まず、催眠の一番身近な例で行こうか。優治。君は何の科目が苦手だい？」

急に学業の話になって困惑する。これが知聡の言う、リソース不足に陥る要因の一つなのかもしれないと考えながら、英語だと答える。何故だと返されたので、教諭のテンションの高さについていけないのだと白状した。

「ふむ、君は英語の教諭、マイケル先生に苦手意識を持っているわけだ。だから結果として英語が苦手になっている。つまり自分はあの教諭が苦手だから、英語も好きじゃ無いというマイケルの自己暗示を掛けているわけだね。これだって催眠だ。一応苦手を克服しないとイケないという潜在意識があるのだろうが、人間はどうしても潜在意識には勝てない。苦手だということを潜在意識の方に刷り込んでしまったら、後はどうやっても英語が苦手なままなんだ。まあ、確かに僕もあの先生のテンションには付いていけないけどね。こればかりはお国柄だ。しようがない」

知聡は苦笑した。

無意識下に刷り込ませることを、催眠というのか。

だから俺はマイケル先生が苦手で、それが潜在意識に刷り込まれたが故に、意識上、いや。潜在意識上で慣れようと思っていたとしても。根底にある潜在意識には勝てないので、どうしても苦手だということなのだろう。

「そして、催眠というのはその潜在意識に流れる情報を変えることで、その人の意識改善を促す技術なんだ。術なんて言葉が付いているが、催眠術はれっきとした心理学を応用した技術なんだぜ？」

テレビとかで見るのは、本当に魔法のように奇術めいた雰囲気ややるから勘違いをしていたかもしれない。

「さて、それじゃあ催眠の掛け方についてなんだが。実は、これについて君達は半分以上その術を知っている」

そう、なのか？ もちろん実感が沸かない。催眠術の掛け方を教わっていたわけじゃないから当たり前なだけ。俺達が聞いていたのは忘却の仕方だ。

「部長。人が物事を記憶できない状態にするにはどうすれば良い？」
えっと、と部長はパンを銜えながら賞味十秒ほど唸った。

「つとりソースでしょ？ リソースを不足させてあげれば、これ以上フォルダが開けないし、作れない。アプリケーションの起動も、うんちゃら、できないから記憶できないんじゃないか？ たっけ？」

それに苦笑しながら知聡は頷く。それを見て部長は安堵の息を吐いた。

まるで教諭と生徒みたいな位置関係に苦笑して、それがあながち間違っていないと言うことに気づいた。

まあ、本当にそうなら、彼女は授業中に食事していることになるんだけど。

「その通り。つまり、催眠術を掛けるときは同じように、相手のリソースを不足させてやることから始めるんだ。だからテレビとかでやるように大掛かりなセットはある意味効果的だね。人にこれから起こることを過剰に意識させて脳を疲弊ひへいさせる。つまり、リソースを無駄に使わせている状態にさせることができる。後は、手順に沿ってやるだけで、相手のリソースは不足して、ストールを起こす。つまり再起動を迫られるわけだね。この状態のとき。人は顕在意識ではなく、本能の潜在意識の方で再起動を行う。この瞬間に情報を流すことによって、その人の意識改革を促すというのが、本来の催眠術という技法なのだ」

なるほど。脳を利用する技術だということなんだろう。

「人は潜在意識に逆らえない。そして、記憶というのは潜在意識と顕在意識の狭間に存在する。潜在意識がこの記憶を封じると命令すれば、それに購うことができるのは誰も居ないのだからそれは実行される。これが、三つ目の【忘れる】だ」

少し分かりにくい。いや、大筋は分かるんだけど。もう少し詳しく話して欲しい。

俺がそう言うと、なら優治向けにまた用語で答えようと、知聡は溜め息を吐いた。

「そうだな。例えば顕在意識はアプリケーションだ。人間の行動一つ一つのね。手を上げるというのは、意識してやつてることだろ？ これは、【手を上げる、ドット、エグゼ】を起動させているのだ。そして、潜在意識はオペレーティングシステムだと考えれば良い。僧正 優治というハードウェアを円滑に動かすのが役目だ。例えば、火に手を突っ込むと、熱さで手を引くだろう？ それが潜在意識だ。僧正 優治を円滑に運営する為に存在する」

なるほど。そうやって言われれば納得が良く。アプリケーションはそれを総括しているオペレーティングシステムには勝てない。

その説明のは彼女に馴染みが薄かったのか、部長は鞆から別のパンを取り出しながら、渋い顔をした。というか、その黒いパンはいくつ入っているんだろう？ それにいくつ食う気だ？ 「ほら、テレビとかで手を叩いたりすると催眠が解けたりするじゃない？ 三番目で忘れさせていた場合。同じように手を叩くと思いつく？」

どうやら違うことを考えていたようだ。だけど、それは俺も気になる。

「いや、手を叩くというのは、それが解除キーだからだ。潜在意識にあらかじめ命令しておくんだ。手を叩いたら催眠に掛かっていることを忘れる。もう一度叩いたら催眠は解ける。つてね。何も手法は手を叩くだけじゃない」

なるほどね。と部長は頷いた。が、それはすぐに横に倒れた。

「ねえ。何だか一番目と三番目って似てない？」

言われてみたら確かにその通りだ。どっちもリソースが不足しているとき起きる現象なんだから。

「いや、別物さ。確かに混合しやすい説明だったかもしれないけどね。まず、一つ目の方はリソース不足の際に、記憶しようとしてそれがなされない、受動的な【忘れる】だ。それに比べて三つ目のほうは、リソース不足に相手を追い込んで、それを利用して忘れさせるといふ、能動的な【忘れる】だ。いや、忘れさせるといふほうが正しいかな」

つまり、自分自身のせいか、自分以外のせいかということなのか。

そういえば、俺は。何故忘れているのだ。

「それじゃあ、俺が忘れていたのは何故だろう？」

「そうだね。例えば骨を見る、骨を釣る。犬に襲われる。これだけの体験を幼少時にしたらどうなる？」

ああ、つまり。

「そう。リソースが不足するだろうね。幼少の頃はOSの型が古いと考えるんだ。つまり、リソースも少ない。パニックになりやすいってことだね。まあ、その分メモリはまだ全然使われていないんだけどね」

「あーきーやーまーくーん。OSっていろいろの？」

「おっと、失礼。オペレーティングシステムのことだ。まあデータを管理しているものだと思うって間違いは無い」

忘れたのではなく、記憶できなかったということなのか。

確かに全てを体験すれば、さぞ濃密な時を過ごしたのだろうし。

「でも、一つ一つを加味していけば」

そんな一気に経験しているわけでもないだろうし。

「それじゃあ、君は一つ一つの物について、きちんとした情報を得ながらでないと行動しないのかい？」

それは、確かに違うけど。

「子供の頃なんて、それはそういうものだ、という認識だけで記憶するもんだぜ？ 情報の信憑性なんて微塵も無い。だから幼少時の記憶なんていうのは大抵薄れていく。幼少時はそれこそ【未定義フォルダ】の山だ。定義しようにも、曖昧な定義しかできないからね。OSはそれを許さない。だから何度も体験することしか、それに触れる機会が多いものしか定義できないんだ」

それじゃあ何故、俺は夢を見たんだ？ と俺は漏らした。

忘れているのなら、何故。

「それが夢の役割でもあるからだよ。たまには思い出さないと忘れてしまうからね。使わないのは要らない。ならばメモリの無駄だ、整理しよう。そうすればもつと円滑にこのハードを運営できるはずだ。そうやって使用していないアイコンをデスクトップから減らす。それが、脳というオペレーティングシステムの役割だ。ただね。このOSはどうしても記憶の消去だけはできないように設定されているんだ。だから、使用していない物を見つけるたびに、フォルダに入れて整理する。ただ、そのフォルダ名が【夢】という名前なのだ。このフォルダは他にも、【願望】だとか【欲求】だとかを表示させないといけないという決まりがあるんだけどね」

そうして、決してそれを忘れないようにする為に、周期は遅いかもしれないけど、整理した画像や情報を夢として登場させるのか。自動で進むスライドショーのようなものなんだろう。

ああ、情報量が多すぎて混乱する。もしかしたら、忘れてしまうかもしれない。けれど、確かに辻褄がある。そういうことだったのなら、忘れてしまってもしょうがない。

キンコンカンコン、と予鈴が鳴った。昼休みは終わり、この五分後に清掃が始まる。

「ああ、結局決着しなかったし！」

「ライフ差で部長の勝ちで良いよ。それじゃあ退散しよう」

急いで並べていたカードを集め、半透明な白いケースにカードを入れる二人。部長の顔が少し不服そう。そんな勝ちば彼女の美学に反するのだろう。

というか、彼女は未だにパンを食べている。真面目にいくつ食べるつもりなんだろう？
つと、それよりもやらないといけないことができた。

「知聡。俺早退。頭痛い」

こめかみを押さえながら五時間目の教師によりしくと呟く。

それを見て知聡と部長は笑った。

「あはは、お熱だね。神酒さんのお見舞いに行くのかい？」

すぐにばれた。もしかしたら俺は顔に出やすいタイプなのかもしれない。

「ああ、ああ。うん。そういうことで」

神酒さんに、何故忘れるのかということを見せてあげたかった。

彼女の大切な思い出を蘇らせる為に、俺は少しでも早く彼女に会いたい。

「愛に走る若人。青春だね、秋山君」

「青春だね、部長」

二人のからかいを背に、俺は職員室で早退願を出した。



神酒と表札に書かれた一軒家に到着する。

早退したのは良いが、彼女の家を知らなかった俺は、馬鹿みたいにメールで部長に家の場所を教えてもらった。これで明日すぐくからかわれることが決定してしまったが、しようがない。背に腹はかえられないのだ。

ミンミン、と蝉が鳴いている。俺も、早くこの呼び鈴を鳴かせないといけない。

でも、ためらい続けてもう五分ほどになる。外に出っぱなしだから、汗も大量に滴り落ちていく。途中で買ったケーキの保冷剤も無くなってしまいかもしれない。でも、恥ずかしくて押せない。いざここまで来たが、正直帰ろうかとも考えてしまっている自分が居る。異性の家を訪ねるのは初めてだ。緊張で吐きそうになる。いや、彼女の家で嘔吐するなんて論外だけど。

さあ、僧正 優治。気合を入れる。その出っ張っている黒いのを、ほんの少し押し込むだけで良いんだ。難しいことではない。ただそれだけ。さあ。

そして震える人差し指は、しつかりと呼び鈴を押した。

ピンポン、と住人を呼ぶ音がした。

蝉になった気分だ。俺の声は、きちんと機能したのだろうか？

しばらくして、どなた様でしょうか？ と機械を通した独特のくぐもった声が聞こえてきた。

「神酒さんと同じ部活仲間の、そ、僧正です。お見舞いに来ました！」

一瞬声が裏返った。恥ずかしい。

少々お待ちください、と声がして、待つこと大体三分。

家のドアが、がちや、と音を立てた。俺の心臓も音を立てたのではないかと思うくらい、大きく鳴った。

「同じ部活の子ね？ どうぞ、あがって、あがって」

そう促すのは、神酒さんではなく。歳を取った彼女。神酒さんの母親だった。そうか。神酒さんの家を訪ねて彼女が対応してくれるなんて道理は無いよな。

綺麗な黒髪は神酒さんと違い、短く切られているけど慎ましい印象を与えている。同年代の親にしては若々しく見えるのは髪形のせいなのか、実際に若いのか。

彼女が大人になったらこんな風になるのかと、少し緊張してしまう。ただでさえ好きな人の親なのだ。悪い印象を持たれたくない。

お邪魔します。とやっぱ裏返った声で玄関に入った。

最初に感じたのは匂いだ。彼女の匂いだとかぎ分けることはできないけれど、それでも自分の家には感じない良い匂いがした。

外から見れば白かった家の中は、ほぼ木製で茶色い。証明もオレンジっぽい色だから、何だ

かお洒落なペンションのような感じだ。

「二階の突き当たりね」

まるで知聡と部長のように、にやにやしながら俺に案内をしてくれる神酒さんの母親。神酒さんのイメージとはまるで離れていたが、きちんと生きているような実感がある。娘とは違う方向性の綺麗さだ。

神酒さんの母親に会釈して僂さの正体が分かった。きっと目元の黒子のせいだ。あの泣き黒子のせいでこの人に愁いを感じてしまうのだ。と自分なりに、彼女の印象に決着をつけた。

これ、お見舞いに。とケーキの箱を差し出す。一つ二百円程度だったが、急な思いつきだったのであまり数が買えず、四つしか入っていない。

「あら、そんな気を使わなくてもいいのに。なら後で持っていくわね」

と彼女の母親は箱を受け取ると、微笑んでくれた。

ありがとうございます。と俺は少し軋む階段をなるべく音を立てないように、静かに上がっていく。なんだか音をさせるのは失礼な気がしたから。

何だか蟬になった錯覚を覚えながら奥に進んで、幸美というルームプレートを見つける。

さっきの呼び鈴を押すのも緊張したけど、部屋をノックするのも緊張する。

この奥には彼女が居て。しかも彼女の部屋があるのだ。

でも、ここにずっと居るのもいただけない。様子を見に来た彼女の母親に、部屋の前で立ち往生しているのを見られるのは、絶対に馬鹿らしい。

軽くノックをする。

「どうぞ」

木製のドア越しに聞こえる彼女の声に、少しだけ安心した。

良かった。生きている。なんて下らないことを考えて、ドアを引く。

最初に感じたのは、彼女の匂い。次に感じたのは少し薄暗いということ。最後に感じたのは、質素な部屋だということだった。

本棚に勉強机。化粧台に筆筒。小さな丸テーブルにベッド。それだけの部屋だ。

ベッドには神酒さんが青いパジャマで体を起こしていた。普段はあまり意識することの無い彼女の胸の膨らみに、少しだけ鼓動が早くなる。

「どうぞ、入ってください」

その言葉で入り口に立ち往生していたことに気づいた。でも、どこに居ればいいか分からない。とりあえず、お邪魔します、と少しだけ歩を進めてドアを閉める。

ダメだ。さっきから緊張しっぱなしで、何をしているのか混乱している。

部屋に満たされた彼女の匂いに、その彼女が生活している部屋に、彼女の寝間着姿に、鼓動が痛いくらいに鳴っている。

「えっと、適当に座ってください」

その言葉に頷き、とりあえず丸テーブルの前に腰を掛けた。

大丈夫ですか？ とりあえず彼女の容態を聞いた。話しはそれからでも良いし、もしも悪い

ようだったら帰らないといけない。

でも、彼女は微笑を浮かべた。とりあえず帰る心配はしなくて良いみたいだ。

「体の方は平気なんです。実は今日ずる休みですのよ」

彼女は恥ずかしそうにした。悪戯がばれた子供のようだ。

真面目なイメージがある彼女がそのようなことをするのは、珍しい気がする。むしろ、新たな一面というか、知らなかっただけというか。これはこれで可愛いような。というか、お見舞いの必要なんて無かったんじゃないかと思いついて、これからどうしようかと、どうでも良いようなことばかりさつきから考えてしまっている。

「気乗りしなかったとか？」

自分の声が少しだけ大きくなったのを感じた。緊張が解けたのだろう。

「気乗り。そうですね。気乗りがしませんでした」

苦笑する彼女。やっぱり下の階で会った母親とはベクトルの違う綺麗さだ。顔の作りは一緒なのに、性格がまるで違う。歳の離れた姉妹だと言われたら納得してしまうかもしれない。彼女は陰気が強く、母親は陽気が強いのだろう。まるで大極図のような関係だ。

「そんな理由で良かったです。知聡に、俺の遅刻癖がうつったんじゃないかと言われたんで」

「あはは。そうかもしれませんね。ずっと一緒に居ましたし」

からかわれた。でも、知聡や部長にからかわれるより、ずっと嬉しい。

彼女に合わせて俺も苦笑した。

その時、ノックの音が聞こえた。入ってきたのは彼女の母親。手には木製のトレイ。

「楽しそうねえ。はいこれ。僧正君からのお見舞い」

ベッドは遠いので、俺が立ち上がり受け取る。トレイには香りの良い紅茶と二つのケーキ。

「今日は良いけど。あんまり学校をサボっちゃダメだからね、二人とも」

釘を刺された。俺は一応、すいません、と返した。

「いいわよ。幸美を心配して来てくれたんだろうし。それにケーキも貰っちゃったし。口止め料にしておきます」

そう言つて、神酒さんの母親は出て行った。何だか楽しそうに見えたのは気のせいじゃないだろう。

階段を下りる音が聞こえてから、俺達はやっと動き方を思い出したかのようになる。空気が弛緩したような感覚を覚えた。

とりあえず丸テーブルの上にトレイを置く。

「そうですね。そういえばまだ授業中ですよね」

彼女は机の上に掛かっている時計を見て呟く。

心配で来てしまいました。と俺は返した。

「僧正さんに心配されて、ケーキも貰つて。ずる休みなのに、優遇されちゃっていますね、私」
彼女の視線の先にはケーキ。口は笑っているけど、視線は外れない。そんなに食べたいのだろうか？

紅茶が冷めないうちに食べますか。と、もしかしたら彼女から言い出さないのでと危惧して、一応提案してみる。彼女はそれに顔を一層強く微笑んで、いただきますよう、と結んだ。どっちが良いです？ トレイを指差して尋ねる。

苺のショートケーキと、チョコレートケーキが載っている。それでは、苺の方で、と返されて、俺はチョコレートケーキと紅茶をテーブルに置き、残りをトレイごと彼女に渡した。

ずる休みとはいえ、一応病人扱いしておこうと思っただのかもしれない。意を汲んでくれたのか、彼女もそれを自然に受け取ると、いただきますね、と掛け布団の上にトレイを置いた。

しばらくは他愛も無いことを。それぞれの担任のこと。文化祭のこと。その前にある体育祭のことを話しながらケーキを食べる。こんなに彼女と自然に喋ったのは初めてかもしれない。

この間から急に話すようにはなっただけ、それは夢という共通の話題があったからだ。こんな取りとめも無いような話をできるような仲に、一年以上掛けてようやくなれたのだと実感した。

そもそも、入学して初めて美術部で会ったときから、俺は彼女に引っかけかかりを覚えていた。それが初恋なのではないかと気づいたのは本場に最近。

高校二年にもなって、初めて俺は人を好きになった。そして、どんな因果か俺達は同じ夢を見た。それをきっかけに今、こんな風に話せている。

この夢は確かに不気味だった。けれど俺達の仲を取り持ってくれた。ならば、解決したときどうなるのだろう。

この夢を定義してしまったとき。ただの記憶になってしまったとき。俺はまた自然に彼女と話せるのだろうか？

もし、元の関係に戻るのならば。同じ部活仲間という仲に戻るのならば。

俺はこの夢をもうこれ以上暴きたくない。でもそれでは彼女に愛想を付かされてしまうだろう。

彼女はこの夢を暴きたいと思っっているから。変なジレンマに陥る。

別に夢が解決に向かおうと、彼女との関係は今までと同じになるはず無いのに。このような経験を経ているのだからと自分に言い聞かせても、俺はそれを躊躇ためらってしまふ。

彼女の顔を見たからだ。だからこのように決心が鈍ってしまったているのだ。

俺は知聡から教わった、忘却の仕組みを話すという名目で、彼女に会いに来た。でも、実際にはそれを躊躇ためらっている。

それはこの現状を維持したいという俺の願望によって。聡明な彼女のことだ。情報があればあるだけ、きつと前に進んでしまふ。

「今日」

彼女の一言は、鬱着うつそぎとした自分を伐採してくれた。

何を馬鹿なことを考えていたのだ。

俺は彼女の願いを叶える為にここまで来たのだろう？

迷う必要なんて無いんだ。

もし彼女が前に進んでいけば、俺もそれを追いかけるだけ。

「どうしました？」

そして、彼女は意を決したかのように呟いた。

実は今日、とても夢見が悪かったのです

それは、いつの日かの再現だった。

彼女はまた夢を見た。

ならば終わりではない。まだまだ終わらない。夢には、関係には、続きがある。

空調の効いていない、けれど暑くない不思議な温度の部屋で、俺は一筋の汗を掻いた。

「どういう夢を見たのです？」

少しだけ興奮している。声の上擦っている。

「そうですね。お話ししないとけませんね」

彼女はトレイにフォークを置いた。

骨になった私は、どうしても蘇りたかった。

周りに居る骨を粉砕してでも、私はその権利を得たかった。

私は外に未練があったのだ。

穴の外に居る犬はそんな私をどう思っているのか、定期的に供物を穴に落とす。

もしかしたら私を蘇生させるように、命令されているかもしれないと思った。

けれども私は何度肉を受け取っても蘇ることができず、ずっと穴の中に居るしかない。

とても居心地が悪かったのを覚えている。

ですので、今日はとても乗り気ではなかったのです。と彼女は結んだ。

確かに俺だったら学校に行けないかもしれない。いや、現に前はサボっているのだから、今回も同様だろう。

夢の内容は、前回からの続きのように思えた。

こんなときに知聡が居れば何かしらの仮説を立てるのだろうけど、俺にはそんな器用なことできないし、知識のバックボーンも無い。俺にできるのは、彼女と一緒にこの夢について考えるだけだ。

そのためにはまず。忘却の定義を話さない。

彼女が知りたがっていたこの話をすれば、聡明な彼女はきっと何らかのアクションをしてくれるだろう。

俺はゆっくりと、詰まりながら、言葉を選び、彼女に知聡の忘却の定義を話した。それを聞いた彼女は、頷き、眉を顰め、凍りついた。

全てを話し終わって、神酒さんの表情は険しかった。何か考え事をしているのかもしれない。沈黙と時計の秒針が部屋に響く。

「すみません」

神酒さんは謝ったのか、断ったのか分からないけど、そう言った。

どうしました？ と返す。どうしたのだろうか？ 質問には少し答えられる自信が無い。俺が知っている以上の要求をされそうだと、身構えた。

「考え事をして、少し汗を掻いてしまったので、一人にしてもらってもいいですか？」

どういうことだろう？ そりゃあ構わないけど。

「えっと、着替えとか、したいので」

最低だ。ここまで俺にデリカシーが無いとは思わなかった。

急いで立ち上がって部屋を出る。っと、ついでに。彼女のベッドに置いてある、いつの間にか空になったトレイと、俺の食器類をトレイに乗せて部屋を出た。

俺もさっきの汗を掻いてしまった。

部屋の前で待っているのは馬鹿らしいし、それこそ変質者のようなので、トレイを持って階段を下りる。階段のすぐ隣には硝子が沢山はめ込まれたドア。降りてきた俺と、その部屋に居る神酒さんの母親と目が合うのは必然だった。驚いたような顔で彼女はドアを開ける。

「わざわざ持ってきてくれたの？」

「あ、はい」

「気が利いているというか、なんとというか」

神酒さんの母親は笑いながらトレイを受け取った。

この部屋の奥はキッチンようだ。彼女はトレイを流しに持っていく。

その光景を、ぼう、と見ていたからだろう。彼女は、追い出されちゃった？ と笑いながら食器を洗い始めた。

「っと、着替えるそうですので」

「あはは、あの子、君を意識しているのかもね」

もしそうだったら嬉しい。けれど、真実は違うので俺は苦笑を浮かべるだけだった。

「僧正君だっけ？ 下はなんて言うの？」

何気なく会話が始まってしまった。正直、何を話して良いかなんて分からない。

「優治です。優しいに、さんずいの治すで、優治です」

「ああ、やっぱりなんか聞き覚えある気がするなあ。あの子から聞いたのかな？」

神酒さんが俺のことを家族に話しているのか？ それだったら恥ずかしいけど、嬉しい。

「同じ部活なんだって？ じゃあ絵は上手いんだ？」

「いえ、実はあんまり。誘われて、入部したので」

「あはは。なるほどね」

そこで一瞬会話が途切れた。自分のキャッチボールの下手さに嫌悪を抱く。相手も食器を洗い終えたようだ。そりゃあ、フオークと皿しかない。当たり前か。

「えっと。私はね、美しいに、自由の由、えーっと、いとへんに己と書いて紀。それで美由紀ね。美由紀さんとも呼んで頂戴」

自己紹介されてしまった。なんとなく、よろしくお願いします、なんて意味不明な返し方をした。もちろん笑われた。恥ずかしい。でも悪い印象は持たれていないようで安心した。

「あの子、まだ着替えてるのかしら」

でもそれを確認するのは恥ずかしい。異性だから尚更だ。一応、どうでしょう？ と返した。

「ちよっと様子見てくるわね」

美由紀さんが俺を横切る。少しだけ良い匂いがした。

部屋を出た彼女と一緒に俺も部屋を出る。一応階段の下で待つことにした。

上で、入るわよ、とノックの音がした。返事があつたかまでは聞こえない。

空白の時間。

神酒さんの部屋では何が行われているのだろうか？ 彼女はまだ着替えていないかもしれない

し、少しの雑談に興じているのかもしれない。もしかしたら俺の悪口を言われているかもしれない。もしそうだったら少し居辛い。

自分を無意味に追い込むのは止めよう。知聡からも止められている悪い癖だ。

どちらにせよ、まだ神酒さんとは話さないといけない。彼女が見た骨になる夢の続きを。

私は酷く、この夢に惹かれるのです。

アイスを買に行つたあの日。彼女はまるで恋に焦がれるかのように、俺に白状した。

俺にはあの夢は、ただ不気味なだけでしかなかったのに。

同じような夢でも、彼女にはそれが魅力的に映つた。

夢の内容はほぼ同じだったのに、この感じ方の違いは受け取り側の。主観の違いによる誤差だ。今の俺は、この夢に対して特別な感情を抱かなくなっている。それは夢の定義を知ったからで、夢に出てきた物の原型を見たからだ。

言うならば手品の種を知ってしまうのと同じ。知る前はあんなに不思議だと熱中していたのに、そのネタが割れば途端に見向きもされなくなってしまうような感覚。

同じような感覚を、俺は自分の。神酒さんの夢に感じてしまっている。

だが、神酒さんはそれでも尚、その夢に焦がれている。

この違いはなんだ？ 何故そこまで熱中できるのだ？

そして、その答えが彼女の夢の続きだ。

俺の中では終わってしまったが、彼女の夢はまだ続いている。

それが、俺達の夢に対する温度差だ。

でも。興味が無くなってしまうわけではない。

俺もできればこの夢の行く先を見てみたい。終わってしまったと思つていた夢の続きを、できることなら見て見たい。

まあ、彼女は純粋な気持ちでそれを解き明かしたいのに対して、俺は彼女と一緒に居る動機なのだけれども、それでもこの夢の続きを見てみたいのだ。

コン、という階段の踏む音で思案から目覚める。

頂上には神酒さんが居た。

確かに着替えている。

目が覚めるような白いワンピース。

まるでこれからどこかに出かけるような格好だ。

お互い無言。咄嗟のことで何を話せばいいか分からないし。彼女が階段を下る音だけが響く。

とうとう、同じ足場になってしまう。何か気の利いたことを言わないといけない気がした。

似合ってますね。辺りだろうか。

「お母さんが」

俺がお世辞を使う前に、彼女は呟いた。

「上に居るので、よろしくお願いします」

意味が分からないことを言って、彼女は俺を素通りしていく。その先は玄関だ。じゃあ、神酒さんはどうするのだろうか？ 自分の母親の何を頼むというのだ？ どこに行こうとしている？ 母親が倒れてしまったのなら救急車の方が早いというのに。いや、彼女のことだ、そんなことはない。

意味が分からないけど。直感的に、彼女を止めないといけないような気がした。

きつと、幽霊のようだったからだ。

止めないと成仏するかのようには、簡単に消えてしまう。

「神酒さん！」

玄関のドアに手を掛けている彼女は、振り返る。

「ゆーじ君。できる事なら二度と貴方に会いたくなかったです」

幽霊は笑う。

綺麗な顔だけを印象付けて、彼女は玄関から出て行った。

二度と会いたくなかった。どういう意味だ。俺は彼女に嫌われたのか？ 美由紀さんが何か言ったのか？ いや、違う。どういう。いや、違う。ゆーじ君。どこかで聞いた呼ばれ方でも、彼女じゃなかったはず。いや、今はそんなことじゃなくて。俺は二度と彼女に会いたくなかったと言われて。ああ、どうすれば良い。知聡だったら。いや、今は頼れない。できることなら、いや。もう出会ってしまったている。白のワンピースを着て。どこに向かっているのだ。いや、それより彼女は俺に美由紀さんを頼むと。意味が分からない。何故俺なのだ。では貴女はどこに行く。俺はどうすればいいのだ。いや、だから美由紀さんを託されたじゃないか。上に。彼女の部屋に行くのは着替え終わったかを確認するため。そうじゃない。いや、そうだ。そして、彼女達は何かを話したのだろう。そして、神酒さんは出て行った。自然に。それが当

然の流れのように。そして、俺は置いていかれたのだ。まずは、彼女の真意を。そう。まずは上へ行かないと。彼女の言葉を見極める為に。

ようやく、混乱していた自分に見切りをつけて、俺は自分の頬を両手で叩き、自分を焚きつけた。

階段を早足で上がる。彼女の部屋を開ける。二度目は緊張しなかった。

目の前には、丸テーブルの前で座り込んで頭を抱えている美由紀さんの姿。

「どうしたんですか！」

思わず声が出た。俺にしては大きな声を、久々に自分の鼓膜で聞いた。

俺の声に怯える美由紀さん。逆効果だったようだ。

「何があっただんですか？」

屈んで、なるべく小さな声で彼女に問う。

「幸美を」

神酒さんがどうしたというのだ？ いや、彼女が何かしたのか？ 何を？

「あの子を追いかけて」

追いかけて。か。何故だ。いや、何があっただの？

「早く！」

思いがけない、音の高い彼女の言葉に、俺は逃げるように立ち上がり、神酒さんの部屋から出る。

あの明るい美由紀さんに何があっただのか。それはとても気になる。でも、今は神酒さんを彼女の言葉通り追うことにしよう。

俺だって、彼女のことを気になるのだ。

何故あのような言葉を残した。

彼女は何を美由紀さんにした。

そして、彼女はどこに向かっているのだ？

全てが分からないまま、俺は神酒さんの足取りを追う。

Y市だ。

脳が。記憶が確信を持って、俺に告げる。

全ての発端になったそこに向かえと。

どこに行ったか分からない以上、俺は自分の直感を信じて、そこに向かう。

靴を履いて、玄関を飛び出した。



六時間目の途中。古文の解説を聞いているときに、私の携帯が振動した。ああ、こんな時間に連絡してくる奴は誰だろう。まったく、マナーモードで良かった。授業中に着信音がなるの

だけは最悪だ。

先生にばれないように携帯電話をこっそり開ける。こういう時に二つ折りの携帯は嫌だなあ、と恐る恐る携帯を開いた。小さく、かち、という携帯の開く音に心音を早めながらも、メールの中身を確認する。

——ああ、私はこの四日間ですべて役者業をこなさないといけないのだ。演劇部に転部しようかな？

とりあえず一回だけ深呼吸。さあ、頑張らないと。私は女優だ。暗示の力を借りよう。

「先生」

しん、としていた教室に私の声が響く。うう、恥ずかしい。

「どうした古賀」

古文の黒崎先生は眼鏡、私の名前を呼んだ。負けないぞ。

「体調悪いので、保健室に行ってきます。なんだか吐きそうです」

自分の症状と目的を手短かに断言し、尚且つ気持ち悪そうに。一瞬クラスがざわついた。

黒崎先生は、そろそろ授業は終わるぞ。と我慢できないのか的かなオーラを出す、そういうわけにはいかない。こっちはこっちで切羽詰っているのだから。

私の真剣な顔を見てか、それともこれ以上授業を妨害されるのは癪だったのか、先生は、行つてきなさい、と私を後押しした。自分の演技力に驚きつつも、軽く会釈をして教室を出る。

「先生、俺も体調悪いっす！」

「嘘吐け！ 確かに古賀は大根だったが、お前は明らかにサボりたいだけだろうが！」

私が出た直後に黒崎先生とクラスのお調子者の声。そして笑いが響いた。

うう、見逃してくれた先生に感謝をするべきなんだろうけど、大根って。

悲しくなりながら教室を出て、二年生の玄関に向かう。

そこにはメールの差し出し人、秋山君が居た。

「どうしたんだい、部長そんな不機嫌な顔をして」

古く、少し錆びている自分の下駄箱を開けて靴を履く。

彼は既に靴を履き、帰宅する準備は万端のようだ。

「何でもありませんよーだ。でも、あのメールなんなの？」

デートのお誘いにしては、何だか話が急だ。もちろんそんな関係じゃないけど。

メールの内容は簡潔だった。

『部長。大至急、二年玄関まで来てくれ。学校はサボることになるが、後悔するよりマシだ。今から十分以内に来られたし。来ないと呼びに行く』

秋山君に携帯を開いて着信したメールを見せる。

「歩きながら説明する。とりあえず校門にタクシーを呼んであるから、校門まで行くよ」

うーん、毎回思うけど、なんでこの人はこんなに手際が良いんだろう？ 校門にタクシーを

呼ぶ高校生なんて、普通は居ないと思うんだけど。それに、何でタクシーなんだろう？ 高いのに。バスの方がよっぽど安上がりだ。

二人で校門まで歩く。タクシーはまだ着ていなかった。

「さすがに三分じゃ来ないか」

彼は落ち着かないのか携帯の発信履歴から、業者に電話した時間を割り出していた。いつも見る彼とは違い、その表情に余裕は無い。

一体何があつたのだろうか？

「ねえ、秋山君。どこに行くの？」

ああ、そうだったね。と説明することさえ忘れていたようだ。本当に珍しい。

「これから神酒さんの家に行くんだ。僕は神酒さんの家を知らないし、知っていたところで入り辛いからね。申し訳ないけど部長に着て——、ああ、来た来た」

彼の向く方向からタクシーが来た。ユキの家に行く？ 何をしに？ ユキは今僧正君と一緒に来た。それを邪魔しに行くのだろうか。タクシーまで呼んで？ 違う。何か起きたんだ。

勝手に切羽詰った状況に飲まれた私は、彼と一緒に得体の知れない不安に駆られる。

ユキの家を知らない彼の代わりに、私がタクシーをナビする。

信号待ちの際に、今からデートかい、と冷やかされたけど、秋山君の睨みで運転手さんは黙ってしまった。少し悪いことをしてしまったと思っただけ。まあ、悪いのは彼だ。私じゃない。

メーターが三回ほど回った所で、彼女の家に到着する。

お金は秋山君が、お釣りは要らない、と払ってくれた。まあ、二、三十円ほどで時間を取られるのも馬鹿らしいと思っただらうけど、少し格好良い。

車から出ると、茹だるような暑さに包まれる。我慢しながら、既に神酒家の呼び鈴を押している秋山君の後ろにつく。タクシーはその間にどこかに行ってしまった。

一向に応答が無いのに不安を覚えた。

「やっぱり、優治の言っていた通りだ」

秋山君はそういうと、鉄製の白い門を開けて、勝手に入っていく。

「ちよつと、秋山君！」

私の制止を聞いていないのか、彼は家のドアに手を掛けていた。

ガチャ、という音で血の気が引いた。なんで鍵が開いているんだらう？ これってどういうこと？ もしかして、押し込み強盗にでも？ それだったら何で僧正君は私達を呼んだの？ 警察じゃなくて？

混乱している私を無視して、ドアの向こうに消えようとしている彼を追いかける。閉まりかけているドアに手を入れて、私はもう一度秋山君の姿を確認する。

「ちよつと、何が起きているのよ」

「優治にこの場を頼まれたんだ。部長、神酒さんの部屋はどっちだ？」

彼はそう言うのと、靴を脱いで、おじやまします、と言った。

私は展開の速さについていけず、とりあえず質問を返すように二階を指差す。

「二階か。部長、早く。君が居ないと僕は不法侵入と間違えられる」

既にアウトな気もするけど、それは野暮だ。ああもう、何で君はそんなに早いのかな。そんなこと言いながら既に階段上がってるし！

慌てて靴を脱いで彼を追いかける。階段を早足で上って、秋山君がユキの部屋をノックしているのに合わせて、私も追いついた。

入室許可はいつまでも下りることなく、彼は躊躇せずにドアを開ける。

部屋の奥には、ユキのお母さん、美由紀さんが蹲って泣いていた。

「どうしたんですか？ 美由紀さん！」

私は駆け寄り、蹲っている彼女の背中に手を掛けた。嗚咽が少し小さくなる。

「貴衣ちゃん？」

名前を呼ばれて、はい、と返事をする。

「どうしよう、私、あの子に！」

ヒステリックな叫びに驚く。あの子とはユキのことだろう。ユキに何があった？

「初めまして、僕は神酒さんと同じ部員の、秋山知聡と言います」

でも、彼は問答無用に話を進める。

せめて彼女が泣き止むまで待つてあげればいいのに、彼はそんな気遣いをしないようだ。普段はこんな風じゃないのに、今日の彼は少し可笑しい気がする。

何が、彼を駆り立てているのだろう。

秋山君の言葉に、少しずつ嗚咽が少なくなっていく。立て直しつつあるみたいだ。

「分かっていると思いますが、時間がありません。僕は僧正 優治を追わないと、強いては、貴女の娘、神酒 幸美さんを追わないといけない。失礼ですが何があつたのですか？ 貴女次第で、状況は変わります」

丁寧。でも、確実に秋山君は美由紀さんを追い込んでいく。意思疎通が可能になる段階まで彼女を追いやっているのだろう。丁寧に名前を言うことで、放棄した意思を取り戻させているのだ。

確かにこうすれば彼女が自然に落ち着くのを待つより早く、彼女は復旧するだろう。

変なところで彼の話術の上手さに感心しつつ、美由紀さんの背中を優しく叩き続けた。

「——あの子は、思い出してしまった」

美由紀さんは語り始めた。



電車を降りて、バスに乗り、やっとS町にたどり着いた。

どれだけ神酒さんとの距離が空いてしまったのだろうと、気が気じゃない。

最悪なのは彼女の目的地がここじゃないこと。すれ違うには壮絶すぎるところまで着てしま

った。

大丈夫。彼女は絶対にここに居る。自分に言い聞かせながらタクシーを拾って、廃寺に続く山道まで向かう。

限界まで車を山道に入れてもらって、タクシーを降りる。この先は何も無いのに、と訝しげな目を向けられたが無視して進む。たしかに若者が息を切らせながら来る場所ではない。

山道からは夕日が綺麗に拝めた。蝉もまだ五月蠅い。急がないと。夜になったら彼女が消えてしまうような気がした。

十五分ほど葛藤しながら走り、やっと敷地にたどり着く。夕日を反射させる墓に眩みながら、俺は黒い寺を目指す。

目を背負い、本物の墓のようになってしまった寺。影と同化しているような暗さは、俺の心にも多少の影を落とす。もしかしたら、という疑念は尽きることなく、俺の歩調を弱め続ける。それを振り払ってばかりの片道だった。

寺を見上げていたら、岩を擦るような音。

どこかで聞いたことあるその音は、たしか。

——無縁仏塚だ。

誰かがあの扉を開けている！

走った。墓を掻き分けるように進み、俺は無縁仏塚にたどり着く。

巨大な塔のようなオブジェは寺と同じように夕日を背負い、暗い。まるでこの寺全体が光を食らっているかのようだ。

そして、陰になった塔の下に。

影を背負うようにして。

黒い髪を柳のように靡かせながら。

神酒 幸美という幽霊が屈んでいた。

彼女は生きている。

その証拠に、幽霊では在りえない証拠に。

彼女の右手には、黒い包丁が握られていた。

幽霊では物は掴めまい。

「神酒さん！」

お構い無しに叫ぶ。

神酒さんは立ち上がる。彼女が振り返ると、その白いワンピースが花卉のように開いた。

「——僧正さん」

「こんな所で何やってるんですか！」

既に無縁仏塚の扉は。地獄への扉は開いている。

朝は生者の時間なら、これからの時間は死者のもの。

墓場とはそれだけで恐ろしいのに、夜になったら在らぬことを想像してしまう。

扉の奥には、三十を優に超える骸が収まっている。

こんな時間に扉を開けていようものなら、骸は肉を求めて這い出てくるかもしれない。蘇りたいと。空空歌からからいながら。

「分からないのですか？」

彼女は、影を背負いながら笑う。口元だけ赤く映える。

いや、口だけじゃなく、他にも赤が――。

気づけば。包丁を持つ反対の手から。

ぽた。ぽた。と黒い雫が落ちていく。

嗚呼、なんとということだ。

違う。さつきから黒いと思っていたのは、赤だ。

彼女の立っている場所が影になっているから気づくのが遅れただけ。

アレは赤だ。

包丁に付いているのも、左の中指と薬指から滴っているのも、彼女の足元が黒いのも。

全て、彼女の血液だ。

夕日なんて可愛いぐらいに、真つ赤な血。

彼女は自分の手首を切っていた。

馬鹿なことを。

俺は間に合わなかったのか。

「分かりました」

貴女が死にたい事くらい。

ずるい。

俺は貴女のこと好きなのに。

何で俺の前から居なくなるような事をするのですか？

俺のことがそんなに嫌いなのですか？

だったら俺は君の前から消えるから、どうかそんな事をしないでくれ。

君を好きな俺は、君に傷ついてほしくないんだ。

「何故、そんなことを？」

馬鹿みたいに冷静だった。

知聡の話を聞いているときのほうが、まだ興奮している。

脳が死んでしまっているのかもしれない。

だからこんなに冷静なんだ。

ぽた。ぽた。彼女から赤い雫が落ちる。

泣いてしまえそうだ。

怖いし、悲しいし、辛いし、どうして良いか分からない。

好きな人が傷つく事が、こんなにも悲しいことだとは思わなかった。

「懺悔、ですかね」

彼女は苦笑した。

何が可笑しいんだろうか？ 俺はちつとも楽しくなんか無いのに。

「どういう意味ですか？」

一向に縮まらない距離。

三メートルほどなのに、永遠に届かない距離な気がした。

「ゆーじ君はずるいよ」

また、その名で呼んだ。

何故貴女はその呼び方をする。

「何がずるいんですか？」

さつきから会話になっていない。

もう、意思疎通ができなくなってしまうのではないかと、俺は悲しくなった。

「——全部一人で忘れちゃって」

ざあ、と風が吹いた。

黒い血液が風に流されて、少し遠くに落ちる。

神酒さんの黒い髪が、柳のように揺れた。

まるでいつか見た、少女のようだ。確かあの子も俺の事を。

ゆーじ君、と。

それで、ようやく俺は思い出した。

俺と彼女が幼少時に出会っていたことに。

そうだった。俺は彼女と一緒に遊んでいたのだ。

土曜日にこの場所で見えた少女は、幼いときの彼女だ。

そして俺たちはここで遊んだ。骨釣りという不気味な遊びを。

俺の夢はやはり、ここがモデルだったのだ。

でも、だからどうした。

それを思い出したところでこの状況が好転するか？

否。ちつとも望めない。

「神酒さんも、思い出したのですね」

睨まれる。

幽霊に感情をむき出しに睨まれた。

「違う。ゆーじ君は思い出して無い！」

「いや、思い出したんだ！ 俺と神酒さんは、この場所で——」

「うるさい！ どこが思い出したの！ そんなの違う！ 勝手に忘れないでよ！」

激昂。彼女が始めて見せた。人間らしい部分。

彼女はこんなにも大きく叫ぶことができた人間だったのか。

それに、さつきから何を言っている。何が違うというのだ。何を忘れたというのだ。

俺にまだ、忘れていた部分があるというのか？

「私は償わないといけない！ 邪魔をしないで！」

包丁で空を横一文字に薙ぐ。

冷たい何かが、俺の頬に付着する。

指で掬い取って、それが彼女の血だということが分かった。

俺の人差し指が真っ赤に染まった。

そうだ。手当てをしないといけない。

馬鹿みたいに失念していたけど、このままではきっと危ない。

「神酒さん。まず、その傷口を塞ぎましょう。何を忘れたかは後で聞きますから」

「うるさい！」

話にならない。

彼女は完全に俺のことを拒否している。

何故だろうか。理由はどうでもいい。拒否されていても構わない。

だけど早くその傷口を塞がないと。焦って苛立つ。

「本当に死ぬかもしれないんだぞ！」

「死にたいって言ってるでしょ！」

ようやく合点尽いた。自分の馬鹿さをこれほどまでに呪った日は無い。

その言葉は、自分を生贄に捧げるという意味なのか。

無縁仏塚に、己を入れようというのか。

骨は肉を求め、蘇生を望んでいる。

ならば彼女は。

自分を犠牲にしてまで、何を生き返らせたのだ？

「何故だ？」

「五月蠅い」

一方通行の会話。

このキャッチボールは壁当てだ。

「何故死にたいんだ！」

「五月蠅い！」

彼女に合わせて俺の声も大きくなっていく。

空は暗くなっていく。

悲しさも、膨れ上がっていく。

「俺は貴女に死んでほしくなんか無いんだ！」

「五月蠅いって言ってるでしょ！」

静かに。

「五月蠅いなあ、君が黙りたまえ」

秋山 知聡の声が、墓に響いた。

彼女の白いワンピースは闇に馴染んでいるというのに、知聡の夏服はちっとも闇を寄せ付けていない。位置関係のせいだろうか。

ともかくやっと、追いついてくれた。

「秋山さん。貴方も邪魔するんですか!？」

神酒さんは吼えた。目に入るものを全て威嚇する。まるで犬のようだ。

「私は罪を償わないといけない!」

吼える。

「忘れていた、居ないものとして育った!」

何を言っているのだろう。

彼女は自分に言い聞かせるように。周囲を威圧するかのように吼える。

まるで知聡を、敵だと認識しているかのようだ。

「この記憶はなんですか!？」

「落ち着け、会話をしろ」

知聡はそう促すが、彼女はそれを受け付けない。

「私が殺してしまった! 姉を! 私が!」

どういうことだ? 姉とは彼女の姉か? そんなのどこにも出てきていなかったじゃないか。

知聡の方を振り向くが、彼は大して驚いていない。知っているのだろうか。

「私は罪を、過去を改竄して生きてしまった! 私も死ななくちゃいけない!」

彼女は包丁を、既に切られている左手首に添える。

駄目だと言う前に、知聡は走っていた。

「来るな!」

叫ぶ彼女。

問答無用で、知聡は神酒さんの包丁を持つ右手を払った。

思わず包丁を落としてしまう神酒さん。

空と包丁が地面に落ちる。

知聡はそのまま手際よく彼女の手を後ろに回させ、警察のように関節を決める。

「何故邪魔をする!? 何故死なせてくれない!？」

悲痛な叫びが、辺り一面に響く。

それに知聡は溜め息を吐いた。

「嗚呼、五月蠅い。ヒステリックになるな。僕は女が鳴く声が一番嫌いだね。耳障りだ。少し

黙りたまえ」

知聡が彼女の腕を捻っているのか。神酒さんは顔に苦痛を浮かべる。

「優治。脱げ」

意味が分からなかった。

何でこんなお墓で脱がないといけないのだ。やぶ蚊が多そうなのに。

「彼女の止血をしないとイケないだろう。僕は彼女を拘束して動けない。早くそのTシャツで

縛って止血しろ」

ようやく合点がたって、俺は脱ぎながら彼女の元に行き、学生服の下に着ているTシャツを使い、彼女の右手をきつく縛った。

少し彼女が痛がったが、血を止めないと意味が無いと割り切る。

脱いだ学生服を直接着ながら、俺はさつき彼女から出た、姉、という単語について考えていた。俺にはどうしても、その単語にだけは覚えが無かったのだ。

交代を申し出る知聡に、俺は頷いて彼女を拘束する。

正直心が痛んだ。けれど、これ以上馬鹿な真似はさせられない。

足元で、びしゃ、と彼女の血液を踏む音がした。

「ふう、やっと自由になった。僕はアクションが苦手だね」

嘘言えと、心の中で突っ込む。

俺にはできないことを平然とやっつてのけながら、その台詞はないだろう。

「知聡、どういふことなんだ？」

俺の手の中では、死にたい、死にたい、と洩らす神酒さん。今の彼女は正直痛々しい。

彼女の為に、そして俺の為に。お前の力を貸してほしい。

「簡単なことだ。彼女にはね、姉が居たんだよ」

本当に簡単そうに知聡は言う。

その姉という単語に、神酒さんは少し跳ねた。

「神酒さん。君は最後の一押しを、母親の美由紀さんにさせたね？」

どういふことだ？ 最後の一押しをさせた？

「自分には姉が居たのではないかと、母親に鎌を掛けたな？」

一瞬の沈黙の後。それを守るかのように小さく頷く神酒さん。

何が二人の中で流れているのだろうか？

「私には、姉が居たんですよ。僧正さん」

少し落ち着いたのか、神酒さんは呟く。彼女の涙の筋を見て見ぬ振りした。

それに頷く知聡。

「神酒さんよければ、後ろの粗忽者の為に全てを話してくれないか？」

知聡はこんなときまで、俺を愚か者扱いする。

けれど、俺だって真実は知りたい。

彼女が何をしたのか。

俺が何を忘れていたのか。

その全てが埋まらないと、俺は本当に愚かなままだ。

「私と僧正さんは過去に一度出会っているんです。お互いそれを忘れていたようですけど」

俺は頷く。彼女の後ろに居るからそれが見えるかは分からないけど、雰囲気で察したのか、

彼女は続ける。

「そのとき私と貴方と、実はもう一人。姉が居たのです」

そう、なのか？

俺と神酒さん。そして、彼女のお姉さんの三人で俺たちは遊んでいたのか？

確信が持てない。自分の記憶なのに。自分のことなのに確信が持てない。

ついさつきまで、神酒さんの居場所についてあんなに確信的だったのに。

俺はいつもの曖昧な現実、急に引き戻される。

「このお寺で私たち三人は遊んでいた。骨釣りや、色々な遊びを」

アレは三人でやったものだったのか？

それでは、あの日に幻視した柳の少女は、神酒さんのお姉さんだったのか？

神酒さんは姉を殺したのだと言った。

そして、俺が忘れていたことを、ずるい、と罵った。

それは、つまり。

「そして帰り道。私達は野犬に。この村で犬神さんと呼ばれている野犬に遭遇したのです」

周囲に民家などが無いこの山道。猪とかだつて居そうなの寺に続く道で。過去の俺たちは

犬神に出会ったのか？

どうなったんだ。

過去の俺たちはどうなった。

俺と神酒さんはここに居る。

消去法で被害者じゃない。つまり。

つまり被害にあったのは。

そういうことなのか？

「想像通りです。私の姉は、野犬に襲われてしまった」

幼い私達にはどうすることもできなかった、と結んだ。

ああ、そして。

それで。

「私と僧正さんは姉を探しました。でも、見つかったのは、ぼろぼろになった姉の姿」

それを。

「私達は、野犬を追い払い。姉を——」

聞きたくない。

知聡、この人の口を塞いでくれ。もしくは、俺の耳を。

「この、無縁仏塚に捨てたのです」

俺たち二人で。彼女の姉を。この穴の中に。捨てたのか。

彼女を拘束している俺は、横目で後ろの穴を覗む。

その、暗い、暗い、暗黒に。

神酒さんの姉が埋まっているのだろうか。

地面に張っていた彼女の血が、穴に流れていた。

暗渠だ。

その穴は血を吸い込む暗渠。
飲んでいるのだろう。

中に居る骨達が彼女の血を。
中に居る彼女の姉が。

蘇る為に神酒 幸美の血を飲んでいるのだ。

「だから私は姉さんを蘇らせないといけない。勝手に記憶を改竄して忘れてしまった私は。罪を償う為に、この穴に肉を！」

暴れる。俺の手の中で神酒さんが暴れる。

しかし、間接が決まっているのだ。動くことは彼女にとって苦痛でしかないはず。それなのに彼女は、死なせてくれ、と俺の手の中で暴れた。

蘇らせたいのだろう。

彼女は本気で、姉の為に自分自身を生贄に捧げようとしているのだ。

そんなに好きだったのか。

分らない。

未だに彼女の姉を思い出せない俺には分からない。

確かにこの穴に関係した過去を持っていることは思い出した。

けれど、俺は。この穴で幼い頃の神酒さん二人で。そう二人で、骨を釣って遊んだことしか覚えていないのだ。

「はあ。可笑しなことを言うね、君も」

溜め息と共に。知聡の声が響く。まるで挑発しているかのようだ。何故だ。

「何が可笑しいのですか！」

「だってそうじゃないか。君は野犬に遭遇した際に、姉が襲われても逃げるしかなかったのだろう？」

当たり前だ。小さいとき。それこそ小学校低学年くらいのおきに、家畜を襲うような犬に出会えば逃げるしかない。

「だから、姉は死んでしまった。私が見殺しにしたも同然じゃないですか！」

叫ぶ。先ほどの激昂とは違う、彼女を保ったままの叫びだった。

それだよ。と知聡は呟いた。

「それではどうやって。君達は姉を回収したというのだ？」

見殺しにするしかないと諦めてしまうような相手に対してね。

そう結ばれた言葉はまるで呪詛だ。

呪いのように。知聡の言葉は俺に浸透していく。

前の神酒さんも同じなのだろう。毒気が抜かれたかのように沈黙する。体も口も。

彼女は確かに、追い払ってと言った。

しかし、どうやって追い払ったのだろうか？

俺には記憶が無いから分からない。

確かに相手は犬だ。色々方法はあるかもしれない。けれど、相手は彼女の姉を。言葉のまま言えば、啞えて引きずっていったのだ。そんな相手に。俺たちは何をしたというのだ？

本当に。犬は俺たち子供が追い払えるようなものだったのか。想像するのは難しくない。きっと俺は泣きそうなくらいに動揺していただろう。それが、さっきまで遊んでいた女の子が、野犬に連れ攫われたのなら尚更だ。そのような相手に、俺たち二人は。どうやって野犬を追っ払ったというのだ？

震える神酒さんの手で、我に返る。

彼女も考えているようだった。必死に。そのときの情景を。

「でも。でも、私は思い出した！ あのときの光景を！ あのときの衝撃を！」

その光景とは、犬に食い散らかされている姉の姿なのか。

真っ赤に染まった犬の口。滴る液体は神酒さんの姉の血液。きっと、衣類の所々は破けていただろう。露出していた部分から食われたのだろう。ならば手足からは骨が見えていたに違いない。真っ赤な中にある、真っ白な骨。血液で汚れてしまっているだろうけれど、その骨はきっと、彼女の心に何かを残したに違いない。

その光景を思い出したというのか。

さぞ悲しかっただろう。

姉のことを思い出すというのは、つまり彼女の死因も思い出すということ。

できれば、忘れていたままの方が良かったのではないか。

震えながら叫ぶ彼女の手を。少しだけ緩めた。

これ以上、彼女に苦痛を伴ってほしくなかったから。

「そうは言うが、所詮記憶なんて主観でしかないわけだ。どうにでも改竄できる」

だからこそ、彼女は忘れていたのではないか。あまりにも辛すぎるからリソースが足りなくなったのだろう。彼女はそれを記憶することができなかった。いや、することを拒否したのだ。

「じゃあ、この記憶はなんですか！？」

彼女は叫ぶ。記憶を否定されることは、自分を否定されているようなもの。それは主観であるのだから当たり前だ。

「知らないよ。僕には見えないのだから」

知聡は素っ気無く。彼女を突き落とす。

彼女の手が戻るのを感じた。

それを知ってか知らずか。知聡は神酒さんを睨む。

「そもそも。君の記憶は正しいのかい？」

そして。この男は再び、呪いを吐く。

「でも、記憶が——」

「話をはぐらかすな！ 君はどうやって犬を撃退して、姉を回収したのだと聞いている！」

知聡はよく通る声で、まるで説法をする坊主のように。威圧する。

コイツは神酒さんに対して問いかけている。確かに説法すべきは彼女かもしれないけれど、まるで俺があの日を思い出せていないという事を、知っているかのようだった。それこそ。俺の主観であるはずの記憶が、知聡に覗かれているような、それこそ操作されているような錯覚さえを覚える。

力が抜けていく神酒さん。

彼女の主観は、ぐらついているのだろうか。自分の記憶を否定されて。

だが、俺だって完璧に思い出せているわけじゃないのだ。それこそ、今から七、八年前のこと。明確に思い出せるわけが無い。

彼女の記憶だって、まだ断片的にしか戻っていないのかもしれない。

それなのに。

「思い出せないだろ？ いや、思い出せるはずが無いんだ」

最も夢から。記憶から遠いはずの男が。

「君の記憶は間違っているのだから」

彼女の過去を全否定した。

「どういう、意味、ですか？」

困惑しているのだろう。彼女は舌の回らぬ言葉を、ただ発した。自己を繋ぎとめるのに必死なのかもしれない。過去を打ち砕かれそうになっている彼女のOSは、再起動を掛ける寸前なのだろう。

「言葉よりも証拠を見せたほうが良いね」

知聡はそういうと、ポケットから一枚の四つ折にした紙を取り出した。

それを広げるとA四用紙程の大きさになる。知聡と俺たちは二メートルほど離れているので、周囲の暗さで内容は読み取れない。

「これはね、先日に行った資料館で資料をコピーしてもらった物なんだ。そして、これが君の記憶の改竄を証明する手がかりなんだよ」

彼はそういうと携帯電話を開き、ライト機能を起動させて俺たちに近づく。俺たちのすぐ前で彼はその紙にライトを当てた。

それは知聡が読んでいた資料のうちの一つ。【Y市における印刷物】のページコピーだった。

「さあ、読んでご覧」

知聡に促されるまま、俺はその内容を読み進める。無言の彼女も同じように読んでいるのだろう。

見出しはともかく大きかった。これが一番の目玉だったのか。

広告ではなく回覧板だったが、作り方が何だか新聞っぽかった。

野犬駆除！

先日S町、M家の長女が野犬の被害に合い死亡するという事件が起こった。

そのことを受け、今まで放置していた野犬（犬神さんと呼ばれ、昔から家畜を襲うなどの被害はあった）を駆除することになった。

市議員が総出で山狩りを行い、その野犬と思われる犬を駆除することに成功した。

市長は「お盆が近く、あの寺付近はそろそろ賑うので、このタイミングで決行した」とあるが、以前から野犬駆除は住人側から常に上がる問題であり、事件が起きて初めて対応するという、市長〇〇氏の責任能力の低さが住人の反感を買っている。

回覧板にはそう書いてあった。

けれど知聡が言う証拠とは、どこのだろうか？

これでは神酒さんの記憶を否定するどころか、裏付けるだけのような気がするんだけど。読み終わったことを告げる為に、知聡の方を見る。とっくに神酒さんは読んでいたのか、知聡は頷いた。

「さて。それじゃあ一つ、前から疑問に思っていたことを聞いても良いかい？」

頷く他なかった。

「優治。君は何故このY市に。しかもこのS町に幼少時に来ないといけなかったのだ？」

それは、何故だろう。

来ないと出会わないはず。ならば来ている。当たり前だ。

なら何故俺はここに来たことがあったんだっけ。

「僕はそれがずつと気になっていたんだ。君がここに来なければ二人は同じような夢を見ることはなかっただろうしね。何故ここに君が来て。尚且つ君と神酒さんは出会ったのか。だから君の母親に聞いてみたんだよ」

——はあ？

「聞いたって、俺の母親にか？」

当たり前だろう。と当たり前のように返された。

同学年同士の繋がりがや、保護者同士の繋がりがならまだしも、学生が友人の保護者に会うというシチュエーションが、たまたまなく可笑しいというか、意外というか、驚くというか、コイツらしいというか。素直に感心する。

「まあ最初は話し辛そうだったけどね。何でも、君が小学校、それこそ三年生の頃までお盆の時期にはこのY市のS町に着ていたそうなんだよ。君の母親がこっちの出身らしくてね。でも、その年を境に。具体的に言えば、二〇〇〇年以降。このY市には行かなくなったそうなんだ」

二〇〇〇年。今から八年前だ。その頃はまだ小学三年生くらいだったはず。小学校低学年だ。汗が吹き出る。

奇妙な感覚に包まれる。これは、違和感だろうか。釈然としないというか。何かが符号しないというか。気落ちが悪い。手に汗を掻く。

「どうやら君が事件に巻き込まれたらしいのだ。そのせいで、君はその年を境に、このY市に来なくなった」

俺はやはり彼女と出会っていた。

そして。きっと犬にも遭遇したのだろう。

神酒さんは正しかった。

事件とは彼女の姉が食われるという物だ。

彼女等と一緒に遊んでいた俺は、それに遭遇してしまい。

リソース不足でそれを忘れてしまったのだ。

これがさっきの感覚の正体なのか。

だが、吐き気のようなこの感覚は、消えることなく残り続けた。

俺の手の中で、神酒さんが手を握った。力が籠っている。

「それが、証拠ですか」

彼女は強がっているだろうか。

こんなにも力が籠っているのに震えている。体と声が。

「そうだ。これが証拠だ」

知聡は吐き捨てるように告げた。

二人の会話は何だか可笑しい。

彼女の正しさは証明されたはずなのに。

俺は神酒さん。そして彼女のお姉さんと出会っていたというのに。

何故知聡はあんなに自信ありげなのか。

彼女を間違っていると否定した知聡。今の会話のどこに否定する材料があるというのだ？

「確かに私はその時、僧正さんと出会っていなかったようですね」

この人は、何か可笑しい事を言った。

出会っていなかった？

いや、出会っているだろう。

その証拠に俺はこのY市に毎年お盆に着いて、事件に巻き込まれたから来なくなったのだと、さっき知聡が言ったばかりじゃないか。

その事件というのは、さっき彼女が言っていた犬に姉が食われるというもので、神酒さんと俺が遭遇しているはずなのだ。

だというのに。これだけ証拠があるのに何故、神酒さんは出会っていないと言うのだ？

「優治。まだ分からないのか？」

知聡は呆れたように溜め息を吐く。

分からないも何も、分かっているから混乱しているのに。

「君は、お盆にこのY市で事件に巻き込まれたんだぜ？」

分かっている。そんなこと分かっている。

「そして、この回覧板が出回ったのは、二〇〇〇年の事件直後だ」

用紙の隅には、発光された日付が入っている。

それがどうしたというのだ？

事件の直後。姉が殺された後に回覧板が出回り、犬が駆除されたと触れ回るのはそんなに可笑しいことじゃない。住人を安心させる為に行われる正常な広報だ。

溜め息が聞こえる。それは知聡から漏れたものだ。

俺が悪いと言われているようで、何だか苛立つ。

「それじゃあ、もう一度この回覧板を僕が朗読してあげよう。重要な部分だけね」

コイツはそういうと紙を裏返し、よく通る声で朗読し始めた。馬鹿にしているのだと感じた。

「市局員が総出で山狩りを行い、その野犬と思われる犬を駆除することに成功した。市長は、お盆が近く、あの寺付近はそろそろ賑うので、このタイミングで決行した。と書いてある。この意味が分かるかい？」

そこは重要なのか？

野犬は市局員で駆除された。理由はお盆が近いから。なんということはない。

なのに、違和感に包まれた。

——お盆が近いということは、回覧板が出回ったのは、お盆の前だということになる。

つまり、お盆にしか来ないはずの僧正 優治は。野犬が駆除されてからY市に来ているのか？

つまり、神酒さんの姉が犬に食い殺されるという事件と、俺は無関係なのか？

確かに神酒さんの言うとおり、俺はまだ彼女と出会ってなんかいない。

やっぱり俺は彼女の姉を知らなかった。その記憶を思い出せないのは当然だ。

そして、俺は新たな空白を発見する。

では俺が遭遇した。それを機にこのY市に来なくなったという事件とは、一体なんだ？

俺に何が起きたのだ？

そう頻繁に事件とは多発するものなのか？

さつきから目まぐるしく俺の知らない、真実と虚偽が入れ混ざった会話と思索が行き交う。

「それでは、私は姉と二人で、野犬に襲われたのですね」

そうだ。俺がその事件に遭遇していないということは。彼女は一人でその事件と遭遇したということになる。神酒さんに姉が居たことは確実なのだから。

知聡は頷いた。

「それじゃあ、この記憶は——」

「僕には見えないが、恐らく色々な物が入り混じって再構成されたものだろうね。真実、優治は野犬騒動の際には居ないのだから」

知聡は、ようやく肩の荷が下りた、と少し苦笑混じりの溜め息を吐いた。

「でも！」

「舌色が濃い、ヒステリックな声を出す神酒さん。子種を残すことができずに寿命を迎える蟬は、このような声を出すんじゃないだろうか。」

「私は確実に、姉をこの塚の中に入れてたのです！」

それだけは間違いないのだと、彼女は叫んだ。

「そうだね。それは正しいよ」

素っ気無く、知聡はそれを肯定する。

コイツはどこまで彼女の感情を起伏させれば気が済むのだろうか。

そして、どこまでコイツは俺たちの過去を把握しているのだろうか。

「——教えてください」

静かに。でも脅迫しているような声色で、神酒さんは呟いた。

俺も知りたい。自分の忘れているものを。俺を構成している過去を。

「嫌だよ。これ以上教えると、絶対に君は暴れるから」

子供のように、コイツはそれを否定した。

ざあ、と風が吹く。既に空は暗闇で、星が点々と灯っている。

肌寒い。お墓はただでさえ心を冷やすというのに、空が近いからか、ここは特に寒い。

それとも、ここには多くの魂が彷徨っているからなのか。

「暴れて、しまうような内容なですね」

「さあね？ ただ言えることは、君はちつとも悪いことはしていないのだから、忘れるに限るってことだ」

この事実さえも、忘れるというのか。

「悪い悪くないは貴方が決めることじゃない！ 私が決めることです！ これは主観の問題なのでしよう！？ なら判断は私が入ります！」

だから真実を教えると、彼女は叫んだ。

「僕にだって教えるか否か、決める権利はあるんだぜ？」

一歩も引かずに、感情論を屁理屈で返す知聡。

このまま、話は平行線になるだろう。

どうしても知りたい神酒さんと、それを頑なに拒否する知聡。

どっちも聡明で、どっちも頑固だ。

ならばずっと、彼女が望み続けるまで、この話は平行線を辿るだけ。

そのように、思えた。

彼女が一瞬の隙をついて、俺の脛を踵で蹴り、拘束から抜け出し、落ちていた包丁を拾い、それを背後から俺の首筋に当てるまでは！

包丁をちらつかされて、そういえば自暴気味になっていた彼女の為に、少しだけ力を緩めたんだつたと、俺は今更気がついた。

もしかしたらその時からずっと、タイミングを窺っていたのかもしれない。

この人も一度言ったら聞かなそうだし。
だから、少しだけ怖かった。

幽霊のような彼女は、真剣に俺のことを殺しそうだから。

「僧正さんがどうなってもいいんですか？」

首元に冷たい凶器が当る。それが腹の部分だから余計に冷たく感じた。

「まったく。優治、相手が神酒さんだからって優しくしすぎだぜ？」

苦笑する知聡。否定できないのが辛い。

「黙れ！ どうなっても良いのかと聞いている！」

背中越しの彼女の声。密着しているからか、その激昂が少し耳に痛い。

「へえ。中々に悪役も様になっているね、君」

そう返す知聡は冷静だ。というか、もう少し心配してほしい。友達なんだから。

いや、友達だと思っているのはこっちだけかもしれないけど。

「僧正さんもあまり動かないください。首が切れます」

まったく。聡明な彼女とは言え、感極まったら何をするか分からない。事実自分の手首を切るくらいに自分のことを見失っているのだから。

そう思ったらようやく緊張感が出てきた。さつきから蹴られた脛が痛い。

「それじゃあ秋山さん。どんな判断をしますか？」

静かに、彼女は脅す。

「参考までに、どんな選択肢があるんだい？」

未だに余裕のある知聡。

もしかしたら、内心焦っているのかもしれないけど、俺にはそんな風には見えない。

「全てを語って平和的に解決すると、僧正さんの頸動脈が切れて、私も死ぬという二択です」
酷い話だ。

知聡の答え次第で、俺は死ぬのか。

できれば前者を選んでほしい。

けれど、彼女と一緒に心中するのも、少しだけ魅力的なように思えた。

ここに来るまでは置いていかれていた俺は、今は彼女と一緒にいる。

そんなことを考えて。俺はこんな事をされているのに。

未だ彼女のことを好きなんだと少しだけ呆れた。

さつきからこんなにも楽観的なのは、知聡は絶対に俺を助けてくれるだろうという確信で、

神酒さんは俺を交渉材料にしているだけだという希望だ。

「何故そんなに知りがる？」

神酒さんに問いかけられたその言葉は、やけに重く聞こえた。

「知ってしまったからですよ」

同じように、よく通る声で彼女は答えた。芯が通っているからだろう。

彼女は知っているのだ。自分こそが最大の謎だと。

そして、俺ではなく、知聡こそが全てを解き明かす鍵なのだ。

故に真実を知りたい彼女はこんなことをするのだ。

一度だけ、知聡は大きく溜め息を吐く。

まるで観念したかのようだった。

「仕様が無い。本当に出会わなければ良かったのは、優治と神酒さんではなく、僕と君達だったのかもしれないね。本当に偶然というやつは馬鹿にできない。総合は定理となり、また定理とぶつかり総合になる。が、今回ぶつかった結果がこれだ」

知聡は語り始めた。

首筋にあつた包丁は、少しだけ距離を離す。

「僕が君らと出会わず、夢を定義しなければ。過去を暴かなければ、君たちは平和に忘却という呪いに掛かったままだったのね。口は災いの元とは良く言ったものだ」

神酒さんの息を飲む音が聞こえた。

「良いぜ。それじゃあ過去を暴こうか」

知聡は呪いを解き始めた。

「それじゃあ、まずは神酒さんの過去を話そうかな」

どこから仕入れてきたのか分からないが、この際どうでも良い。同じように彼女も思っているだろう。黙って聞いている。少しだけ息遣いの荒い彼女が気になった。

「君と姉は、両親が共働きで他県に出ていて、基本はおじいさん、神酒源一みきげんいちさんに育てられた。

それまでは当たり前だね。君だけが育てられる理由が無い」

彼女は頷いた。それより、何故神酒さんのおじいさんの名前まで知っているのだろうか？

コイツの情報源は何だ？ やはりそこが気になってしまった。

「源一さんと、この寺の住職さんは仲が良かったらしいからね。君とお姉さんもここで良く遊んでいた。四人で遊んでいたんだね。まあ骨釣りなんかは、君たち姉妹しかしてなかったみたいだね」

知聡は苦笑する。当たり前だ。そんな罰当たりな遊び、古い人間が許すはずが無い。

ましてや住職さんなら当たり前だ。

考えて震えがきた。思わず包丁に首が当りそうになる。神酒さんもそれに驚いている。

「さて。それではここからは一応事実なんだが、少しだけ作りも入ることになる。僕は君たちの過去を知らないからね」

一番過去に精通している男が、顔を正す。

「神酒さん姉妹が野犬に出会ったのは確実だ。だが、どうやって襲われたかまでは分からない。分かっているのは、彼女のお姉さんだけが、犬神さんと呼ばれる野犬に殺されてしまったという事実だけだ」

声のトーンが少し落ちているのが分かった。

過去を暴く後ろめたさだろうか。

「そして幼い君は泣き叫んだらしい。その声に犬はお姉さんを銜えて逃げたのだろうね。住職が来た頃には犬が居なかったらしいから。そして彼は野犬を追った。上手く行けばまだお姉さんを助けられるかもしれないからね。そして、住職は神酒さんに警察を呼ぶように言ったんだ。幼い君は泣きながら頷いたとのことだ」

どう反応すれば良いか分からなかった。

目を閉じればその時の光景が目に浮かんできそうなくらい、その状況は克明に描くことができた。

断片的にでも、彼女の過去を。その周囲のものを見聞きしているからか。

「だが、住職はどうしても野犬を。彼女のお姉さんを見つけることができなかったんだ」

犬の行動範囲の広さからか。それもと、見当違いの場所を探していたからか。

「それは——」

「それは、私が先に姉を発見したからです」

知聡のことばを遮るように、神酒さんは語った。

「私が電話を掛ける為に寺に走っていると、山道から姉を銜えた野犬が現れたのです。でも姉は既に、姉ではなく——」

自分の記憶に、後ろで脅しているはずの彼女が震えている。包丁も同じように。今ならこの状況から抜け出せるかもしれないと思っただが、止める。

この状況を続けた方が良い。下手なことすれば彼女だけが死んでしまうかもしれない。

それに、俺だって全てが知りたいのだ。

「既にお姉さんは、パーツだけだったんだ」

彼女の言葉を、知聡が引き継いだ。

「確か、左腕、でしたよね？」

過去と照合しているのか、一瞬だけ迷った神酒さんは、ゆっくり肯定する気配をさせた

「遠くの方で姉を呼ぶ住職さんの声がしました」

「そして、それに野犬は再度逃げ行った」

はい、と小さい同意が聞こえる。

「そして。貴女はその姉の左腕を拾った。その左腕は根元や、その所々から、骨が見えていたんだ。だから、彼女は思い立ったんだね」

嗚呼。そう符号するのか。

「おじいさん達から話は聞いていて、彼女はそういう逸話などには精通していたからね。彼女は無縁仏塚に、お姉さんの左腕を投げ入れた。穴の中にある骨は、肉さえあれば蘇る。今し方入れたお姉さんの骨も例外なくね。骨は塚に入れないといけない。だから彼女はお姉さんを無縁仏塚に入れたのさ。神酒さんにとってその穴は、ギリシャ神話に出てくる魔女の釜のようなものだったのだろう。肉を入れれば、死体が蘇るね」

それは、逸話を信じるが故の。おじいさん達のことを信じるが故の行動だったのか。

小さいときは疑うことを知らない。環境が環境ならそれがより顕著になる。そして、限りなく人を疑うという事に意味を持たない環境で育った彼女は、怖かったが同時に安心したのかも。れない。ああ、これでお姉ちゃんは生き返ることができると。

だから怖がりもせずその腕を不気味だとも思わず、むしろ愛しそうに抱いて、無縁仏塚にそれを入れたのだ。これで後は肉を調達するだけだ。

そうすればまた。姉に会えるのだと信じて疑わなかったのだろう。

俺には不気味なだけだった無縁仏塚は、彼女にとっては姉との再会を約束する場所だった。そんな想像をして。勝手に複雑な気持ちになる。

確かに彼女は何もしていない。殺してなんか居ないのだ。錯乱して、その光景だけ思い出してしまつて、自分が殺したのだと思つてしまつたのか。見殺しにしたという。姉を生き返らせるためという大義名分をつけて、自殺しようとしたのか？ 俺に激昂したのは、自分を止めてくれなかったことに対する怒りなのか。それともただの、理不尽さの捌け口だったのか。

考えれば考えるだけ、思索に落ちていく。

そうだ。俺の巻き込まれた事件は？

俺の記憶はどうなるんだ？ 確実なのは、野犬騒動後の神酒さんと出会つていて、一緒に骨釣りをして、そして、何らかの事件に巻き込まれたということだ。

「何故、私は忘れてしまったのでしょうか？」

別のことを考えていた俺は、その言葉で我に返る。

神酒さんのそれは、自分の許容範囲外のことが立て続けに起こり、リソースが不足したことで、保存できる状態じゃないのに、したと勘違いしただけではないか？

俺の予想とは裏腹。そう説明するだろうと思つていたのに、一向にそれがなされる事は無く。一拍の沈黙の後。

「それはね、君に呪いが掛けられているからだよ」

俺の思考とは裏腹に、知聡は確信を持つてそう言った。

呪い。急に出てきたオカルトちつくな単語に驚く。

「——呪いですか」

神酒さんも驚いている。無理もない。呪いを掛けられていると言われて、困惑しない奴なんて居ない。

だが、コイツの口からその単語が出るのが、少し問題だ。

原則的に理論的な話をする知聡が。呪いなんて曖昧な単語を使う。常に真実を語ってきた男が、それを口にした瞬間。呪いという概念は存在するかのような錯覚を覚えてしまった。

「そう。記憶を失わせるための呪いだ」

だが。呪いとは言うが。それはきっと、悪いものではないはず。

彼女からその事件の記憶を消すということは、きっと善意で行われたに違いないのだから。

「誰が、何の為に？」

躊躇いがちに問いかける神酒さん。でも彼女もきつと分かっているのだ。自分の為に記憶を消してくれた人間が要るのだと。自分が忘れてしまったわけではないのだと。

「それも。知りたいのかい？」

知聡は問う。

「全てと言ったはずです」

「これからの過去は、君にとって余分なものだけ？ 何せ君の過去じゃなく、その舞台裏だ。それに君が知りたかった真実は、既に話したじゃないか」

確かに。当初の記憶については全て話している。

初期に抱いた彼女の超目的は、既に果たされているのだ。

「夢だつて、今なら全て定義できるはずだろ？ 穴はその無縁仏塚だし、【白骨群】はその中身を示唆すると共に、塚そのものだった。恐れていた【犬】は大神さんと呼ばれる野犬だ。恐れるのも無理は無いね。そんな事件があったのだから。【蘇る方法】は君が幼少時にお爺さんや、住職さんから聞いていた逸話を、そのまま思い出していただけ。自身が骨になってしまい、穴から空を見上げているのだから、君は姉を知らずに投影していただけた。姉の視点を。心境を。夢で知らずに再現していたに過ぎない」

それが、神酒さんの知りたがっていた夢の全てか。

俺の夢との関連性は、同じように知聡の中では定義してあるのだろうか。だが、それを聞くのはまだ憚はばられた。

俺の夢では、例えば【犬】は幼少時に神酒さんから聞いたのだろうか。【蘇る方法】も合わせて。【白骨群】は実際に骨釣りをする際に見たのだろう。穴だつて、彼女と同じだ。無縁仏塚を指しているに違いない。自身が白骨化しているのだから、彼女から姉の話を聞いたのかもしれない。隣に居た白骨は、神酒さんからお姉さんのことを聞いたから登場した、彼女だったのかもしれない。ならば、俺の夢だつて、もう定義されたも同然だ。

神酒さんが最初から蘇り方などを夢で知っていたのは、自身の体験があるから。俺は純粋に知らずに、後天的に神酒さんから仕入れた情報だったから、夢でも聞くという立場だったのだろう。

自分にしては満足のいく定義だ。

「それでも私は知りたい。このままでは、しなくてもいい引け目を。負い目を感じて生きていかなくتهはいけない。疑心暗鬼に囚われるのは嫌なんです！ 私の四日間はその連続だった！ それと一生付き合いなから私は生きたくない！」

だから、自殺しようと思ったのか。

思い出せば出すほど説明できない、あの光景だけを抜き取って思い出してしまったから。自分がかもしかしたら殺したのではないかと、疑心に囚われ。俺がその共犯者なのに、一人忘れて安穩と過ごしているのが許せなかったのか。

何故思い出してしまったのかは、何故忘れてしまったかとイコールではないかと考えている

のだろう。だから彼女はこんなにも食い下がる。

この様々な死者が眠る墓の上で。無縁仏塚の上で。彼女は未来を叫ぶ。

「教えるのは構わないけど——後悔するぜ？」

今日何度目か分からない知聡の溜め息。

同じく何度目か分からない覚悟を、俺は飲み込んだ。

神酒さんも後ろで。息を荒げて。頷いた。

「神酒さんはね、事故の後も記憶が残っていたのだ。まあ当然だね。無縁仏塚に姉を入れれば蘇ると思っていた君は、確かに衝撃的ではあったが、ある程度それを抑えることができたのだ」

リソースは不足しなかったということか。それでは別の要因で彼女は忘れたことになる。

「そして、君がそれを忘れなかったが故に。ある事件が起きてしまう」

「何が起きたんだ？」

俺のその言葉に、知聡は冷めた視線をよこした。黙っておけという意味なのだろうか？

「何を言う、君も知っているはずだぜ？ 何せその事件には君も関わっているんだ」

俺の過去が。俺の巻き込まれた事件が、ここで繋がるのか。

野犬騒動の時ではなく、今から語られる事件に俺は遭遇しているのか。

考えてみたら不気味な話だ。

俺は、過去に何をしたという事を覚えていない。

自分の記憶にない過去がある。過去とは現在までの軌跡だ。過去があつてこそ今がある。

それじゃあ、自分の知らない過去があるということは、自分を形成している物を知らぬという事。

体の中に異物が入り込んでいる感覚。その得体の知れない過去というウイルスが俺を舐め尽

くし、上書きしていく。

いやだ、こないでくれ！

怖い。埋もれてしまう。骨に。骨に！

「病むな。君は被害者だったのだ。安心しろ」

知聡はそういうが、違う。

自分の過去の内容ではなく、過去の有無自体が俺を不安にさせているんだ。

「少し脱線したが、その起こってしまったという事件は、神酒さんが無縁仏塚に肉を入れるというものだ。もちろん、一度や二度じゃあ、事件になんかならないよ。そもそも見つかりもしないかもしれない」

意識に湧く骨を振り払う。

「だが、繰り返し返せばいずれ見つかるのは道理。住職さんに神酒さんは見つかってしまうんだよ。無縁仏塚に肉を入れているのをね。そこで初めて、お姉さんの腕がこの塚の中に入っていることが分かる。一応、その際に説教をしたらしいのだけだね。神酒さんは何故怒られているのか分かっていないような感があったらしい。まあ当然だね。彼女は一切悪いことをしていないのだから。世間的にもただ塚に肉を入れているだけだし。まあ塚を開けること自体は悪いことか

もしれないけど、そこまでじゃあるまい。子供の悪戯レベルだ。それに、彼女にはお姉さんを蘇らせるという大義名分があったからね。これは悪いことであるはずが無いと彼女は取り付く島さえなかったようだ」

周囲で、がさ、という足音のような音が聞こえた。何かが風に舞って、ぶつかっただろう。いや。もしかしたら、犬かもしれない。血の匂いに釣られて、犬神さんが現れたのだろうか。

「そうして。お盆の季節となる」

静かに、その台詞は心に響いた。

「優治はこのY市に訪れ、お墓に参る。その際に、いつも通りにお墓で遊ぶ神酒さんと出会う。最初は普通に遊んでいたんだろう。大人達は遊ぶ二人をそのままに、後で迎えに来るか、くらの気持ちでその場を去る。お盆は親戚同士の集まりもあるからね。勝手に遊んでいてくれるならよしだ。そして二人は骨釣りや、この村の逸話などを話しながら遊んだのだろうか」

やはり、俺が先日見た少女は、幼いときの神酒さんだったんだろう。

自分の喉が、ごく、と鳴った。

脂汗が出るのを感じる。

包丁が無ければ拭きたい。

寒さに震える。

寒いのに汗を掻いている。意味が分からない。

「後は難しい話じゃない。こんなに肉を入れているのに一向に蘇る気配の無い姉。もしかしたらと思ったのか。それとも、魔が差したのかは知らないけど」

嗚呼。さつきから汗やら体やらが、何を訴えかけているかと思えば。

「神酒さんは、優治を無縁仏塚に落とすのだ」

俺は俺に、これを思い出してほしくなかったのか。

これが、俺の全ての真相か。

つまり俺の夢は、彼女から聞いたものから構成されたものではなく。

実体験だったんじゃないか。

あはは、と思わず苦笑してしまった。

なんだ。簡単だ。

成長して、神酒さんと高校で出会ったとき、俺が何故この人が妙に気になったのか。

初恋？ 笑わせる。

初めて人を好きになったと、俺は勝手に勘違いしていた。

なんていうことは無い。

俺はこの人を見ることで、過去を思い出そうとしていただけじゃないか。

それを。俺が初恋だと勘違いした。

馬鹿らしい。

それじゃあ、さつきまで自分が未だに好きだと呆れたのも。まだ思い出すべき過去があったからに過ぎない。

彼女と会うことで、俺の記憶が刺激され、夢を見て、思い出す。

俺は、確かに、彼女に落とされた。

体の良い生贄だったんじゃないか。

彼女の姉を蘇らせる為に落とされた、単なる肉の塊だ。

死にたい。

いっそのこと目の前に添えられている包丁に、首を当てて引いてやろうか。

そうすれば一発だ。

そうすれば全て彼女の思い通りになるんじゃないか？

俺ほどの肉の塊だ。当時の彼女の姉よりも一回り以上でかいだろう。

ならば、確実に蘇らせることができる。

そもそも俺の用途は贄なんだから。

思い出した結果がこれ。

やっぱり知聡の言う通りだ。

ろくな過去じゃなかった。確かに忘れていた方が幾分かマシだった。

好きだと勘違いしていた女は、過去に俺を殺そうとしていた。

嗚呼、恥ずかしい。

俺はこの二年間。ずっと勘違いしていたことになる。

嗚呼、馬鹿らしい。

俺は神酒 幸美の事なんか、好きじゃなかったのか。

過去という空白は埋まったが、同時に途方も無い喪失感に苛さいなまれた。

これは勝手に、振られたようなものじゃないか。

「そして、日が暮れて騒ぎになる。迎えに来てても寺に居ない優治に、彼の両親は慌てて捜索したらしい。まあ、幸い無縁仏塚から泣き声が聞こえてきたからすぐに見つかったらしいけど、それで終わりになるはずが無い。この事を任職に伝え、一緒に遊んでいた神酒さんの事を聞き出した彼の親は、顛末を神酒さんの両親に告げたんだ。まあ、当たり前だね。警察沙汰にならなかったのが、不幸中の幸いだ」

そう。必死だったんだろう。父親の大量に汗が染み込んだシャツとか。

痛がる俺を無理やり抱きしめて、ずっと泣き続けた母親とかを、思い出した。

「そして神酒さんの家では、姉の一件から不仲になっていた彼女の両親が、更に陰悪になっていったらしい。まあ、これも言うのは難だが、当然なのかもしれないね」

知聡は、少し悲しそうに呟く。何か思うところがあつたのかもしれない。

彼女の両親は共働きで忙しく、子供の相手をしてやれなかった。そして、長女の死亡。責任を擦り付け合っただろう。そして、神酒さんの無縁仏塚に肉を入れ続けるといふ、一般から見れば異常行動でしかない奇行に、彼女の両親は疲れ果てていたのかもしれない。自分達が何

をしたのだと、自分の悲運さを呪ったのだろう。

そして、俺の事件が起きる。

お前達の娘のせいで、息子が大変な目にあった。

そう、最後の一押しをしてしまったのだ。

一昨日に、寺に行く途中の道で、彼女は両親が離婚したと言っていた。

あの時は聞けなかったけど、きっとこれが原因なのだろう。

子育てで衝突し続けた彼女の両親は。

最後に、生涯の愛を誓い合った伴侶とも、衝突してしまったのだ。

「そして。その現状を見兼ねた人が居るのだ」

確かにこのままでは悪いほうにしか流れようが無い。

意味も無く一般的に言えば奇行を繰り返す神酒さん。

それらを受けて、明らかに不仲になった彼女の両親。

何かが起きれば、確実に取り返しが付かなくなるだろう。

「それは、君の大好きだったお爺さん。神酒 源一さんだよ」

思われぬ名前に、俺と神酒さんはそれぞれ、へ、だとか、え、と音を漏らした。

「彼もまた、責任を感じている一人だったんだ。そもそも、神酒さんの奇行の原因は彼にあるわけだし、お姉さんの件だって、気をつけていれば起きなかったかもしれないと、むしろ誰よりも気に病んでいたかもしれないね」

まあ、確かに終わってしまったことではあるが、そうなのかもしれない。

「そこで、彼は親友である住職の話を参考にして、一つの計画を思いついたのだ」

沈黙が流れた。

知聡は言い渋っているようだ。

見兼ねた神酒さんは答えを促すが、どうも歯切れが悪い。

彼女もこの先には辛いだけの過去しかないと、感じているのか。

まるで俺がそうであったように。

「それはね」

重い口を知聡は開いた。

息を呑む。

足元で、びしゃ、と鳴った。

「源一さんが死ぬことで、神酒さんの記憶を封じようというものだった」

呪いだ。

その方法で彼女の記憶を封じるといふのならば。

まさしくそれは、知聡の言う通り、呪いだ。

嗚呼。と後ろで力無く、声が漏れていた。

「忘れる方法を三つ、優治には話したと思うけど、神酒さんも聞いているかい？」

彼女は頷いた。さつきからちつとも力が籠っていない。包丁だつて揺れている。

「なら話は早い。源一さんはね、二番目の。催眠という方法で君の記憶を封じようとしたのだ」
嗚咽が聞こえ始めた。

悲痛な音が、墓にぶつかる。

「優治の事件の後に住職さんと相談して、計画を思いつき、君のお爺さん、源一さんは表向きに責任を取るという形で自殺したんだ。姉の墓に参ろうと、ここに連れ出した家族と住職の前でね。確か、今の神酒さんと同じように、頸動脈に包丁を当てたのだから」

知聡が呪いを解くにつれて、後ろから抱きしめられる格好で拘束していた、彼女の左腕に力が籠っていく。

抱きしめられながら、俺は泣き始める彼女に何もすることができない。

包丁は痛々しくくらいに揺れている。

もしかしたら弾みで首が切れるかもしれない。

今の彼女と同じように、彼女のお爺さんは自殺した。

これは偶然か？ いや、必然に決まっている。

「そして君はそれがトラウマとなり、記憶を閉ざした。結果。死者を冒瀆する発言に聞こえるかもしれないが、君のお爺さん、源一さんの呪いは成就した。人を呪わば穴二つとね」
大好きだったと言っていたお爺さんの死は、彼女に肥大な穴を開けただろう。

「その際にね、君は言われたはずだよ。お爺さんが死に、君に風穴を空けて深層に呪いを蔓延させるためにね」

風が吹き、無縁仏塚は鳴る。

まるで瓶の口を吹いているかのような、ぼう、という音。

呪っているかのようだ。

この場に居る生き物を、無縁者達が呪っている。

「骨は呪いの塊だ。忘れなさい。でないとまた大事な人を失って、いつか一人になるよ。」と

嗚呼、嗚呼、嗚呼。

その言葉が解除キーだったのか。後ろで神酒さんは壊れたテープレコーダーのようになる。

「ああああ、ああああ、ああああ、あああああ——！」

空空と、包丁は地面を叩く。

彼女はすぐ後ろで泣き崩れてしまった。

呪いが解けて、思い出してしまったのだろう。

彼女は一人で泣き崩れ、俺は無かったも同然の拘束から抜け出した。

あまり身動きしなかったからか、体が少し硬い。

「知聡」

泣き崩れて、まるで塚に祈っているような格好になっている神酒さんを見ながら、彼女の白いワンピースが黒く染まっていくのを見ながら。俺は呟いた。

「なんだい？」

疲れたとでも言うように。知聡は溜め息を吐いた。

「何故神酒さんのお爺さんは、忘れさせたんだ？」

聞かなくても良い事を。分かりきっていることを聞いてみた。

それは、俺じゃなくて彼女に聞かせたかったからした質問。

意図を察したのか。知聡はコイツにしては優しい口調で話し始めた。

「それは、神酒さんを愛していたからだよ。これからの彼女の未来を案じて、より良きものであるよう案じて。源一さんは神酒さんを狂おしい程に愛するが故に。呪ったのだ」

泣き声が響いた。

あんなにも気丈であった人が。この数時間でこうも感情を頭あたまになく。

嗚呼、彼女は生きている。

感情を表に出さない人だったから、俺には幽霊のように見えたけれど。

この人はちゃんと生きている。

記憶を思い出すことで。過去を埋めることで。彼女は感情も取り戻したのか。

過去から這い出て蘇ったのだろうか。

これが、彼女の知りたかった夢の終着だ。

「病む事はない。確かに君は姉を捨てたかもしれない。優治を落としたりしたかもしれない。けれどね。それは君の意思じゃない。君のお爺さん。いや、この村に根付いた意思だ。そうですよね？」

栄生和尚えいしゅうわう

知聡の言葉に、耳を疑う。えいしようわじよう？　なんだその呪文は。

「如何にも。君の言う通りだ」

墓の影から。闇が漏れ出した。

いや、黒い衣装。黒い袈裟だ。

そうか。一昨日にこの寺で見た黒い袈裟のお坊さんだ。

栄生和尚と呼ばれた黒い、皺だらけのお坊さんは、それまた白い服。見慣れた学生服を着た部長と一緒に現れた。

二人ともいつから隠れていたのだろうか？

怖い。

俺は前と同じように、黒い袈裟の和尚に恐れを、引け目を覚える。

「彼はこのお寺の和尚で、真言宗を宗派となさっている、神酒さんのお爺さん、源一さんと交友があった栄生さんだ」

明らかに二周以上歳が違うだろうに、彼は会釈をする。礼儀正しいのだろう。

けれど、どこかでこの人が恐ろしい。

気づけば神酒さんの泣き声が少し小さくなっていた。

「僕は神酒さんの母親、美由紀さんと、この栄生和尚からの情報を統合して真実に至ったのだ」
この人が情報源だったのか。

「君たちを追う際に、美由紀さんから和尚への連絡先を教えてもらって、尚且つ話を根回ししてもらっていたんだよ」

そして、Y市で合流したのか。

「それなら何故、知聡一人で現れたんだよ」

そこが不思議だった。何故部長が居ないのだろうと思っていた。彼女が居ないと神酒さんの家が分らないのに、と。

「彼から、最初から総てを明かすのは良くない。と時を窺うように指示されたのだよ。確かに最初から私が出るのは危険な様子だった」

重苦しい。しかし、よく通るといふ不思議な声は、俺を脅すには十分だった。時を重ねてきたのが窺えるその声は、俺みたいに芯の無い人間には近づき難い力を持っている。

「その方の存在そのものが、記憶の開錠を行ってしまう可能性があったからね。様々な記憶を一度に思い出してしまうことは危険だ。それこそ、神酒さんが優治を穴に入れた瞬間を思い出したとして、それがきちんと整然された記憶に置かれな場合、姉に続き優治も殺してしまうのではないかと錯覚してしまう。そんなことになれば、最悪な結果を生んでしまう可能性だってあったからね。必然とまではいかないけど、蓋然性がせいぜんはあった。芽は潰すに限る」
だから、待機してもらっていたのか。すごい周到さだ。

そして彼はこの結末を、過去に蒔まいた物を見届ける為に、ここに居るのだろうか。

「それと。一応君だって、和尚を見たら危なかったんだぜ？」

——— どういうことだ？

俺にも彼女と同じように、何か自動的に開錠される記憶があるというのか。彼に関連した何かが。

「君は無縁仏塚に落ちて、パニックになり、それで忘れてしまったと思っているのだから？」
違う、のか？

違うのだろう。何せコイツが言うのだ。

俺なんかより、こいつの方が、俺に詳しいに決まっている。

さつきから何が起こっているか、分からなくなってきた。

泳いだ目は部長と会う。彼女は何とも言いがたい、訴えるような目を向けている。

彼女のなりに同情しているのかもしれない。

「違うのだ。君は神酒さんに、塚のことを教えられていた。骨が大量に入った塚だとね。そして、その間違った性質も。それに実際に骨釣りという遊びもしていた。ならば、何故その遊び場だった穴に落ちて、何故記憶を失うほどの衝撃を受ける？」

そりゃあ、衝撃を受けるだろう。

何せ閉じ込められたのだ。パニックにならない方が可笑しい。

でも。例えば、事前にお化け屋敷に入る前に、お化けが出現する箇所を知っているようなも

のなのかもしれない。確かにそれじゃあ、混乱するほど恐ろしさは感じることはないだろう。「だがね。今の君ならいざ知らず。過去の君は多少の動揺はあったかもしれないけれど、それを飲み込むことができたのだ」

それは、その時点ではリソース不足に陥っていなかったということか。

分割してその塚を定義していたからだろうか。それとも、子供だったからかもしれない。

どの道不安になり、泣き声で俺は見つかる。だが、リソースは不足していなかった。まだ覚えていた。それは、二回に分けてこの塚を。神酒さんの説明から入れれば三回に分けてこの塚を定義したが故に、覚えていられたのか。

では何故？ 俺は過去を失った？。

何故俺は忘れる必然性があったのだ。

「そして君は無縁仏塚で見つかり、神酒さんの両親に事件のことを報告する為に、寺の住職。栄生さんに出会ったのだ」

寒気を感じる。

夜の山だからか。風通しの良い構造なのか。墓石群から魂が抜けているのか。

寒気を感じて俺は震える。そういえば下に何も着ておらず直接、夏の学生服を着ているのだった。ここに来たときは、まだ夕方で汗も掻いて濡れていたけど。既に服は乾いていた。

「そこで君は説教されるのだ」

俺がこの栄生和尚にか？

「まあ、当たり前だね。無縁仏で遊んではいけないというには及ばず、骨を釣るなんて論外だ。

和尚は君と神酒が遊んでいたのを知っていて放置したのだ。君に神酒さんを更生して欲しかったのだろうね。だから、何も知らない君に、少しだけ期待してしまったのだ。何も知らないが故にね。だが、逆に状況を煽るおこようなことをしてしまった。だから少しだけ熱が入ってしまったのかもしれない。和尚は優治の親に神酒さんの家の場所を告げて、彼をここで預かると称して、説教をしたのだから」

「拙僧も未熟だった。子供に期待してしまったのだ。教育は大人の努めだというのに」

許して欲しいと、和尚は頭を下げて陳謝した。

そんな許して欲しいも何も、どうすればいいか分からない。

大人に。いや、もう老体だという人に頭を下げられて、俺の方が悪い気持ちになってしまう。

それにこの人はお坊さんだし。こつちが申し訳ない気持ちになるというか。何だか落ち着かない。そもそも忘れていたのだから、別に気にしないというか。

ああ、そういえば。俺はいつ忘れたのだ？ 無縁仏塚で忘れないで、いつ忘れるのだろうか？

「そして次の日。今と同じように、自分の未熟さを優治に謝罪しに、母方の実家に和尚は向かったんだ」

それはつまり。

「だが。実際に謝っても優治は首を傾げる。そして和尚は、優治が昨日の記憶を無くしていることに気づいたのだ」

この人が俺のトラウマだということなのか。
神酒さんを見て過去を思い出そうとしたように。

この人を見ても、俺は同じように記憶の開錠を試みようとしていたのか。
「怒られても当たり前のことをしてしているからね。今更、怨む、怨まないは筋違いだよ、優治」
知聡は俺を睨んだ。

何も言われていなかったらきつとそのように、この人を怨んだだろう。

もしかしたら、俺が鬱^{うつ}つぼいのも、根底はこの人が作ったかもしれないと、勝手に責任を押し付けそうになっていたから。

「そして、和尚は。優治の症状。つまり、催眠による記憶の改竄を使えば、全て上手くいくのではないかと考えたのだ」

そこに、繋がるのか。

つまりこの人が。

人畜無害そうなこの坊主が。

この夢を作ったのだ。

「後は大体予想が付くだろう？ 和尚はそれを源一さんに話し、源一さんは思いつき、提案した。シヨックを与える為に源一さんが自殺をして、その隙に栄生さんが催眠を掛ける。もちろん和尚は反対したさ。だが、それを振り切って、突然呼び出された和尚の前で、源一さんは自殺をする。彼は源一さんの意を酌み、なし崩し的にそれを決行するに至る」

嗚呼。振り回されてばかりだ。

俺も。神酒さんも。源一さんも。栄生さんも。神酒さんの両親も。お姉さんも。

知聡達だって、夢に振り回された一人だ。

俺たちは無縁仏塚を中心に、野犬に追い回されたようなものなのか。

神酒さんは立ち上がった。

泣きながら。嗚咽を漏らしながら立ち上がる。

いつの間にか拾ったのか手には包丁。

ワンピースは血に汚れ。

左手には俺のTシャツが巻かれている。

「これが。全ての総合なのですね」

神酒さんは絞るように呟いた。

それに知聡は頷く。

「これが、君たちの夢の真相だ。君たちが知りたかったものはこのような総合なのだ。この世の中にはね、解かなくてもよい偶然というものには多々あるんだ。偶然なんてものは、自分が定義できない必然の仮の名さ。前にも言っただろう？ 確かに読み解いたのは僕らだ。だが、もうこれはある意味で適切な処置をされた後の出来事に過ぎない。今更蒸し返したところで死者が蘇るわけでもないし、過去が改竄されるわけでもない」

「それじゃあ、どうしろというのですか!？」

彼女の悲痛な叫びは。俺の深層をも代弁していた。
どうしろというのだ。俺たちはこれからどうすればいいのだ。

「――忘れろ」

知聡は静かに答える。さも、当然かのように。

「それが、この事故に施された、適切な処置だ」

それが確かに一番良いのかもしれない。

けれどそれは、大事な人を大事だと覚えておけぬ事。

でもそれだけは、彼女にしてほしくない。

痛みを抱えたままでも良いから、大切な人の事は覚えていてほしい。

なんて、身勝手なことを思った。

嗚呼、泣いている。

俺が好きだった人が、泣いている。

「けど！ 確かに、終わってしまったかもしれないけど！」

嗚咽混じりに彼女は鳴く。

まるで縄張りを主張する雲雀ひばりのようだ。

「私は償わないといけない！」

姉だけだったら耐えられたのかもしれない。

けれど、好きだったお爺さんまで、自分のせいで死んだのだ。彼女の傷は深い。

包丁を振り上げる神酒さん。

彼女の右腕を払い、羽交い締めにしよんとする知聡と住職。

空空からから、と地面に赤い包丁が落ちた。

もがく神酒さんは、死なせてくれ、と叫ぶ。

部長はそれを見てパニックに周囲を見渡し、ああ、と唸っている。

包丁を拾った。

さあ、過去という塚の扉を閉めよう。

俺たちは中を覗いてしまったけれど。

パンドラの箱には希望が。

この無縁仏塚には思い出が。

それぞれ最後に残っていたんだろう。

痛いだろうな。いや、絶対に痛い。

知聡は怒るだろう。

でも、俺は馬鹿だからこんな方法しか思いつかない。

たったこんなことで、彼女が元に戻るなら。

いや、戻る保証はないけれど。

それでも、少しでも可能性があるのなら。

俺が彼女の扉を閉めないで。

彼女の思い出が二度と釣られないように。

「神酒さん！」

生まれて初めて、こんなに大きな声を出した。

忘れていたかもしれないけど、覚えている限りでは一番の。

「この、粗忽者！」

知聡はやっぱり怒っている。でも絶対に止めない。

「貴女の代わりに、俺が貴女のお姉さんを蘇らせませす！」

部長の甲高い叫び声。

走り寄ってくる知聡。

知聡の分まで神酒さんを束縛する住職。

彼女と視線が交差する。

俺は笑う。それに彼女は凍り付いた。

痛いだろうな。

俺は握っていた包丁で左手首を引いた。

激痛。腕を麻酔も無しに縫われているかのように、線を引きいた箇所が赤く泣いている。痛み止めがほしい。痛い。包丁を強く握る。でないと耐えられない。歯を食いしばる。足の指を内側に向けて地面を掴む。でも痛い。涙が滲む。左手首から赤が面白いくらいに溢れる。痛い。痛い。痛い。痛い。こんな痛みを彼女は抱えていたのか。

無縁仏塚が俺と神酒さんの血で赤く塗れていく。

閉めない。あの暗渠を閉めない。

彼女の記憶を。辛い過去を。全てを覚えていても死なないように。

呪いを掛けよう。

「だから、貴女は生きて下さい」

——嗚呼、柳の少女がいない。

薄れていく意識の果てで、そんなことを思った。

あの日から一ヶ月後。俺たちは夏休みを迎えた。

やることも特にない俺たちは、夏終わって三ヶ月後にある文化祭に向けて作品制作に明け暮れている。

いや、正確には夏休みと文化祭の間に体育祭があるから、今の内作品を仕上げている方が利口だというのを口実に、美術室を集合場所に遊んでいるだけなのだけだ。

いつものようにやることも無く、俺は美術部に来てしまう。

普段はあまり積極的に学校に行かないくせに、休みになった途端に出席率が跳ね上がる自分が少し可笑しかった。

立て付けの悪い美術教室のドアを開ける。開いているということは、部長か誰かが居るのだろう。鍵を所有しているのは部長だけだし、部長が居ない場合は職員室に鍵を借りに行かないといけない。開いていれば、誰かが当然のように居るということだ。

おう、優治。だの、おはよう優治君。だの、僧正君こんにちは。だのに適当に挨拶をする。三瀬君達、ゲーム組は相変わらず同じゲームをしているようだった。まあ、夏に面白いゲームタイトルが無かったんだろう。

「お、僧正君」

部長は手を上げた。別にそんなことしてくれなくても見つけられるけど、素直に俺も手を上げた。何をしているのだろうと思っただけで彼女のところまで行くと、二つの机を使ってカードをその上に並べまくっていた。この人も相変わらずだ。

「はよー、もう昼食べた？」

俺は首を振る。食べてきてても良かったけど、夏のこの時期は食事を抜きがちだ。あまり食べる気がしないからせめて夜にはと、空腹を使って食欲を出そうとする毎日だ。

「じゃ食べる？」

部長の薦めるそのパンは、やっぱり黒かった。

「良いです。なんかそのチョコ融けかかっていますし」

それも美味しいんだけどなあ。と部長は薦めた。パンの袋を破り、パンを食べ始めた。案の定、口の周りにチョコが付いてしまう。それが少しだけ可愛かった。

「見ないですよ。分かっているから」

どうやら触れてはいけならしい。俺は逃げるように教壇の前でコップを取る。止めた。こんな暑いのに熱い珈琲なんて飲む気がしない。水で薄めても良いけど、それは面倒だし。

結局手持ち無沙汰のまま、部長のところに戻った。

今日はこの四人らしい。

しばらくカード群と睨めっこしている部長を眺める。何でそんなに真剣なんだろう？

「そんなにカードを並べて何かあるんですか？」

「今日はね——」

彼女が説明しようとしていると、美術室の扉が大きく音を立てた。

「部長居るね？ 勝負だ！」

声の主は知聡だった。まったく、来た途端にそれかよ。

「望むところよ！ 一回負ける毎に敗者は夏休みの宿題、十ページだからね！ 絶対よ！」

部長の威勢良い声は、知聡の売り文句を買いまくっている。

つか、最低だコイツ等。部長の異常なまでの真剣さがやっとなかった。

それじゃあ俺は二人の勝負の行く末を見届けて、後で丸写しさせてもらおう。漁夫の利とはよく言ったものだ。



「あーもう、ちよい休憩！」

二試合が終わって、全敗した部長は立ち上がった。

これで彼女は宿題を二十ページやらないといけない。

一人で全部やるのが当たり前だから、実は仕事が増えているわけじゃないんだけど、減る可能性があるのだから、彼女が悔しがるのは当然だ。

「下でジュース買ってくるけど、要る人は？」

全員手を上げた。

「いや、そんな持てないし。僧正君も来て」

結局俺も行くことになってしまった。まあ、珈琲を我慢していて喉が渴いているから、買いに行くことは別に構わないけど。

部長と二人で廊下を歩き、中庭にあるジュースの自販機に到着した。

「リクエスト聞いてなかったから適当で良いか。お茶にしとこ、お茶」

相変わらずだなあ。そこが部長たる所以なのかもしれない。

「ユキから何か連絡あった？」

自然に。無愛想に。部長はウーロン茶のペットボトルを渡しながら聞いてきた。

首を振る。連絡も何も、携帯の番号も家の番号も知らないのだ。連絡の取りようが無い。

「そっか。僧正君のところには来ているかと思ってたんだけど」

あの日から、神酒さんは学校に来ていない。作品を仕上げる気があるなら、そろそろ書き始めないといけない。

もしかしたら、忘れてしまったのかもしれない。辛すぎた今に蓋をして、何もかも。

「部長は連絡したんですか？」

彼女は静かに首を振った。二つに分けた髪が左右別に揺れる。

「連絡付いても、どう言えば良いか分からないし」

頷く。二本目のペットボトルを受け取る。

「ユキも君も。本当に扱い辛いね。若いつてことなのかな」
部長は笑った。

神酒さんはなんとなく分かるけど、俺もそうなのか？

そりゃあ、あまり気持ちの良い付き合いはできないだろうけど、無害な自信はあったのに。

「俺も、ですか？」

それが癩だったのか、三本目のペットボトルで頭を叩かれた。

中身が入っているから結構痛い。というか、ボトルが凹む音したし。実際に凹んでるし。

「当たり前じゃん！ 今も軽くトラウマよ！ 目の前で手首切っちゃってさ！」

「——もう、しませんから」

泣きそうな声でそんなこと言われたら、謝るしかない。

実際にそうなんだろう。知聡達はともかく、部長にはリソースが足りなくなる所じゃなかったのかもしれない。

「当たり前よ、ばーか。僧正君のあほ」

「すみません」

ちつとも憎しみがこもっていないその暴言は、俺の事を本当に心配してくれていたんだろう。申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

「あの日からずっと言えなかったんだから。忘れられっこ無いし。それは受けて当然なの！」

一ヶ月間ずつとか。それじゃあもつと酷いことされていてもしょうがない。これくらいで済んで良かったんだろうか。

「ユキにはどう言えば良いか分からないし、あの日から休んじやってるし。君は普通に学校来るし。どっちも同じならまだ良かったのに。正反対だったから、どうしていいか分かんなかったしさ」

普通だったからいけなかったんだろう。むしろ落ち込んでいた方が良かったのかもしれない。

「私の一ヶ月間のもやもやを、思い知ったか！」

最後に軽く、グーを頬に押し付けられた。ちつとも痛くなかったけど、痛かった。

「すみません」

「謝らないでよ。八つ当たりなんだから」

彼女は恥ずかしそうに言った。



「何で僕のペットボトルは凹んでいるんだい？」

知聡のその言葉に、俺と部長は首を傾げた。

まあ、部長のささやかな嫌がらせだけ。

もちろん、部長が俺を叩いて凹ませたやつだ。

「まあ、構わないけどね」

知聡はそういうと、キャップを外してそれを飲み始めた。追求するのも馬鹿らしいと思ったんだろうか。

「それより、何で部長の目は少し赤いんだ？」

「気合入れ直そうと、顔を洗って少し擦りすぎたの！」

ふうん？ と知聡は俺を眺めた。それに一応頷いた。正直部長のは苦しい言い訳だと思った。

しばらくして再開した二人の勝負を見届ける前に座っていた机から降りる。

「準備室行ってきます」

俺はペットボトルを片手に二人に告げた。

「はいよー。作品頑張ってね」

部長の返事を聞いて、俺は教壇から見て左にあるドアに手を掛ける。

ドアの上には美術準備室の文字。

中に入るとさつきまでの盛り上がりが嘘のように静かになる。この部屋はある程度の防音が施されているみたいだけど、このドアにはそれが無いのだろう、ドア付近はまだ賑やかだ。

鼻に付く絵の具や木材。紙の匂い。教室よりそれが強いのは、ここがそれらを保管するための場所だから。集中するには丁度良い。俺は大きく面積を取っている木製の大きなテーブルにペットボトルを置いて、同時に意識を切り替えた。

部屋の中央に一つしか置かれていないキャンバスの前に、俺は積んである丸椅子を置く。

一ヶ月前から。あの日以降から描き始めている絵だ。

あの日の出来事に折り合いを付ける為に、この絵を書き始めた。初めて油絵に挑戦したけど、初めてとは思えないくらい。いつもの俺とは思えないくらい、筆のノリは良かった。

書きかけのキャンバスに筆を置く。

集中して。一心不乱に筆を動かす。下手でも構わないから自分が良いと思ったことだけを、この絵ではやるつもりだった。下手で生半可な技術なんて、無粋な気がしたから。

描いて、失敗して。塗り潰す為に乾くのを待つて、塗り潰す。その繰り返しだ。

隣の部屋では、やれ閃光だの、やれ巨大化だの相変わらず美術部らしくらぬ賑やかさ。

これくらいの距離感が良いのかもしれない。まだ、俺はあそこに居たくない。

せめてこれを描き終えてから。あの日に折り合いをつけてからじゃないと。

俺は隣にはいけない気がする。

それからしばらく描き続けていると。

空からな空、と静かに木製のドアが開く音がした。

振り向けば幽霊。

いや、夏物の学生服を着た神酒 幸美さんが居た。真っ白の服に黒い髪。本来二つの色のみで構成されていたはずなのに、彼女の手首には赤いリストバンド。

少しだけ胸が痛んだ。

止められるはずだったのに、俺のせいで傷を追わせてしまったと言っても過言ではないのだ。

「お久しぶりです」

神酒さんは、静かに呟いた。

ひさしぶりです。と返事したと思う。

十秒ほど沈黙が流れた。

その沈黙の間俺は、少し竦れた彼女の頬骨を見て、まるで骸骨のようだと思った。

「隣に、みんな居ますよ」

居たたまれなくなって逃げの一手。

「いえ、今日は優治さんに会いに来たのです」

心臓が跳ねるかと思った。

冷たい。透き通るような声で、俺の名前を呼んだから。

「隣、良いですか？」

俺の後ろには沢山の椅子。それに頷く。

彼女は、かたがわ 空き、とゆっくりドアを閉めた。妙にゆっくりとした動作に、なるべく音を立てないようにしているのだと気づいた。

直接、廊下から入れる扉から来たのも、そういう事だろう。

俺のすぐ隣に木製の丸椅子を置く。この距離はなんだか恥ずかしい。

「油絵ですか？ 嗚呼、この絵は——」

穴から青空を見上げる絵。

これが、俺が見た夢の景色だった。

でも、この絵を見られてしまったのは、話の方向性も同じようになるしか無いように思えた。

「貴方の夢は、こんなにも綺麗だったのですね」

彼女は愛おしそうに俺の絵を眺めている。その妙な淫靡さに、思わず顔を逸らす。

「下手ですが」

「いいえ、とても綺麗。それに、貴方の夢は青空だったのですね」

神酒さんは俺に向き直る。その際に膝が当たった。

すいません、と俺は膝を引く振りをして彼女の視線から逃れる。

「私の夢では暗闇でした。あんなに共通項が多かったからでしょうね。二人とも当たり前に空の色は気にしていなかった。時間帯すら共通だと思っていた。こんなに見え方が違うのに」

彼女は苦笑した。俺は笑い所が分からず、ただ表情を崩した。

「あの日はすいません」

何のことだろう？ 謝ることはあれど謝られることはしてないはずなのに。

「私、あんなに泣いたのは初めてです。ああ、いえ。きつとおじいちゃんが亡くなったときも同じように泣いたんでしょうけど」

俺と彼女は同じ絵を見ながら、隣同士で一ヶ月前を幻視する。

別に気にしなくていいのに。正直俺は未だに最後の日が不明瞭なんだから。

手を見せて下さいと、彼女は呟いた。

到来する寒気に震えながら、俺は右手を差し出す。

一ヶ月ぶりに彼女に触れて、少し恥ずかしい。

反対を、と言われて合点がいく。

傷を見たいんだろう。俺は少し躊躇いながら、彼女の冷たい手のひらに左手を乗せた。

嗚呼、私のせいで。と消えるような声で神酒さんは俺の手首に出来た一文字の傷をなぞる。

もう痕でしかないそれから血が滲むことはないが、彼女が強くはないけど何度も擦るもんだから、少し怖くなって手を引いた。

あ、と声を零す神酒さん。少しだけ俺の手を手持ちぶさたに眺めた後、彼女は椅子の下に置いていた通学鞆から小さな紙袋を取り出した。

「安物ですが」

彼女はその袋を俺に差し出した。

「開けてみて？」

彼女が頷くの待って、俺は破らないようにゆっくりと開封する。

中には、まるで絵の具のように、青いリストバンド。

お揃いなんです、と自分が巻いている赤いバンドを見せた。

恥ずかしい。人から、このようなものを貰うのは初めてだったから。それが、異性からなら尚更だ。

俺は早速、左手首を覆うようにリストバンドを巻く。

少しきつかったけど、こんなもんかと割り切った。

「優治さんは私の夢を読み解いてくれた。あの夢は私の大事な物に繋がる鍵でした」

頷く。名前で呼ばれるのがなんだかこそばゆい。いきなり呼ばれ始めたから耳が慣れていないだけだと思った。

「そして、貴方は私の為に、何度も傷を負った」

一ヶ月前からでは無く、過去も含まれているんだろう。心も体も。

「何故、私の為にそこまでしてくれるのですか？」

鼓動が早くなる。どうしよう。

これはつまり、そういうことだよな。

恥ずかしい。

夏だからだろう。汗を掻く。

何か言わないと。折り合いをつけないと。

「それは――」

俺は彼女のリソースを不足させてやろうと思った。